讀千古書
友天下士

蘇峰 德富猪一郎

我が交遊録

東京
中央公論社版

本書の由來記

本書の由來記

本書は中央公論社長島中雄作君の熱心なる慫慂によつて出來たものである。當初は、それ程氣が進まなかつたが、島中君及び中央公論社の雨宮君などの煽動に乘つて、漸く稿を起すことゝなり、その題目も專ら政治、若くは社會方面の人とした。これは何れも純客觀的に語つたものでなく、常に一方に予自身を置き、自他の對照に於て語つたものであるから、單純なる人物論評とは自らその

選を殊にするのも、止むを得ない次第である。

×　　×　　×

『交遊錄』と題したるは、聊か僭越の感ないでもない。實は『蘇翁夢物語』と題したが、強いて『交遊錄』の表題を加へて貰ひたいとの注文もあり、それも一理ありと認めたれば、その通りにした。けれ共本書中の主人公等は何れも予の先輩であり、その程度は同一でないが、予を啓發したる先覺者である。又その中には、心から予が仰ぐ師もあり、心から敬愛する親の如き先生もある。

×　　×　　×

若し眞に予の交友を語らんとすれば、年輩に於ても、社會的位置に於ても、今少しく予と接近したる人々を選

擇せねばならぬ。予はモルレー卿の所謂『友達を作る天才』ではないが、長き公人としての生活中には、かなり多くの交友が出で來つた。若し他日機會があらば、それ等に就いても語つて見たいと思はぬでもないが、只だ惜むらくは、年齢と與に記憶力が稀薄となりゆくことだ。

× × ×

本書を成すに就いては、全部八重樫女史の筆記したるものである。又た本書の出版に就いては、八重樫昊君に負ふところが鮮くない。

昭和十三年二月盡日

於民友社樓上

蘇峰七十六叟

我が交遊錄　目次

伊藤、大隈、山縣

薩長人士

川上操六と桂太郎

政治家の離合集散

板垣退助と大隈重信

八方より眺めたる大隈

小說よりも奇なる生涯の 陸奥宗光

遠近より見たる勝海舟

新島襄先生

長州三尊の話

伊藤博文公

伊藤公筆蹟

夢物語の前口上

先年來中央公論社長島中雄作君屢〻予に向つて、予が親しく交遊したる諸政治家に就いて語らんことを需めらる。好事にも程がある。予は政治家でも無ければ、役人でもない。政黨員でも無ければ、代議士でもない。政治家などゝいふ人々と芝居を打つたことも無ければ、一座を共にしたこともない。固よりその役者に接觸したることもあり、又たその芝居を見物したることもあるが、それは只だ新聞記者てふ立場からのことに過ぎない。

されば、その見ることも、自ら皮相に止つて、筋書の骨髓に徹するなどゝいふことは、容易に出來難きことである。況んや一事才かに去れば一事來り、朝に驢尾を送れば、夕には牛頭を迎ふる如き、變遷極りなき世相に於ては、夢中夢を見る如き有樣にて、その記憶さへも殆んど朧氣になり、今更ら取留めて語るべき珍談、奇聞も無い。

福地櫻癡居士の前例

よつて屢々これを辭したが、強ひての注文に就き、聊か考へ直すところがあつた。それは二昔も前のこと、中央公論社長が予に注文したると同樣の注文を、予は民友社々長として福地源一郎君にした。福地君も其時には別段好ましくはなかつたであらうが、身邊事情の爲にこれを諾し、その爲に出來たのが、『幕府衰亡論』『幕末政治家』『懷往事談』の三冊である。これは當時福地君が如何なる積りで書いたかは知らぬが、孰れも今日に於ては、見遁し難き貴重の史論若くは史料となつてゐる。

現在予自身がこの三冊に負ふところ鮮くなく、今も尙修史机案の上にはそれを並べてある。されば予が夢物語も亦た若干の功德を後人に貽さないとも限るまい。されば島中君の請ひを容れ、これを試むることゝした。君は興味本位でやつてくれと申されたが、予としては勿論それに異存のあらう筈もない。予は我儘なる生來にて、自ら興味もなきことをするのは寧ろ不可能である。

但だ予の興味と中央公論社長の興味と、將た讀者の興味と一致するや否やは、正直のところ懸念がある。併し悉くとは云はぬが、その場面若くは主題の如何に依つては、必らずしも興味を惹くとも限らないが、又た惹かないとも限らないと思ふ。

新聞記者としての交遊範圍

餘り前口上が長くなるが、更らに一言を要することがある。予は正直のところ非社交的のものである。一人で世の中を歩くことも出來れば、一人で一生を樂しむことも出來る者だ。交友は予にとつては大概偶然の出來事にして、意識的に出來たものではない。モルレー卿はチエンバレンを稱して、Genius of friendship 卽ち『交友の天才』と云つたが、斯く稱するモルレー卿自身も恐らくはその一人らしく予には察せらるゝ。予自身は總ての天才に缺けてゐるが、特にこれにも缺けてゐる。

但だ一度交りたる者は、大なる理由なき限りは、一生相渝らないだけのことは、予にもあるか

と思ふ。されば予の交遊は二十年三十年乃至五十年以上永續してゐるものゝみであるが、それ等は殆んど今ま故人となつてゐる。それを思へば、予自らも聊か淋しく感ぜぬではない。併し所謂る名公巨卿などゝいふ連中には、予自ら強ひてその門下に趨つたこともなければ、近付きを求めたこともない。

實は予が新聞記者たる職務に忠實なる爲に、止むを得ず接觸し、その接觸が度重り、歳月を經て漸く親近するに至つたといふ程度に過ぎないのだ。併し斯く交友を消極的の立場から見出したにしても、その期間が半世紀以上に亙るからには、その範圍は勢ひ廣くならざるを得ないのである。從つて總てとは云はぬが、單に知人といふ程度から云へば、明治二十年代より大正の終りまでの凡そ其名が人名辭書に載る程の人ならば、殆んど知らぬ人は無いだらうと思ふ。併し今茲に語らんとするは、その中に於て、幾分か語り甲斐のある人々に就いて語るつもりである。然もその語るところは、列傳體でも無ければ、評論體でも無く。描くところは、等身像でも無ければ、全身像でも無く。只だ予の朧氣なる記憶の中に今尙ほ殘つてゐる、或物を引出して語り、且つ描くものにして、所謂る痴人夢を說くとは、此事であらう。

過去の夢、將來の夢

夢にも幾通りの夢がある。過去の夢もあれば、將來の夢もある。予が今語るところのものは、畢竟過去の夢に過ぎない。併しながらこれを只だ昔語りとして受取らるゝことは、予の望ではない。歴史家の仕事は、一言にして云へば、過去の時代を再現することだ。併し歴史家の仕事がそれのみに止まると思ふは、餘りに歴史家を見縊りたりと云はねばならぬ。

予が過去の夢を語るのも、これを徒らに過去の話としてのみ受取らるゝことは、寧ろ當惑千萬だ。この夢は現在を貫いて、更らに將來の夢にも相通ずるものである。凡そ世の中に夢無き人ほど憐れむべきものは無い。人間の現在はその生活の三分の一に止まり、三分の二は過去、將來に跨つてゐる。卽ち夢を見ぬ者は過去も無ければ、將來も無きものであつて、これ程生活の落寞なるものはあるまい。

所謂る生甲斐ある生活とは、夢の多き生活である。夢が只だ夢として消えるか、又たそれが實

在として現生するか、それも豫じめ期すべきことでは無く、そのこと自身が更らに夢に屬するものと云つてもよからう。

長州の三尊――伊藤、山縣、井上

先づ第一に語らんとするは、長州三尊の話である。子爵品川彌二郎君は、伊藤、山縣、井上を目して『長州の三尊』と云つてゐた。これには何人も異論はあるまい。長閥を背負つて立つたのは、維新の當初に於ては、木戸孝允、廣澤眞臣、大村益次郎といふところであつたらう。若し高杉晋作が生存したらば、筆頭に掲げねばならぬであつたらうが、彼は不幸にして維新の幕の開かんとする刹那、病にて斃れた。而して廣澤も大村も、維新開幕後、未だ幾許もなく、何れも刺客の手に斃れたが。只だ木戸のみは明治十年西南の役の突發後まで生存し、十年五月四十四歳にて病を以つて逝いた。

されば所謂長州の巨頭は、明治十年を限度として、殆んど舞臺から去つたが、然もその後に

殘つて、大なる長閥を代表したるものは、何と申しても、伊藤、山縣、井上、この三人であらねばならぬ。而して彼等の壽命は何れも長く、伊藤は明治四十二年十月二十六日ハルピンにて横死し、井上は大正四年、山縣の如きは、大正の御代の殆んど末期、即ち大正十一年二月一日に逝いた。それで先づ話をこの長州三尊より始むることゝする。

井上との會見

順序として、先づ予は如何にして彼等を知つたかといふことに就いて語るであらう。予が今後語るところは、大概明治十九年の初冬、『將來之日本』刊行を劃期として、當時漸く隆盛の運に向ひつゝある、熊本なる大江義塾を閉鎖し、一個年の定收入漸く三百六十圓に過ぎざる危險狀態であるに拘らず、背水の陣を張つて父母を奉じ、家を擧げて東京に出で來りたる以來のことであるが。中には偶ゝその以前に溯ることもある。井上との接觸の如きが、即ちその一である。思ひ出せば古いことである。明治十三年夏の初めであつたらうと思ふ。當時井上は工部卿とし

て、即今米國大使館の一部となつてゐる、靈南坂上の官舍に居た。予は大久保眞次郎――久布白落實女史の父――及び過日米國にて釣魚の際、過つて氷の中に辷り落ち、溺死したとの報を傳へたろ、家永豐吉三人で訪問した。

三人中予が最も年少にて、十八歳。家永が十九歳。大久保は既に二十を若干過ぎてゐた。如何なる手續きで面會が出來たか、多分大久保が書簡を投じて訪問の旨を告げ、斯くして面會が許されたものであらう。豫て井上馨といふ名は、極めて評判惡しき人と聞いてゐたから、予は天下の善人君子を見る積りで行つたのではなかつた。謂はゞ世の所謂る奸雄を見るつもりで行つたのであつたが、その見掛けは見窄らしき漢にして、顏は恰も塵紙を揉んで、更らにそれを伸ばしたる如く、刀傷だか、打傷だか判らぬ傷が、頤の邊を深くかすめて容易ならぬ容貌であつた。聲は少しばかり嗄がれたる、稍ゝ金屬性を帶びてゐたが、その應待振りは、如何にも明快で、何んとなく人を惹き付けるが如くあり、予も默つてその話を聽いてゐたが、自ら膝の進むを覺えなかつた程だ。(尤もその時は椅子に腰掛けてゐたから、膝の進むことも出來なかつたが。)

けれ共三人の中で井上の眼に入つたのは、大久保でもなく、予でもなく、恐らくは家永豐吉で

あつたらうと思ふ。彼が三人の中で最も眉目秀麗であり、又た最も英學にも長じてゐたから、自然井上の關心は彼に集つたであらうと思ふ。予に對する井上の印象は、恰も飛蝗の如く痩せこけたる蓬頭亂髪の田舍書生と見ただけであらうが。予の方からはこの一回の會見で、井上が何人であるかを、悉くとは云はぬが、稍〻知ることが出來た。

山下町の官舍にて山縣首相と相見る

山縣との關係は、それよりずつと後のことである。時は明治二十三年四五月の交、彼が初度の首相となり、尙ほ前から引續いた內相を兼任してゐた際であつた。只今帝國ホテルの一部となつてゐる山下町の內務大臣官舍に於て相見た。何人の紹介であつたか覺えないが、多分淸浦奎吾伯であらうと思ふ。彼は當時警保局長であり、而して彼と予の從兄、銀行局長藤島正健とは親友であつたから、藤島に依つて淸浦を見、淸浦に依つて山縣を見たのであらうと思ふ。予はそれ以前山縣が未だ內務卿といふ時に、熊本縣に來り、予の父等によつて設立せられたる、共立學舍

を巡視したる時に、近く彼と相見たことがある。それは明治十四年か五年の頃であつたと思ふ。山縣の容貌は顴骨が高く秀いで、眉が迫つてゐる。面は一寸四角であつて、別段大豪傑といふ如き特徴は無いが、何よりもその談話術の上手さに驚いた。如何にもしんみりとして委曲を盡してよく語つた。而してそれよりも驚いたことは、よく相手をして喋べらせることだ。なか〳〵話上手であると同時に、更らに聽き上手であつた。併し予は當時に於ては只だ一通り彼から老西鄕の話、特に廢藩置縣に際して、老西鄕に面談したる際の話などを聽いたことを覺えてゐるが、その他のことは悉皆忘れてゐる。但だその會見は夜であつて、予の爲に特にその時間を設けてあり、その話も多端に亙り、恐らくは數時間に渉つたらうと思ふが、新聞記者として得るところが甚だ鮮なくなかつたといふことだけは、覺えてゐる。

伊藤との會見

――君も勤皇には異存あるまい――

伊藤と相見たのは、尚ほその以後のことである。それは第三次伊藤內閣、卽ち第二次松方內閣

の瓦解後、伊藤が第三次内閣を組織したる際であつて、卽ち明治三十一年の初である。予は野田大塊と相伴つて、伊藤を永田町の總理大臣官邸——今は農林大臣官邸となつてゐる——に訪うた。これも夜である。伊藤は食堂に於て我等兩人を引見し、ストーヴに相對し。伊藤はストーヴの前に何やら土瓶の樣なものを置き——多分酒でもあらう——それを溫めて、話の間合ひ間合ひに、獨りで酌んで、獨りで飮んでゐた。

その時に伊藤は予を見るや否や、『德富君は勤皇には異存はあるまい』といつたから、『日本國民として誰しも勤皇に異存のある者はありますまい』と答へたところが、『それならば宜し。君も亦吾黨の人だ』と云つて、四方山の話をした。その時『今、巳代治（伯爵伊東巳代治）から斯る手紙が來た』と云つて、その手紙を讀んで聽かせてくれたが、それは當時の政況に就いての巳代治氏の報告であつた。その時野田と予はその報告が大いに事情を間違へてゐること、事實に相違してゐることを、逐一指摘して、兩人で隨分ひどくやりつけてゐたが、隣りの應接間と食堂の戶が開いてゐて、應接間には巳代治氏の書簡を齎らし來りたる某氏が居たのに氣付かず、隨分手離しに兩人で巳代治氏の惡口を云つたことは、それを隣室から手に取る如く聞いてゐた巳代治氏の使

者県氏から後日永づて、自ら苦笑するを禁じ得なかつた。

實はそれ迄伊藤とは随分逆縁が長く續いた。予は井上には何んとなく同情があり、山縣にも別段反感は無つたが、伊藤といふ人だけは何やら蟲が好かなかつた。その理由の一は、同志社で教育せられたピユウリタニズムの爲であつたかも知れぬが、それよりも伊藤が軟派外交の親玉であり、藩閥政府の總帥であるといふ樣な點であつた。併し伊藤と面會する頃には、稍ゝ自分は伊藤に就いては再檢討をしつゝある際であつたから、會見したるが爲に伊藤に就いての意見が變つたといふよりも、變つたから會見するに至つたといふ方がよいかも知れぬ。

長州三尊相互の關係

長州三尊といふが、年齢から云へば、井上、山縣、伊藤の順序となる。井上は天保六年十一月の生れで、山縣は天保九年四月の生れ、伊藤は天保十二年九月の生れである。門地から云へば、井上は山口附近に於て、世祿百石の士で、彼が養子に入つた志道家は、世祿二百二十石である。

それに引き換へ山縣、伊藤は、その祖先は兎も角も、當時に於ては輕輩の下級で、松陰先生はよく伊藤のことを、胥徒利輔と書いて居られる。伊藤は來原良藏に引立てられ、幼にして松陰の門に學んだが。山縣は當初は武藝一點張りで、後に漸く節を折つて松陰門下に入つた。然も松陰先生と親炙したことは、左程深くは無かつたと思はるゝ。井上は全く普通の武士として生立ち、夙に蘭學を修め、世子の側近に奉仕した。然るに文久三年五月、伊藤其他と英國に赴いて以來、最初には井上、伊藤と云ひ、後には伊藤、井上と云ひ、兎も角も死に抵るまで相渝らない親友となつた。山縣は終始武を以つて立ち、奇兵隊に於ては大幹部の一人となり、長州の軍人として大村以外には高杉既に逝いた後は、他に肩を並ぶる者は無かつた。若しありとせば山田顯義ぐらゐのものであつたらう。爾來明治の御代から其の終りに至る迄、この三人は日本の歴史とも離れられぬ關係を持つてゐるが、彼等三人も亦た三巴の紋の如く、互に渦卷いて順緣、逆緣、切つても切れぬ關係を打出した。

『國民之友』時代と伊藤、井上

話は恰度予が『國民之友』時代に移る。『國民之友』時代と名付くべきは、先づ明治二十年から二十三年『國民新聞』發行までの、約三年間を期限とする。予が『國民之友』を發刊したのは、明治二十年二月であつたが、その當時の內閣は、第一次伊藤內閣で、伊藤は首相、井上は外相、山縣は內相であつた。元來『朝氣は盛んにして、暮氣は衰ふ』は、伊藤の癖であつて、明治十八年の末に、初めて內閣を組織したる、卽ち日本開闢以來、最初の總理大臣となつた伊藤も、當時の意氣込みは最早や消磨して、稍ゝ倦氣と飽氣とが生じて來たらしく思はれた。

然るに如何樣にしても、條約改正だけはやり遂げねばならぬと、一徹に思込んだる井上は、此處を先途と、踔厲風發、盛んに切廻した。それで當時は伊藤內閣と云ふが、事實は井上內閣と云ふが當つてゐたかも知れない程、井上の勢力は內外上下に及んだ。當時次官には靑木周藏あり、辨理公使として陸奥宗光が殆んど政務局長の仕事をしてゐた。謂はゞ井上はより多く總理大臣の

仕事をして、その外務大臣の仕事は、青木に一任したと云ふも不可無つた。次官と云ふも青木の次官は、素晴らしき勢があつた。陸奥などは心中には何んと思つたか知らぬが、一も青木、二も青木、三も青木と云つて、何事も青木と相談し、又た青木の旨を承けて事を爲す風をしてゐた。これは決して予の想像ではない。予は陸奥から青木に紹介せられ、陸奥と相乘り車に乘つて、青木を訪問したことを覺えてゐる。

貴族的歐化主義の繁昌

當時條約改正をするには、兎も角も日本を歐洲流に改良せねばならぬといふことになり、頗る改良流行となつた。文字の改良でローマ字會が起り、演劇の改良會が起り、甚しきは人種改良などゝ云つて、それが最も世間に流行した問題であつた。予は當初からこの傾向に對して、不快の念を以つて眺めてゐた。予はこれを稱して、貴族的歐化主義と云ひ、若くは貴族的急進主義と稱した。何れにしてもその貴族的と云ふことが氣に喰はなかつた。併し又たその反對者は倘更

ら氣に喰はなかつたから、自然彼等とは一脈相通ずるものがあつた。
當時井上のグループには、青木周藏、野村靖、陸奥宗光、西園寺公望、光妙寺三郎等があり。而して加藤高明なども當時は左程名を成さなかつたが、然も陸奥抔は彼を吾黨の士と稱んでゐた。兎に角井上の門下には凡有る人物が集つてゐた。齋藤修一郎の如きは、その秘書官であつたかと覺えてゐる。伊藤は固よりその運動に反對したではあるまいが、彼は寧ろ超然として、井上にそれ等のことを一任してゐた。山縣も亦たその通りである。山縣でさへも鹿鳴館の假裝舞踏會には、昔名乘つた萩原鹿之助といふ指物を背に負ひ、奇兵隊の服裝で出掛けた程であれば、勿論その反對者でないことが判る。一言すれば歐化主義は山でも川でも、殆んと一切を動かし來つた。而してその運動の中心點と云はんか、若くは指導者と云はんか、それは井上であつた。

井上の突撃力

玆で井上なるものに就いて一言したい。井上といふ人は林を見るよりも、寧ろ木を見る人であ

る。林相の觀察よりも、一本、一本の木を勘定する人である。伊藤は兎に角先づ大體の見渡しをつけて、然る後に徐ろに手を下す方便を考へるが。井上は當るを幸ひ、當面の問題から處分して掛るのである。而して一度その事に熱中すれば、馬車馬も同樣、他を顧みるに遑あらず、總てのことを犧牲としても、それに向つて猛進するのである。

三人の中にて誰が最も勇者であるかと云へば、恐らくは井上を第一に推さねばなるまい。而して又た誰が最も一騎打ちの有力者であるかと云へば、井上を推さねばなるまい。桐野利秋さへも『井上聞多が士族兵一隊を率ゐて來る場合には、その向うに立つことは骨が折れる』と云つた相であるが、彼の突擊力には、矢も鐵砲もたまつたものではない。

話は維新の當初にかへるが、當時大阪に居たる德川慶喜を上京せしむべきか、せしむべからざるかといふことが、朝廷の大問題となつた。その時に井上は恰度参與に召出された當初であつたが、三條、岩倉等に向つて『何とか一日でもよいから私を公卿にして頂きたい。公卿になれば大びらに德川慶喜に近付くことが出來る。さうすれば彼を一刺しに刺殺す』と云つた。又た慶喜が愈〻會津、桑名を先鋒として大阪から出掛けて來た時に、それを拒むか、拒まぬかの問題に就

いて山内容堂は、『若しそれを阻止するならば、自分は兵を引いて歸國する』と威嚇的の文句を並べてどなつた。然るに井上は『歸國したければ勝手に歸國さするがよし。さすれば朝廷では德川の八百萬石の上に、土佐の二十四萬石も併せて回收することが出來るから、却て仕合せである』と豪語した。これを見ても彼の面魂が容易でない如く、いざとなれば、渾身皆膽といふ勇氣を持つてゐたことが判る。若し果して桐野が云うたことが事實であつたとしたらば、彼は井上なるものの或る性格をつかみ得たと云はねばならぬ。但だ天は二物を與へず、その突擊力が潮の干滿の如く、時々變化のあることが、相手にとつてせめてもの仕合せであつたらう。然るに明治二十年は、井上滿潮の時期であつた。

丸き伊藤、四角の山縣、三角の井上

三人の容貌から見ても、山縣の顏は先づ四角で、一升桝に眼鼻をつけた樣なものであり。伊藤の顏は丸くて福々しく、頭巾を被れば恰も立派なる生ける大黑樣であり。それに引き換へ井上の

顏は强ひて云へば、先づ三角とでも云ふの外あるまい。別に頭が尖つてゐるといふ譯でもなく、頤が突き出てゐると云ふでもないが、彼の顏を見た氣持が、何となく銳角的である。

彼等の性格はその顏面が表す通りであり、伊藤は如何なる場合に於ても圓滿の立場を失はず。山縣は城の如く要害堅固に構へてをり、井上は流星の如く、端倪すべからざるものがあつた。而して彼等三人の一生も、何れもその顏面の表する如く、伊藤は丸く、山縣は四角に、井上は三角に始終した。

同志社大學と井上

予が井上と再び面會する樣になつた一の因緣は、同志社大學問題である。新島先生は當時同志社大學設立の宿志を是非とも完成せんと欲し、春秋には富んでをられたが、その病身にして、自ら餘命の長からざるを悟つてをられたものと見え、必死の運動をしてをられた。予も少年時代から先生の知遇を忝くしてゐたから、同志社そのものには、それ程熱心では無つたが、先生に對

する報恩の情は、殆んど予をしてその全力とは云はざる迄も、尠く共大過半の力をその爲に效さしむることとなつた。

井上は同志社に對して、多大のインテレストを持ち始めた。同志社と長州人とは、必らずしも緣故が無いではなかつた。明治八年同志社創立の當時には、新島先生は木戸の援助に俟つものが鮮くなつた。然も井上は自ら基督教の信者でもなく、又た基督教を日本に布かねばならぬといふ、特別の意見も有たなかつたであらうが、然も彼の所謂る改良論の中には、新島先生の所說など丶も、自然合致する點も鮮くなかつたであらうし。且は彼にしろ、又は殆んど同志社大學運動の軍師として、智慧を借してくれた陸奥宗光の如きも、慶應義塾の餘りに橫行濶步するに對して、それに對抗するとは云はぬが、せめて對立するまでに同志社を盛大ならしむることは、最も必要であると考へたのであらう。

その理由は何れにもせよ、所謂る井上、青木、陸奥等は、大いに共鳴するところあつて、その爲に予は新島先生と、井上其他のグループとの間に立つて、彼是れ奔走する役目を負擔せねばならぬこと丶なつた。

同志社募金と井上、大隈

同志社の運動が愈ゝものになるといふ頃に至つて、條約改正の失敗で、井上は職を辭することになり、その後に來つたのは、思ひ掛なき大隈である。井上の去つたのが明治二十年九月で、大隈の外務大臣となつたのが、明治二十一年二月であつた。大隈は固より早稻田大學の創立者であり、普通ならば同志社の話などに振り向く者では無つた。然るに流石は大隈で、新島先生の精神に動かされ、そこで愈ゝ大隈、井上相合して、同志社大學の爲に一骨折ることになり、その爲に外務大臣官邸に集會を催ほした。

その時の來會者は、井上及び井上側から澁澤榮一、益田孝、其他の面々相集り。大隈側から岩崎彌之助、平沼專藏など相集り。井上自ら勸進帳を取つて、來會の人々に寄附金額を記入せしめた。井上も大隈も各ゝ一千圓づゝ奮發し、青木周藏が五百圓、陸奥が匿名にて三百圓出し、澁澤榮一は六千圓、原六郎が六千圓、岩崎彌之助が五千圓、同じく久彌の名にて三千圓、平沼專藏

は二千五百圓、大倉喜八郎が二千圓、益田孝が二千圓、田中平八が二千圓、總額一夜の中に三萬一千三百圓位は出來たであらうと思ふ。何れにしても井上といふ漢は、一度骨を折らうと思へば何處までも骨を折る漢であるが、同時に一度その氣が變れば、泣いても叫んでも、なか／＼それに應ずる樣なことはしない。兎にも角にも異つた漢であつた。

予はその時分井上から新島先生を通じて『洋行をしては如何。一切のことは自分が引受くる』といふ話を受けたが、第一は『國民之友』が漸くものになつて來た場合で、それをそのまゝ放棄するのも遺憾であり、且つ井上の世話になることは、强ひてその好意を斷わるのも心外千萬ではあるが、何やら予の如き我儘者は、何れの日か又た井上と衝突するの危險もあるから、障らぬ神に祟り無しと思ひ、同志社のことは幾重にも願ふが、予一身のことは願ひ下ぐることゝした。併し予は遂に一度も井上と喧嘩をしたことも無つた。それは予が避雷針を持つてゐたからであらうと思ふ。避雷針とは餘りに近くに近寄らないことである。

井上と自治黨

井上の外務大臣を辭めたのは、明治二十年九月であつたが、當分は首相伊藤が兼任し、翌二十一年の二月には大隈が久振りに、卽ち明治十四年失脚以來、初めて入閣し、外務大臣となつた。やがて伊藤は樞密院議長となつて、黑田が首相となり、井上は又た明治二十一年五月に農商務大臣となつた。併し此時にはいや／＼ながらなつたらしくて、眞面目に仕事をしてゐなかつた樣である。その當時井上は相變らず改良熱が冷めず、盛んに大農論を地方に說き廻つてゐた。又た當時は恰度日本でも自治制を敷くことになつて、明治二十一年四月、市町村制が公布せられた。

その前後より井上は頻りに自治論を唱へ出し、自治制研究會などを開き、それには靑木周藏、野村靖等が參畫してゐた。予も屢〻井上から招かれて、種々その話を聽いたが、予と同時に當時日報社の社長であり『東京日日新聞』の主筆である、關直彥君も屢〻井上の門戸をくゞつてゐた。當時日報社は、井上自身が持主の一部で無ければ、尠く共、毛利家、及び緣故ある紳商等が

それであつた爲に、多大の關係を有つてゐたのだ。その爲に當時の小說家須藤南翠君は、何やら小說を書き、――それは當時の『改進新聞』に揭げられてゐるが――その中には關君や予なども登場の人物となつてゐた樣だが、予自身は初から自治黨などゝいふことには、興味を持たなかつた。井上その人が果して幾許の興味を有つてゐたかは詳らかにしないが、爾後のことから考へて見れば、當時獨逸熱が凡有る方面に入つて來た際であつて、青木や野村から吹込まれたものとも思はるゝ。

ヘンリー・ノルマンの來朝

けれ共板垣は自由黨を作り。大隈は政府に入つてゐたが、改進黨を作つてその背景となし。又た後藤は盛んに大同團結などゝ云つて、遊說し廻つてゐる時代にて、井上も出來得べくんば、自治黨とでも云ふべきものを作つて見たいといふことも、あつたかも知れぬ。併し自治黨と云へば專ら農民黨であらねばならぬが、井上は何れかと云へばそのインテレストは、商工業にあつた樣

に思はるゝ。

又たその時分のことであつた、當時英國に於ては、ウイリアム・ステツドが『パーマー・ガゼツト』に據つて、盛んにニユー・ジヤーナリズムを鼓吹する頃であつて、その特派員としてヘンリー・ノルマンがやつて來た。彼は未だ名も無き若造であつたが、予が明治二十九年から三十年にかけての倫敦滯在中には、彼は『デーリー・クロニクル』の副編輯長となり、當時は希臘特派員となつて、盛んに希臘、土耳古の戰爭に就き、英國の輿論を煽つてゐた。やがて彼は下院の議員となり、後には「ナイト」の爵位を貰ひ、サー・ヘンリー・ノルマンと云はるゝことになつたが、日本に來た時には、盛んに日本の凡有ることを探撿し、その案內者には林田龜太郎君なども居たかと覺えてゐる。予は高橋五郎君を賴んで、横濱に彼を迎へ、種々インターヴユーをして、これを『國民之友』に掲げた樣に覺えてゐる。

鳥居坂邸の饗應

扨、或日ヘンリー・ノルマンを招待するから、井上の鳥居坂の邸に來て貰ひたいといふことであつた。鳥居坂の邸は明治天皇、昭憲皇太后の行幸啓も在らせられたる、數奇を凝らしたる邸宅であつた。燕尾服を着て貰ひたいといふ注文で、餘儀なく予は赤坂田町――當時予は赤坂氷川町に住んでゐた――の古着商から、五十錢出して燕尾服らしきものと、シルクハットを借り受けて出掛けた。

その席には關君の他に同業者としては、箕浦君か、大岡君かゞ來てゐたのではないかと思ふが、はつきり覺えてゐない。但だ大隈が來てゐたことだけは、確實に覺えてゐる。別に珍らしきことも無つたが、凝り性の井上で、(ヘンリー・ノルマンには少し勿體なさ過ぎたと考へた。)その食器は何れも我國在來の器で、多分伊萬里であるか、九谷であるか、或は双方であるか、兎に角立派なものであつたが。聊か可笑しく感じたのは、ナイフは總べて名工の作つた小柄を使用してゐることであつた。その小柄は、その柄の彫り物が、所謂る後藤物であつたか、誰であつたか知らぬが、なか〳〵立派なものであつた。

料理大博士としての井上

凝り性と云へば寔にこの人は凝つた人である。序ながらこの機會に話すが、井上は自ら料理通を以つて任んじてゐた。維新の初め判事として――今日では判事といふことは、裁判だけであるが、當時は寧ろ政務官であつた――長崎に赴く時に、京都から八新の板前を誘拐して連れて行き、同人より一切料理法を傳授されたといふことであるから、なか〳〵料理研究も費用が掛つてゐる譯だ。爾後、車夫を料理人に轉向せしめ、それに教へ込んで使用したといふ話も聞いてゐた。それで自分では料理の大博士を以つて任んじ、その味をつけることさへも、鰹の煮出汁、昆布の煮出汁といふ如く、その種類が漢法醫者の百味箪笥も同樣、種々のものが準備されてゐるといふことであつた。

併し長年井上家の料理人であつた、興都庵老主人の話すところに依れば、「とても御主人の命令通りでは喰べられる料理は出來ぬから、御主人の眼を掠めて、その知らぬ間に此方で別に味を

つけ直さねばならぬ』といふことであつた。恐らくはそれが事實であらう。それは兎も角これは隨分後のことであるが、內田山の井上邸に於て、或時野田大塊と共に葱まの馳走に與つた。我等は遠慮なくそれを食べてゐたところ『どうだ』と訊かれるから『寔に結構である』と云つたところ『それは結構であるべき筈だ。この葱まの汁は、すつぽんのスープで出來てゐる』といふ種を明かされて、なか〳〵尋常一樣の葱までなかつたことが判つた。同時に井上は『自分も若い時に江戶の市中を歩いて、居酒屋で葱まの鍋を煮たてゝあるのを見て、食指頗みに動いたが、それを食ふだけの持合せが無く、そのまゝ過ぎ去つて、それから是非葱まを食べたいと思ひ、種々研究して、斯る料理が出來た』といふ、一場の葱ま因緣談を聽かされた。これも亦た凝り性の表はれと云つて宜からう。

新島先生を門前拂ひす

物に對しても、人に對してもであるが、新島先生などは病弱の身體であつたからであらうが、

實によく劳たはつてくれた。然るに左程まで大切にした新島先生を、或時には門前拂ひをした。先生は憤慨し予に語つて、『何やら花札でも引いてゐる樣であつたが、逢つてくれなかつた。怪しからぬ次第だ』と申されたが、これは先生に對してばかりでなく、時と場合に於ては、誰でもその手を喰ふ覺悟は持つてゐなければならなかつたらうと思ふ。

或人は井上を稱して鬼子母神と云つてゐた。鬼子母神はよく子を育てるが、又たよくそれを取つて喰ふ。井上の子分もその寵愛を受けた場合は、寔に世に二つ無き仕合はせ者の樣であるが、一旦彼に見捨てらるれば、見向きもされない傾きがある。一例を擧ぐれば、齋藤修一郎の如きがそれである。併しこれは井上が輕薄であるといふ證據にはならぬ。彼は何れかと云へば、親切の人である。一旦引受けて世話をすれば、飽迄世話をする。但だその世話の甲斐無き者に對しては、彼は捨てゝこれを顧みない。それで若し彼に捨てられたとする者ありとせば、總てとは云はぬが、その責めの一半は捨てられた者にありと云はねばなるまい。

頼りになる人ならぬ人

曾つて故澁澤子爵が予に語つて『伊藤さんはいゝ人ではあるが、どうも頼りにならない。井上さんは六ケ敷い人であるが、寔に頼りになる人である』と云はれた。これは兩人をよく知つてゐる人の言として、予自身に於ても聊か心當りがないこともない。從つて或人の話に『井上さんは藝者に金をやるでも、決して現金ではやらない。貯金帳で渡す』と云つたが、それは事實その通りであるや否やは知らぬが、遊蕩の費用さへも右の如く、それが成るべく受け取る者に有效になる樣に心掛けてゐた。

無理も云ひ、我儘もするが、親切もあれば、思ひ遣りも深くあつた。それで或は又た『井上の表門は如何にも嚴重であるが、裏門からは犬でも猫でも、或は泥棒でも、勝手に立入ることが出來る』と云つた者もある。これもそれ程ではあるまいが、何處にか彼には窮屈でないところもあつたらしく見える。卽ち彼にも相應の拔目があつた樣だ。そこに或は、彼の人間味があるかも知

れぬ。

黒田の醉狂、井上の決鬪

併し一度び肝癪玉に觸るれば、誰でも張り飛ばすだけのものがある。それで當時薩長の巨頭連で、困まるものは、黒田の醉狂であつた。黒田は酒を飲まぬ時には、如何にも謹厚篤實であるが、愈々醉狂となれば、とても手に負へぬ大虎となつた。嘗つて或時、井上家に飛込み、面會を求めたが、生憎く留守であつたところ、その留守宅にて井上に對し、悪口雜言を吐いて去つた。それを聞いた井上は、腹に据ゑかねて、黒田に向つて直談判を試みんとし、決鬪でも仕兼ね間布き見幕であつたから、西鄕從道が仲に入り、漸くこれをなだめ、遂に黒田を謝罪せしめて、事濟みになつたことがある。

黒田の醉狂も平生思つてゐることを、酒を假つて云ふので、決して出鱈目ではないのである。併し井上も、黒田であらうが、誰であらうが、苟くも彼の前に立つ者には、相手闕はぬ漢であつた。然るに予の友人古澤介堂――滋――は、井上を評して、『張子房とは井上さんの樣な人であ

らう』と、予に告げ、而して彼は『その智には及ぶべからず』と云つたが、予は古澤ほど親しく井上に交はらなかつたからでもあらうが、彼を張子房同様の智者として受取るに、聊か遲疑せざるを得なかつた。

伊藤、大隈、山縣

含雪元帥眞照

山縣公筆蹟

薩長藩閥と維新の大業

第一次松方內閣の時、當時の海軍大臣樺山さんが、衆議院に於て『諸君が薩長藩閥などゝ、彼是れ云はるゝが、今日あるは畢竟薩長藩閥の力ではないか』と喝破したところ、大騷ぎとなつたことは、予が親しくその場で實見したところである。予自身も藩閥嫌ひであつて、薩長の全盛時代には、薩長ほど癪に障はるものがなかつた。これは予ばかりでなく、陸奥宗光の如きも、明治政府創立當初に、嘗つて『日本人』なる一文を作り、昔、平家繁昌の時代には、此世に於て平氏ならざる者は、人にして人に非ずと云つたことを援き、大いに薩長藩閥の專橫を諷刺し。これを長閥の大先輩、木戶に示したことがあつたといふことを、陸奥當人から聽いた。

予自身も日清戰爭以前までは、全くその通りに考へてゐた。併し其後は國內相鬩ぐよりも、寧ろ全國の力を打つて一丸と爲し、日本を世界に押出す方が、賢明の政策であると考へ直したが。更らに『近世日本國民史』を著作するに至つて、初めて薩長藩閥の由來を詳らかにし、彼等が當

時威張つたのは、癪には障るが、是非も無き次第であつたといふことを、つく〴〵認識した。

固より働いたから威張らなければならないといふ結論には必らずしも到着するものとは限らぬが、兎にも角にも維新の大業は公平に考へて、薩長二藩の努力に俟つものが多かつた。薩長人を好むにせよ、嫌ふにせよ、これだけの事實は認めなければならぬ。

その中に於て、伊藤、山縣、井上の如きは、先づ初なりではなくして、一番なりの方であるが。それでも彼等が明治元年に死んだとしても、彼等の名は日本人名辭書にも殘り、維新史の或頁にも殘るべきものに相違あるまいと思ふ。それだけ彼等は維新前にも、相當に働いてゐる。

伊藤最後の十年

併し予の語るところは、左樣な昔噺しではなく、予が知り得る範圍のことに止まる。予が親しく伊藤を知つたのは、前にも申した通り、明治三十一年の初頃であつた。爾來相交つて、彼のハルビンに於て遭難したる、明治四十二年十月まで、約十個年餘に止まる。併し此間に於て、種々

の出來事があつた。日英の同盟もあり。日露の戰爭もあり。日韓の併合の順序として、第一次の協約も締結せられた。而してその間に於て、伊藤は政友會總裁となり、やがて又たそれを辭した。此の如く世の中は廻り舞臺の如く廻り、伊藤は時としては立役となり、時としては脇師となり、全くの見物人としてゐたことは、未だ殆んどこれ無かつた。

政治以外に趣味無き伊藤

伊藤は予の知り得る限りに於て、政治以外には殆んど趣味もなく、興趣も無つた樣である。井上は三井家の世話とか、鴻ノ池の世話とか、時としては本願寺の世話とか、毛利家は勿論、貝島家其他凡有る交友間の臺所までもお節介をなし、凡有る方面に世話を燒き。又た凡そ山口縣の爲に力を竭したことも、山口出身の人にして、井上ほどの者は無つたであらう。又た井上自身も凡有る道樂を有つてゐた。

山縣は政治以外に、軍務のことにも常に心を配り、又た道樂としては、庭を造ることから、淸

元を唄ふことやら、謡曲を謠ふことやら、仕舞もするといふ如く、多藝でもあれば多趣味でもあつた。

然るに伊藤は金儲けに興味も有たなければ、人の世話を燒くといふこともなく、又た教育などといふことにも、別段力を效さず。道樂と云へば、酒、女の外には、書を讀むこと、詩を作ると、字を書くこと位であつて、山縣や、井上に比ぶれば、一個の木强漢といふことも出來たのである。伊藤の住宅なるものは、大磯の滄浪閣などは、まるで郡役所か、田舍の警察署に毛の生えた樣なものであり、趣味も格構も無つた。大森に恩賜館を建てた時にも、唯だ麥畑の眞中に地を限つて建てたので、別に宅地を相したといふでもなく、風景風致の好みをしたといふでもない。

あれ程立派な字を書き、あれ程立派な詩を作る伊藤にしては、不思議であつたが、彼の趣味は全く政治以外には無つたといふことが出來る。酒と女も、謂はゞ政治道樂の附屬物とでも云ふか、若くは安全瓣とでも云ふかに止まつて、婦人に對しても別段纎細精緻の好みがあつたといふでもなかつた樣に聞いてゐる。要するに彼は政治によつて生き、政治の爲に生き、政治と與に生きたものであつて、玆に政治家としての伊藤の强味があつたではないかと思ふ。

最後まで老朽せざる政治家

予は伊藤を知る以前から伊藤に就いては、屢々聞いてゐる。その中に、嘗つて陸奥は斯く予に語つたことがある。明治二十五年の第一次松方内閣選擧干渉後、陸奥は農商務大臣を罷め、西ケ原に閑居してゐたが、それでも殆んど毎日帝國ホテルに出掛けて、種々の人に接してゐた樣だ。予にも屢々電話を掛けて、會見を促したることがある。その時分、伊藤は尙ほ小田原にゐたからして、陸奥はよく小田原通ひをした。その時のことである。陸奥の云ふには、

『伊藤にも困つたものだ。わざ〳〵小田原に出掛けて話をつけて來れば、東京に歸り著いた時にはもう取消しの電報が先著してゐる。實を云へば伊藤は老たり矣だ。されば今日伊藤を動かすには、巳代治を動かす外は無い。種々偉らさうに伊藤が云つてゐるが、その實は巳代治が伊藤を動かしてゐるのだ。卽ち論語に奧に媚びんよりは、寧ろ竈に媚びる方が得策だとある通りだ』といふ樣な話をしたことがある。

されば予は伊藤なる人は、予が面會した頃には、陸奥の話より五六年の後であれば、最早や老朽用に立たぬものではあるまいかと思うた。固より年齢から云へば、當時は五十七八歳に過ぎなかつたが、併し予は伊藤は決して老朽どころでは無く、その頭腦は尙ほ硬化せず、よく活動してゐたことを認めざるを得なかつた。若し彼の頭腦が硬化してゐたとすれば、彼は功成り、名遂げたる後に於て、政友會總裁などゝいふ役を、自ら買つて出る氣遣ひはないのだ。此の一事を見ても、政友會總裁としての成功、不成功は姑らく措き、彼の頭腦が如何に硬化しなかつたかと云ふことが明白だ。この一點だけでも、彼が實に尋常に卓越したる政治家であつたことが判る。

伊藤の三重人格

何人でも伊藤に就いては幾度びかその定評を訂正する必要を認むる。外から見れば彼は醇酒を好み、美人を愛し、いざとなれば袞龍の御袖にも隱るゝことを敢へてし、只だ粉飾これ事とする輕薄才子であると見るであらう。次には彼が胸中磊落、一點の宿物無く、誠心誠意國家を憂ひ、

國家に盡すところの、淡泊にして、稚氣滿々たる好人物であるといふことを認むるであらう。大抵の人は此處まで見れば、これで伊藤は終ひであると思ふかも知れぬが、尠く共予が知り得たるところによれば、伊藤には更らに今一つ深き底がある樣に覺えてゐる。

成程、稚氣は餘る程有つてゐた。統監服を著て、柄にもなく劍をぶら下げ、兩肩を怒らし、稠人廣座の中を横行濶歩したるが如きは、如何にも稚氣滿々として、笑ふよりも却つて愛すべきほどであり。又た時には護衛の警部や巡査と、泥靴で踏み躙じられたる床の上に赤毛布を敷き、一所懸命に碁を打つてゐるなどのことを思へば、如何にも老書生の趣きがあり、その淡泊や愛すべきものがあつた。

又た書生上りの若造などを捉へて、議論を吹きかけたりするところや何かを見れば、如何にも淡泊とは此の如きものかと思ふほどであつた。

扨てそれが伊藤の本色かと云へば、それも伊藤の性格の一部ではあるが、決してその總てゞ無いことが判る。踏み込んで云へば、或はそれが政治家伊藤のカモフラージとも云はれないことはない。大抵の人は『伊藤さんには祕密も何も無い。何んでもかでもペラ〳〵喋つて仕舞ふ』と云

ひ。又た『伊藤さんは如何にも淡泊で、悲しい時には泣き、嬉しい時には笑ひ、腹が立てば怒り喜怒哀樂、一として窺ひ知れぬことは無いほどであつて、伊藤さんの機關全部は、ガラス張りの中にあるも同樣だ』と云ふ者もある。

併しながら、尠くとも山縣一味の仲間では、決して斯くは受け取つてゐない。彼等は伊藤を大なる智者と考へてゐた。油斷のならぬ相手と考へてゐた。

予は十年の歲月の間、屢〻伊藤と接近し、特に或る期間には、かなり近く交渉するの機會を得たが、予の知り得る限りに於ては、以上の三者とも皆な若干の眞理をもつてゐるのではないかと思ふ。伊藤が大隈の苦が手であるばかりでなく、天下の苦が蟲を悉く嚙み潰して、腹の中に入れたる如き山縣の苦が手であり、若くは前にも後にも比類なき、日本一の手練手管の名人桂の苦が手であつたことを思へば。而して薩長藩閥の二大政治家、大久保、木戸が最も重きを置いてゐたことを思へば、伊藤が單に淡泊の老書生であつたとは思へない。

此の如く山縣、大隈、桂三人は何れもその腕前も違ひ、又た長所も異つてゐるが、彼等流儀に於いては、それ〴〵老巧の者共である。然るにそれ等の者が伊藤には少からず警戒を爲し、用心

を爲し、常に一杯喰はされはすまいかと、氣をつけてゐたことを思へば、伊藤その人の何人であるかは、これを知るに難くはあるまいと思ふ。

伊藤の美質

伊藤が少年時代より先輩に可愛いがられたる資質の持主であつたことは、吉田松陰からも——品川程では無かつたが——愛せられたることは、吉田松陰の文章に利輔、利輔と愛撫的の文字をもつて書いてあるものを見れば明白である。又た來原良藏からは名義は從者であつたが、非常に愛せられた。彼が少年時代、來原の從者として、浦賀、本牧の間に在營中、毎曉來原は伊藤を叩き起して、馬上提燈をつけ、それにて伊藤に素讀を授けたといふ程である。

次には木戸より愛せられ、やがては大久保に愛せられた。特に明治四年、岩倉が全權大使となり、木戸、大久保、伊藤、山口(尚芳)等が副使となつて、米歐を巡遊したる際などは、伊藤に就いて、木戸、大久保の鞘當てが行はれ。木戸は伊藤が己れを捨てゝ大久保に趨つたものと思ひ

込み、頗る伊藤に對しても平らかならない程であつた。事程左樣に伊藤は先輩から愛せられ、調法がれてゐた。畏れながら、明治天皇に於かせられては、總ての臣下にそれ〴〵その特徴に應じて御認識もあり、御信賴も在らせられたが、伊藤だけは殆んど總ての點に於て、御信籠が先づ格別と云つても宜からう。これも伊藤が單に大なる政治家であるといふばかりでなく、自から君に得るところの資質があつたことを證明する一であらう。

されば伊藤は極めて微賤なる出身であり、困窮なる家庭より出で來つたに拘らず、何やら初めから金銀の匙でも銜んで生れ來つた樣な、のんびりした氣分を持つてゐたことは、彼が初めから無理な苦勞や難儀をせず、既に人心のついたる以後は、先輩や長上に引き立てられて來た爲であらうといふことも出來る。

大久保相續者としての伊藤と大隈

但だその同僚に對しては、必らずしも先輩同樣では無かつた。伊藤の一生を通じて、木戸、大久

保在世中は、兩者の間に跨がり、先づ當初は木戸七分、大久保三分であつたが、やがてそれが顚倒して、大久保七分、木戸三分といふところであつたらしい。嘗つて西園寺公が予に向つて、『大久保の盛んな時には、大隈、伊藤は、その股肱であつて、大久保が馬車に乘る時には、大隈が車の戸を開けてやれば、伊藤が膝掛けを廣げてやるといふ様に、二人ながらよくつとめた』と云はれたが、事實或はその通りであつたかも知れぬ。

然るに大久保の明治十一年五月に於ける遭難以後、大久保の衣鉢相續者として、勢ひ大隈と伊藤との競爭が出で來るべき場合となつた。

大久保遭難後の明治政府

大久保を中心として、伊藤、大隈は左右の翼であつたが、大久保斃れて、その相續者を誰にするかといふことになれば、此に勢ひ問題が出で來る。誰彼れと云ふではない。問題は只だ大隈か伊藤かといふことである。大久保の意中を忖度すれば、勿論伊藤であつた。大久保は殆んど伊藤

を以つて相續者と爲し、內務卿も伊藤に讓つて、自分は至尊に接近の地に移り、輔弼の任を全うせんと考へてゐたらしい。けれ共位置から云へば、大隈の方が先輩である。伊藤が兵庫縣知事である時に、大隈は既に參議であつた。

彼等は所謂築地の梁山泊で、大隈、伊藤、井上、其他當時尖端を行く連中は皆な仲間であつたが、何と云つても大隈が兄貴分であつた。然るに大久保の側から見れば、同じ芋仲間では無つたが、伊藤は寧ろ大久保腹心の友であり、大隈は大久保股肱の友であつた。大久保は伊藤には何等心配も無く、懸念も無く、眞に我が衣鉢を相續すべき後進生として待遇した。大隈には聊か油斷がならぬと考へたかも知れない。或は又た大久保のことだから、大隈が反噬はしないかと心配したかも知れぬ。さなくとも或は脫線をしないかと心配したかも知れぬ。ともかくも大隈は大久保に重用されたに相違はないが、信用の程度に於ては、聊か問題とすべきものがある。されば大久保の最も信任したる松方を、御目附役として、大隈の下に働らかせてゐた。大久保遭難後當分の間は、同舟風に遭ふの譬で、兎や角やつて來たが、明治十三四年の頃になつて、所謂征韓論の餘波として、一時勃興したる民選議院論が、改めて國會開設論となつて世の中に出で來りたる

に際し、政府も愈々多事となり、これに對應の策として、それ〴〵施設をせねばならぬことになり、此に明治政府も從來の狀態をそのまゝ維持することが出來ぬ仕末となつた。

文治派の三人男

そこで政府には自から文治派と武治派とが出來、文治派の頭領としては、大隈、伊藤、井上などがその錚々たる者であつた。因みに井上に就いて一言するが、大久保は比較的雅量の大なる政治家であつた。世間では西鄕南洲が天空海濶の雅量の持主の如く思つてゐる。而して或る場合に於てはその通りである。併し南洲は一度彼が胸中のブラック・リストにつけたる者は、なか〳〵それを拂拭はしなかつた。つまり一度南洲に見限られたる者は、再び囘復は六ケ敷かつた。然るに大久保はその點に於ては寧ろ融通が利いてゐた。同じ鹿兒島人の中にて、西鄕、大久保の討幕論に反對と目指されたる人々も、大久保の手にてそれ〴〵拾ひ上げられたる程だ。例へば奈良原繁の如き、高崎正風の如きも、その中に加へて宜からう。

斯る次第で案外大久保は話せる漢であつたが、但だ井上だけは何やら禁物であつたらしい。それで大久保の盛時には井上は志を得ず、調査とか何んとか名義を付けて、倫敦邊に出掛けてゐた。然るに大久保の斃るゝや、井上は忽ち急電にて呼び還へされ、やがて歸るや否や、當時の閣僚とも云ふべき參議兼工部卿に就任した。從つて維新當初の築地梁山泊そのまゝ、大隈、伊藤、井上が、當時の政府に於ける三人男となつた。

明治十四年の政變に關する大隈の觀察

この三人男が如何なる程度まで相談をしたか、その點に就ては判らぬが、予が親しく大隈より聽くところによれば『最早や天下の氣運は、國會開設に向つて動き、何人の力を以つてするも、これを防ぐことが出來ぬ。故に政府は自ら進んで國會を開設するが宜からう。それに就いては言論の機關に適當なる設備をせねばならぬ。福地が東京日日新聞で切角御用を勤めてゐるけれ共、あれではとても間に合ひ兼ねる。そこで福澤を一枚加へて、福澤にやらせるが宜からうとて、三

人男と福澤との相談となつた。福澤も大いに乘り出して來た。それでその時分屢〻會合すると、何やら世間から猜疑の眼を以つて見られる。特に薩摩の武斷派なども、如何なる邪推をするか知れぬとして、極めて會合も祕密にした。福澤の申すには「自分の女が踊りを稽古してゐるから、その溫習を見物する爲といふ名義で、拙宅に來られよ」などゝ云つて、孰れも打揃つて福澤の邸にて相談も出來た程であつた。ところが伊藤、井上は、反動派である薩摩人の爲に脅やかされ、その結果は遂ひに予の首を斬つて、薩摩の軍門に降參したことになつた。これが卽ち大摑みに云へば、明治十四年の政變の骨子である。』以上が大隈の云ふところである。

明治十四年政變に對する伊藤の觀察

ところが伊藤に聽けば、『なか〱左樣のことでは無い。元來、國會開設の必要は云ふまでもないことであるが、第一は如何なる憲法の下に國會を開らくかといふことがあり。又た開くとすれば如何なる順序によつて開らくかといふことがある。然るに大隈は豫ねて何事も打明けて相談し

たる我等を出し抜いて、一夜漬けの憲法草案を作り、それを有栖川左大臣宮の御手許に差出し、直ちに翌年より國會を開設せんなどゝいふ意見書を上るに至つては、實に同志を裏切つたる、言語道斷の沙汰である。

斯くては我等と大隈とは兩立せず、大隈がその志通りにやるといふことであれば、我等は骸骨を乞ふの外は無く。又た我等が意見を御採用となれば、大隈は到底廟堂の上に置くべきものでは無い。その結果が卽ち十四年の政變である」

斯く伊藤は語つてゐる。更らに伊藤の云ふところに據れば『斯く大隈が世間の急進的風潮に迎合して、虎に乘つて奔らんとするに對しては、此方でもきつとしたる覺悟をしなければならぬ。それには維新當初の薩長聯合の原則に立還つて、薩長が力を併せ、その勢を支持する外はないと覺悟を決めて、竊かに高輪なる某所——伊藤の邸内であつたか、どうか、はつきりしたことは聽き漏らした——に、薩長の重なる連中を集め、そこで一切の相談を爲し、互に固く約束を結び、記名、調印をして、いよ〳〵臍を固むることになつた』といふ話をした。又た福澤の立場から云へば、云ふべき苦情は山ほどあるが、それは福澤の傳記に讓つて、所謂『時事新報』なる

ものは、如上の計畫が一變して、そのまゝ中止する譯にもゆかず、遂に福澤一家のものとして出來たのである。斯る次第で、兎にも角にも明治政府に於ける大久保の相續者は、伊藤と決定し、大隈は愈ゝ迷へる羊となつて、野に下つたのである。

薩長聯合政府に於ける伊藤の位地

薩長の武人中にも、固より伊藤に敬服しない者も多かつたに相違はない。薩の先輩とも云ふべき黒田などは、何れかと云へば伊藤の下につくことを、屑しとしなかつたのであらう。併し何と云つても伊藤は手八丁、口八丁で、大久保でさへも一日も伊藤無くしては立行かぬ程であつたから、大久保逝いた後には、尚更ら伊藤は調法の人物であつた。所謂る缺くべからざる人物となつた。この缺くべからざる人物と云ふことが、凡有る伊藤に對する不平も、不滿も、嫉妬も、反對も、全く打消すことが出來なければ、それを鎭壓することが出來た。

此の場合に於て、伊藤の陰となり、陽となり、眞に伊藤を支持した者は井上である。長州にも

人物は多かつた。併し多い人物の中に於て、最も抽んでたる人物の一人たる井上が、伊藤の介添人として立つて居たから、伊藤自身の足取りは時として危なかつたにせよ、極めて丈夫なものであつた。のみならず、當時心から伊藤を支持したる薩摩人が三人あつた。それは武の方面では西郷、大山である。文の方面では松方である。この三人が極力伊藤を支持し、特に西郷從道の如きは、苟くも伊藤にとつて難題ある場合には、必らずその難題を伊藤と與に分つことにした。

此の如くにして、大久保は自力で明治政府の中心人物となつたが、伊藤は寧しろ他力で明治政府の中心人物となつた。他力と云つても、當人が無力ではない。但だ伊藤を四方八面から、突支棒をして、愈ゝその位地を堅固ならしめたのだ。

山縣の政治界進出

伊藤と井上とは仲が良い代りに屢ゝ喧嘩をした。伊藤の子分は必らずしも井上の子分で無く。井上の子分は必らずしも伊藤の子分で無く。固より双方共通の子分も多かつたが、子分同志の小

競合ひもあつたと考へねばならぬ。併しいざとなれば、彼等兩人は必らず一致した。伊藤は必らずしも井上と一致しないことがあつたとしても、井上は必らず伊藤といざとなれば一致した。
予は常に此の兩人に就いて考へてゐるが、多くの場合に於て伊藤は常に井上に厄介をかけ、井上は常に伊藤の面倒を見る役目を勤めてゐた。然るに又た此に一の出來事がある。大久保時代には山縣は寧しろ陸軍專門であつた。然るに大隈去つて後、明治政府が薩長土肥と云つた昔から、純乎たる薩長となつた時に於ては、武人である山縣をば、愈々政治方面に進出せしむることにした。斯くて山縣は明治十五年には參議として、參事院議長を兼任し、明治十六年の末には參議として内務卿を兼任することになり、軍事以外の職務に關する新天地は、彼の前に開らけ來つた。
軍事專門である山縣を、斯く行政方面に引張り出したのは、薩長藩閥の聯合政府を支持する爲めには、餘儀なきことであつたに相違は無いが。山縣はそれからして追ひ〳〵行政方面に手を伸ばし、内務省を切つて廻はすばかりでなく、その勢力は遠く他の省にも及び、やがては政治上に於ける伊藤の競爭者となつて來た。これは山縣自身も伊藤その人も、共に思ひがけぬことであつた。
斯くて伊藤、山縣の後半生は、凡有る意味に於て、兩人の立合ひとなつたのだ。

伊藤、大隈、山縣の關係

明治十四年十月大隈の野に下つて以來は、伊藤と大隈とは政治上に於ては、互に反對の位置を占め、その間一寸大隈は明治二十一年に入閣したことがあるが、兎も角も兩人は互に世を沒するまで、友人であつたが、先づ政敵といふ關係であつた。併し眞に伊藤の心を苦しめ、伊藤の心を惱まし、伊藤としては夜魔の種子となつたのは、その政友とも云ふべき、山縣であつたらしく思はるゝ。正直に云へば、伊藤と大隈との喧嘩は、表面は政敵であつたが、內實は政友といふことが出來なければ友人であり。伊藤と山縣との關係は、政友であつたが、その實は政敵といふ言葉が不適當であれば、尠く共、政治上の競爭者であつた。

斯く迄山縣が進出し來つたのは、何時頃からであつたか。恐らくは大隈が政府を去つた後であり、而して特に進出して來たのは、明治十八年の末、第一次伊藤內閣が組織せられた以後であらうと思ふ。誰が何んと云つても、山縣の根據は陸軍であつた。ところが彼が內務卿となり、やが

て內務大臣となつて以來、その片足は內務行政に踏込んだ。それから彼が第一次伊藤內閣より黑田內閣となり、三條臨時內閣の後を受けて、愈ゝ第一次山縣內閣を組織し、第一帝國議會に乘込んで以來は、彼の勢力は內務一省に限らず、政治の凡有る方面に及んだ。

政府內に於ける山縣と伊藤

特に外務部內などには、山縣の勢力が少なからず扶植せられた。伊藤は最初から財政方面は井上に一任して、殆んど手をつけなかつた。彼は何よりも當時の薩長藩閥政治家の苦手である、法制そのものに手をつけた。又た外交に手をつけた。而して更らに進んで宮內省方面に手をつけた。而してその隨處に山縣の手が又た伸びてゐた。英國若くは米國のアングロ・サクソン流の政治論は、大隈及び福澤の手にとられて、殘されたる薩長藩閥政府では、當時ビスマルクの威權赫赫たる時代であつたから、何よりもその政治的指導精神を、獨逸に求めた。軍事も初めは佛蘭西專門であつたが、何時の間にか獨逸と打替へた。法律も佛蘭西民法を主としたが、又た獨逸制を

應用することにした。特に憲法そのものは固より、地方制度にせよ、凡有る行政上の制度は、獨逸を先生と仰ぎ、獨逸を手本とすることになつた。この點に於ては、伊藤も山縣も別に區別はない。

伊藤は帝國憲法制定に就いて、殊勳者の一人であるが、山縣は又た日本帝國の自治制度、市町村制の殊勳者である。即ち山縣は法制上に於て、伊藤と相當るといふ程では無つたが、膺行するに足るだけの地歩は占めてゐた。

伊藤と井上毅

人物を鑑識する上に於ても、又た使用する上に於ても、伊藤と山縣とは非常の相違があつた。伊藤は常に自ら指導者となり、義經流に自ら先に進んで導いた。山縣は何れかと云へば、自分は後に控へてゐ、それ〲の才能者を前に立てゝ、これを鞭韃した。伊藤は『來れ』と云ひ、山縣は『行け』と云ふ。何れもその長短があるが、伊藤は自ら恃むこと甚だ多く、自ら覩ること甚だ

高く、その爲に中には彼の子分となるを好まず、又た子分となつても、やがて逃げ去る者があつた。但だ何と云つても伊藤には他に比類無き二人がゐた。

それは井上毅と伊東巳代治であつた。井上毅は漢學が基礎であり、それに佛蘭西學をしたといふが、彼の佛蘭西學は果してどれだけのものであつたか判らぬ。兎も角頭が法制的に出來てゐて、伊藤の注文通りの人間であつた。蒲柳の質で、體力は弱く、とても伊藤程の強者でなく、遂に彼は伊藤に乘り倒されたとも、若くは乘り殺されたと云つても差支無きほどに、伊藤の爲に働き、且つ斃れた。彼は決して迂儒でも無ければ、單純な理窟屋でも無く、法律制度の製造人でも無ければ、仕上げ師でも無かつた。

彼には充分政治家の素養を具へてゐた。併し何れかと云へば、彼は肥後流の正直者であつた。それで伊藤の爲には殆んど死力を效し、又た時としては伊藤と論爭して、屢々身を以つて退かんと思つたこともあつた樣だ。故人の信用に關するから、詳しくは語らぬが、予も井上毅から伊藤に關して、彼是れの述懷を聽いたが、今更ら一生を棒に振つたと云はんばかりの口氣を漏らしてゐた。併し何と云つても此の兩人は切つても切れぬ緣があつた。若し大久保が今少し生存した

らんには、井上は直接に大久保の子分になつたであらうと思ふ。大久保もその晩年には、井上をやゝ器重した樣であつた。

同時に井上は岩倉からも信用された。併し大久保も逝き、岩倉も逝いた後は、兎も角も彼を知り、彼を解し、彼を信んじ、彼と與に働き得る者は伊藤であつたから、たうとう伊藤の爲に一人情死をするに至つたのだ。併し井上も亦た晩年は山縣と相得るものが鮮くなかつた。

伊藤と巳代治

伊東巳代治は井上とは全く異つた者にて、彼は伊藤子飼ひの子分と云つても宜からう。彼に驚くべきは、その體力の異常にして、三日徹夜しても、何とも無いといふほどに若い時にはよく働いた。卽ち此の親分にして、此の子分ありとは、伊藤と巳代治のことであらう。當初は飜譯とか、淸書とか、比較的下廻りのことをしてゐたが、漸次に彼は進み來つて、井上の壘を摩さんとした。そこで井上と伊東は、等しく伊藤の門下ではあつたが、兩方の腹を打割つて云へば、正直の

ところ犬猿啻ならなかつた。

井上毅が文部大臣中、祕書官であつた彼と同郷の吉田作彌は、予に、『井上さんも人に對しては公平であるが、巳代治だけにはそれが出來ない』と笑つて語つたことがあつた。ところがその巳代治も、動もすれば山縣に色目を使ひ、一時は表向きは伊藤の子分で、仕事は山縣の爲にしつゝあつたといふ場合もあつたらしく思へた。曾つて伊藤が山縣に向つて、『近頃は巳代治までも君の方によく働いてゐる』といふ樣なことを云つたと云ふことを、一寸聞いたことがある。果して然るや否やは知らぬが、一時はそれであつた。尤も晩年には何かの事情若くは理由があつたらうが、山縣は巳代治に對しては決して釋然たりとは云ふことが出來なかつた。併し今云ふ通り、この井上毅と伊東巳代治兩人があつたから、伊藤の子分は、特定の子分、確定の子分は少かつたにしても、優にその繩張中では、伊藤自身が獨歩の地歩を占むるを得た。

伊藤の子分

外交上では凡そ主なる外交官は伊藤に引立てられ、若くは若干の交渉を有たぬものは無つたであらうが、强ひてその人を求むれば、代表者と云ふべきは陸奥であつたらう。ところが陸奥は油斷も隙も出來ぬ人であつて、彼が米國公使であつた際に、山縣が黑田內閣、大隈外相の時に、洋行に托して、或は洋行を機として、暫く日本を避け、歐米を巡回したが、その時陸奥は米國で山縣を口說き落し、それが山縣內閣の時に、彼が農商務大臣を贏ち得たる端緖となつた。

それで陸奥は、伊藤であらうが、山縣であらうが、苟くも我を用ゆる者あらば、別に擇ぶところ無く、やがては自分で自ら存分の政治をして見度いといふ、大野心を有つてゐたであらうと思ふ。兎も角も自然の成り行きから云へば、伊藤派に屬すべきものであつたらう。末松謙澄は伊藤の婿であれば、云ふまでもない。而して今日ほどの大物では無つたが、當時から嶄然頭角を顯はしてゐた、西園寺公なども、その一人であり。特に西園寺公は最も伊藤が目をかけてをり、全部とは云はぬが、或る部分の相續者として、伊藤は豫て眼をつけてゐたものと察せらるゝ。近衞篤麿もその一人であつたが、これは近衞の方から御免を蒙つてしまつた。

伊藤の第一次政黨組織計畫の失敗の餘波

伊藤も山縣も、大隈、福澤のアングロ・サクソン流と異つた、獨逸主義を遵奉したが、等しく獨逸主義でも、自ら異つた所がある。山縣は兎も角も、伊藤は獨逸主義の鍍金に過ぎなかつた。伊藤でも井上（馨）でも、維新前から英國に留學した者であつて、アングロ・サクソンの氣分は骨髓まで浸み込んでゐた。それで切角獨逸流を鍍金しても、やがてそれが剝げて來た。伊藤は明治二十二年、憲法發布の頃には、盛んに超然主義を唱へ、『內閣は政黨の上に超然たらざるべからず』といふ、獨逸流の論を主張してゐたが、やがて彼は自ら政黨の爲に惱まされ、政黨に對抗するには、政黨を以つてするの他に途無く、從つて自ら政黨を作らんと考へ出した。

それが卽ち明治三十一年の第三次伊藤內閣の時である。その時御前會議が開かれ、山縣等がそれに反對した爲に、頗る尋常ならざる場面を呈出した。その實況は聽いてゐるが、此に語る必要は無い。伊藤は憤慨に堪へず、直に首相の職を擲ち、然も大隈、板垣の兩政黨首領を、後任に推

薦して、此に當時の所謂憲政黨内閣が出で來つたのである。これは伊藤が山縣その他薩長の伊藤の政黨組織に反對する連中に對する、面當ての爲であつたか。將た當時これまで犬猿啻ならざる、大隈、板垣が各〻解黨して、憲政黨なる旗幟の下に、在野黨の陣を張つたに對して、彼等が未だその組織の充分整頓せざるに乘じ、これを推薦し、一泡吹かせん爲であつたか。抑も亦た大政治家の立場から見て、これより外に難局解決の道は無いとして、然かしたか。その點は何とも明言は出來兼ねる。

リベラリズムの政治家としての伊藤

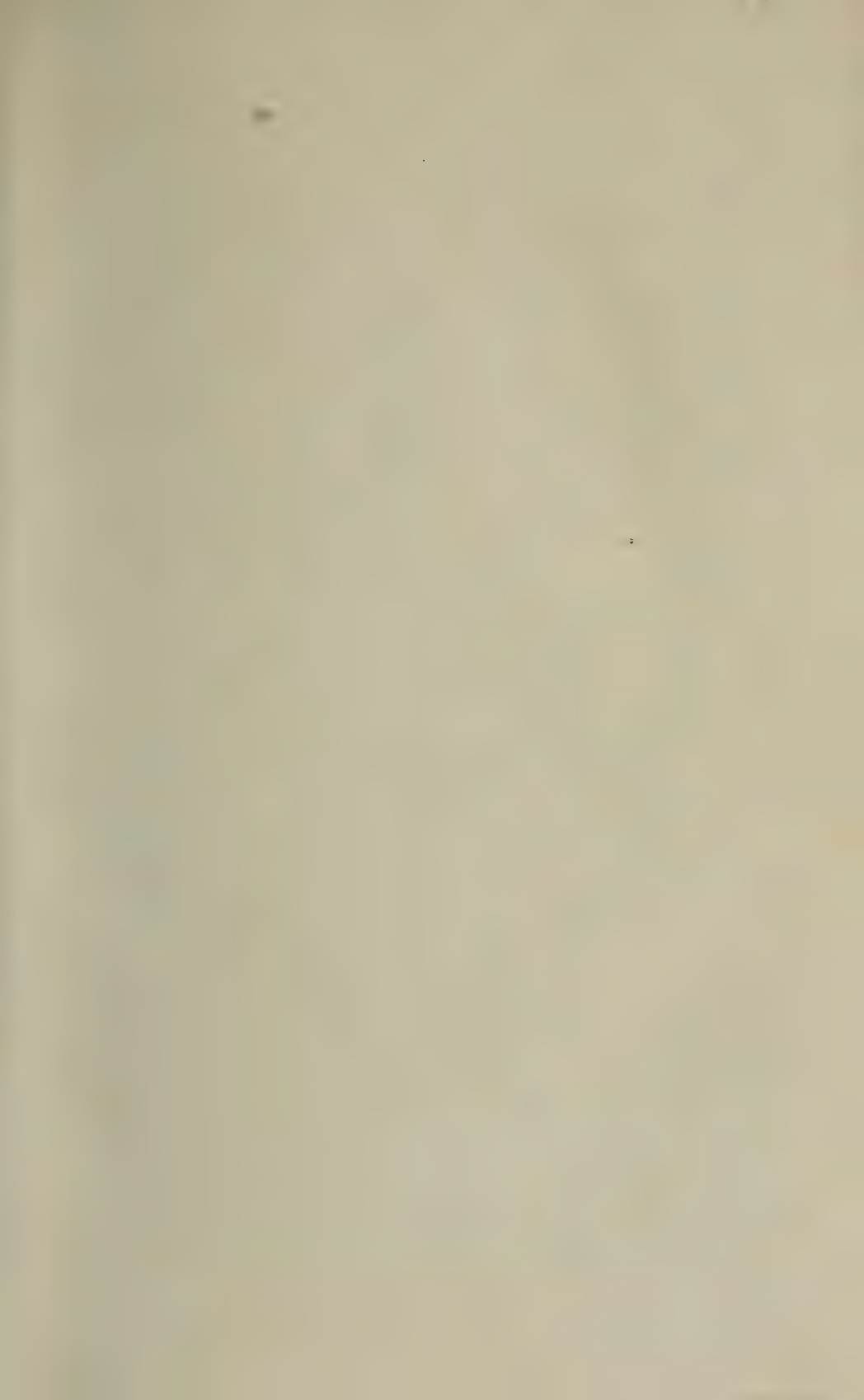
併し何れにしても一石二鳥の效果を奏したことだけは間違ひない。卽ちこれに對しては、山縣其他の連中も意外の感を爲し、又た大隈、板垣等の連中も、意外の感を爲した。山縣等に云はすれば、從來薩長聯合でやるといふ約束をした伊藤が、今更ら所信を擲ち去り、政黨に內閣を渡すなどゝは、何事ぞといふ申分が出來、他方には大隈、板垣は、政權は難有きことは難有いが、半

熱の政黨に渡すとは、餘りに早過ぎる。これでは難有迷惑であるといふことになつた。而して伊藤は一人飄然として友を千里の外に求めて、支那に旅行し去つた。

これ等の手際は、伊藤で無ければ、とても考へつく者が無く、又たそれを斷行し得る者も無つたが、伊藤本來の面目は、これによつて略知ることが出來る。彼は畢竟リベラルの政治家で、リベラリズムに於ては、その實あまり大隈と異つたことは無い。その點に於ては山縣とは全く品を異にしてゐる。山縣は政治家ではあつたが、彼をリベラリズムの政治家といふことは、彼自らも屑しとしまい。

伊藤と山縣との取組み

伊藤と山縣との取組みは、恰も上杉、武田の取組みの如く、實に面白かつた。素人は上杉謙信を只だ慓悍無頼の勇將であると考へてゐるが、なか〳〵彼は隅には置ぬ智將であつた。世間では山縣は陰險であり、伊藤は淡泊であると思ふ者あるが、事實は山縣も未だ必らずしも陰險ではな

く。但だ彼は餘りに用心深くて、とてもその守りが堅固であるが、あまりに堅固であつた爲に、却つてその爲に屢ゝ伊藤の爲に致されたことがある。これを例へて云へば、伊藤と山縣との取組みは、蛇と雉の取組みの如く、雉が蛇に翼を收めて、充分に卷かれ、愈ゝ最早や卷きついたといふ時に、忽ち兩翼を擴げて飛び上る如く、伊藤は屢ゝ山縣の爲に致されもし、又た致されんとしたが、いざとなれば忽ち超越して、山縣及びその仲間を後へに瞠若たらしむるものがあつた。併しとの取組みは考へて見れば見るほど、面白き取組みであつて、とても素人では想像がつかないほどの大なる興味があつた。併し彼等を目して、單に己れの爲に斯く爭ふと思ふは、未だ彼等兩人の心事を解せざる者である。彼等には彼等流儀の愛國心もあり、奉公心もあり、固より尊皇心もあつた。併しその流儀の異つたところが兩者の自ら止むべからざる競爭、對抗となつて出で來つたのである。或は又た兩人の競爭からして、自然その手段方便等も相異るに至つたと云ふとも出來よう。

薩長人士

松方正義公

松方公筆蹟

薩長人士の書風

長州人にも、薩摩人にも、自ら各個共通の書風がある。西郷南洲と大久保甲東とは、その性格は殆んど對蹠的であつたが、その書風は、何んとなく類似してゐる。書簡文などでは、甲東の字は聊か角味を帶び、南洲の字は稍々圓味が多い樣であるが、大字に至つては、然も草書などを見ては、その名を被うて鑑定すれば、時としては南洲のが甲東となり、甲東のが南洲となる心配の無いこともない。

長州でも亦たその通りであるが、併し山縣の書と伊藤の書とは、如何なる場合でもこれを間違へる氣遣ひは無いほど、その特色が發揮せられてゐる。山縣の書は、明治の初期には、長三洲の臭が、大分表はれてゐるが、中年以後は山縣流儀の書で、細は手紙より、大は額面に至る迄、一貫してゐる。

伊藤の書はなか／＼變化が多くて、物に應じて形を賦するといふ有樣で、朝鮮に居た頃には、

何やら朝鮮人の字らしくあり、支那の法帖を見た時には、又たそれらしくあつて、必らずしも一定しないが、併しその變化の中にも、所謂る伊藤流なるものは、徹底してゐる。巧拙は兎も角も、書體に生色あつて、その活氣の多いことは、山縣流の一本調子に比らぶれば、伊藤のを勝れりと云はねばならない。

字の上手いといふ點から云へば、山田顯義、即ち空齋その人が長州出身者では、素人の魁であり、杉聽雨老や野村素軒翁の如きは、寧しろ玄人として見るべきもので、この仲間に入るべきものではないが。併し書としては、伊藤の書には、その時の氣分が直ちに表はれてゐる。謂はば伊藤は氣分本位で筆を持ち、山縣は氣質本位で筆を持つと云ふべきものであらう。

併し山縣の書簡などは如何なる長文であらうが、始終一貫、その用紙の如きも、殆んど特別の場合を除けば、自家用の唐紙に書いてゐる。特に色紙、短册などは、なかなか立派なものである。少壯時代には畫も描いたらしく、今も尙ほ山水の圖などが遺つてゐる。器用の點に於ては、或は伊藤の上であつたかも知れぬ。井上に至つては、愚筆といふ程でもないが、伊藤ほどの達筆ではなかつた。又た文藝の趣味に於ても、伊藤、山縣には遠く及ばなかつた。彼は只だ時々狂歌らし

きものを讀む位が、關の山であつた。

世間に於ける伊藤の書と山縣の書

今日市價では伊藤と山縣とは比較にならぬほどの懸隔がある。山縣の生前にはその色紙一枚で、一萬圓以上の札を入れたといふ人もあつたといふが、それは恐らくは他に目的のあつたわけであらう。併し、今日に於ては山縣の十と、伊藤の一と交換しても、尙ほ强味は伊藤の一にあるかも知れない。これは單に世間の人氣といふ如きものであらう。伊藤は死に時がよく、又た死に方がよかつた爲に、愈々世間の人氣は彼の死後に湧いて來た。

それから云へば、山縣は伊藤よりも長生きして、損をした。山縣が伊藤のハルビンで、安重根の短銃に斃れたのを聞き、『伊藤はいゝ死に方をした。寔に羡ましい』と嘆じたのも、決して不思議は無い。

予は伊藤の書は、容易に得らるゝことを知つてゐた。それといふのは、予は屢々伊藤に書を依

賴したが、何時も欣然として書いてくれた。予が爲に依賴したといふよりも、それは大概他の爲であつた。それで伊藤のは何時でも得らるゝと思ひ、何れ適當な折には、欲しいものを書いて貰はうと思つてゐた。その爲に伊藤のハルビンに赴く際、首相官邸に於ける、宴會の席上でも、予は同業者の紹介者となり、鮮なからず、その場で書いて貰つたが、予自身は遂に一枚も得るとが出來なかつた。

これに反し、山縣のは、容易に得られないと考へてゐたから、斷簡零墨でも大切に保存してゐた。市價が出たから後悔するでは無いが、何時も伊藤の書を見る毎に、惜しき機會を取り逃したといふことを思はざるを得ない程、伊藤の書には尙ほ興味を感じてゐる。

徳川家康の縮册版としての山縣

世間では伊藤を秀吉に擬し、山縣を家康に擬するが、伊藤の秀吉との對照に就いては、予は何處が似てゐるか、殆んど類似の點を多く見出し得ない。强ひて云へば、婦女子に戲むるゝ位のと

とではあるまいかと思ふ。それにしても秀吉の趣味が伊藤に比すれば、稍ゝ高尙ではないかと思ふ。これはよく伊藤を知つてゐる人の話であるが、伊藤は椅子に腰掛けて食事する際さへも、その卓下に於ては己れの足を隣席の婦女の足にからめるといふ樣な惡戲をしたといふことであるが、その道にかけては彼も隨分強か者であつたことが判る。そのくせ晴の場合には、金章紫綬、衣冠儼然として、如何にも勿體らしく振舞ふことが、大好物であつた。

併し予は山縣を憶ふ每に、何んとなく家康が眼の前に居る樣に思ひ、家康を想ふ每に、何んとなく山縣が家康の縮刷版ではないかと思ふ。世間では未だ全く山縣その人の價値を知らないのではないか。時代が進むにつれて、山縣の再檢討が行はれ、而して山縣の認識が追ひ〳〵國民の識者の中にも出て來るのではないかと思ふ。

斯く云へばとて、予は決して山縣恩顧の者ではない。明治三十年末の、第二次山縣內閣以來、種々の意味に於て、山縣の大正十一年二月に死する迄、殆んど二十五年間、山縣と接近の立場にあつたことも鮮くなかつたが、予自らも彼の門下生で無く、彼も亦た予を門下生として見なかつた。それで予は深く山縣を知ると云ふことは出來ぬが、併し稍ゝこれを知ると云ふことは出來る

であらう。

伊藤、山縣と長州の諸人物

予が山縣に感心するのは脚下の隙がないこと、その用心堅固なること、用意の周到なること、その如何なる場合でも、若干の餘裕を殘して置くこと等であるが、それ等は皆な悉くこれを德川家康に見出すことが出來る。

それで山縣と伊藤の陣立ては、自ら相違があり、その相違の點に兩人の特色が表はれてゐた樣だ。山縣の門下と云はざる迄も、その仲間には隨分人が多かつた。同じ長州人でも、双方に共通する者もあり、又た何れにか最も親しき者もあつた。三尊と云ふが、伊藤と井上とは兄弟そのものであつた。

而して井上は何れかと云へば、山縣とも相應に親しかつた。山縣も時としては伊藤に打明け兼ぬる話でも、井上には憚らず胸襟を披いた樣だ。それで恐らくは伊藤、山縣の間に立つて、調停

でもする必要があつた時には、多分井上がその役を買つて出たのであらうと思ふ。杉孫七郎は最も井上と親しかつた樣である。これは別に政治上の野心も無い人であつたから、山縣にも、伊藤にも、相應に親しかつたゞらうと思ふ。

品川彌二郎、野村靖、青木周藏等は、長州人として何れも錚々たる人物であつたが、山縣向きの長州人であつた。青木などは、青木その人も伊藤をよく云はなかつたが、伊藤當人も決して青木の賞讃者ではなかつた。野村は曾つて、野村の妹が伊藤の夫人であつた位であり、共に松陰門下であつたが、伊藤とは相容れなかつた。それは恐らくは野村が伊藤が大臣となつた後までも、伊藤俊輔などゝいつて、昔流儀に取扱つてゐたこともその一因であらう。

山縣と白根專一

併し將來山縣に繼いで、山縣を代表する長州人があつたとしたら、それは白根專一であつた。白根は顏の半面に赤痣があつて、特色ある顏であり、何人も一見これを知ることが出來た。彼は

明治二十五年、品川彌二郎の內相の時に、內務次官として、實際內務大臣の事を行ひ、選擧干涉の巨魁でもあり、張本人でもあつた。後に宮內省に轉じた。日淸戰役に際し、山縣は第一軍司令官として、朝鮮より滿洲に進んだが、遂にその病氣の爲に召還せらるゝ時に、その使者として出掛けたのが、白根であつた。當時山縣の詩に、

馬革裹ㇾ屍元所ㇾ期。出師未ㇾ半豈容ㇾ歸。
如何天子召還急。臨ㇾ別陣頭淚滿ㇾ衣。

と云ふがそれである。その時に於て、白根以外にはその使命を果たし得る者があるまいといふことで、白根が命ぜられた程であつた。
白根はその時分から山縣の股肱といふばかりでなく、殆んど山縣のお守りをする位の腕前があつた。彼が早く死んだのは、山縣にとつては、取返しのつかない損失であつた。けれ共山縣の幕中には、彼に代はる程の者が無いではなかつた。その一人は實に平田東助であつた。

山縣と平田東助

平田東助は藩閥には緣故無き、米澤人であつて、獨逸法制の出身である。明治十五年、伊藤の憲法取調べの爲歐洲派遣の時に、隨行員の一人で、彼はその學問の筋から見ても、井上毅の下に働らくべき一人であつた。然り井上毅の下に、法制官としても働いた。然も彼は伊東巳代治、金子堅太郎の如く、伊藤の幕下とならずして、山縣の幕下となつた。而して彼は山縣派に於ける殆んど參謀長の位置を占めてゐた。

平田が何等の門閥も無く、藩閥も無く、一個の米澤人として、軍人にもならず、外交官にもならず、普通の役人として遂に內大臣、伯爵といふまでに成り上つたのを見ても、彼が尋常の腕前でないことが判る。予が親しく接した官僚の中にて、平田ほどの分別者は見たことがない。所謂る分別者とは、彼が如き者を云ふのであらう。なか〳〵智慧が廻り、思案が屆き、油斷も隙も無い。而してその表面は、伊東巳代治等とはうらはらであつて、村夫子の如く、藪醫者の如く、

不景氣な、蒼白き容色、痩せこけて慘めなほど纖弱き身軀で、何時も地獄の一丁目から宿歸りした樣な容貌をしてゐて、何處から見てもこれが山縣派の智囊とは思へぬほどであつた。

彼は又た分別者であるばかりでなく、その分別を人に吹き込むことに於て、殆んど至藝といふほどに、その腕前が利いてゐた。別に雄談高論するでもなく、蘇秦張儀の從橫の說を逞ましくするでもなく、極めて平凡なる二宮尊德流の風貌を以つて、然もなか〱聽く人をして、膝の前むを覺えざらしむる程の辯舌を有つてゐた。大概の者は平田に說かるれば、ころりと參つた。特に老人を說くことに妙を得てゐた樣である。恐らくは山縣の平田に於ける關係は、家康の本多正信に於ける關係の如きものであつたらうと思ふ。

山縣の各探題

又た山縣には清浦奎吾がゐた。清浦は熊本人であるが、これも亦た官僚としては毛色の異りたる能吏であつた。更らにこの兩人よりも後進であるが、追ひ〱は殆んど兩人と相伍するに至つ

た者に、大浦兼武がゐる。大浦も亦た薩摩人である。諺に四天王といふが、更らに一人を加ゆれば、安廣伴一郎であらう。その中でも平田が最も山縣の股肱であり、安廣は寧ろ或る場合には山縣の股肱であり、且つ平田の股肱でもあつたらう。

兎に角、山縣派にはなか〳〵人物がゐた。これはほんの概略であるが、貴族院に於ては清浦が探題であり、政黨方面に於ては大浦が探題であり、政府一般方面では平田、安廣が探題であり、何れもそれ〴〵に適當なる探題があつた。

又た軍事は山縣の本來の畑なれば、固よりその要心の堅固であることは云ふ迄も無く、此の方面に於ては、桂、兒玉、寺内などが、實にそれであつた。官僚巨頭の中に於て、芳川顯正は伊藤にもよく、山縣にもよかつた。芳川は阿波出身の人であつて、それが維新前後から薩長人と懇意になり、薩長の間に立つて身を立てゝ來たが、彼は如何なる内閣でも緩衝地帶をなして、その爲に彼は大臣の椅子を贏ち得たこともあつたかも知れぬ。けれ共彼は決して野武士式の漢でなく、又た尋常の俗吏でもなく、詩も作れば、文も作り、漢書も讀めば、英語も出來、なか〳〵多藝の人物であり、何をしても一人前の役人は出來たものである。彼は東京府知事ともなり、大藏少輔

ともなり、文部大臣でも、司法大臣でも、內務大臣でも勤めた程であつて、寔に調法なる漢であつた。

芳川顯正と田中光顯

芳川顯正は曾つて予に向つて、『自分は山縣にも、伊藤にも親しかつたが、双方から信賴せられてゐた所以は、未だ曾つて山縣の惡口を伊藤に云はず、伊藤の惡口を山縣に云はなかつたからだ』といふ樣なことを語つてゐた。予は明治三十年の五六月の交、芳川の子芳川格と同船して歸朝した。その格は、病氣の爲に歸つたので、予等も船中少からず同人に同情し、その爲に自然その父である芳川顯正とも知ることになつたのであるが、此人は前申す通りであつて、先づ循吏と云つて差支あるまい。世間では阿波の義太夫などゝ云ひ、或は幇間大臣などゝ稱し、幇間でもある如く云ひ做す者もあつたが、それでも當人はなか〳〵大氣取り屋で一通りの政治家と心得てゐた。當人に云はすれば教育勅語も自分が文部大臣の時に賜りたるものにて、冥々その努力も少くなか

つた様なことをほのめかしてゐた。將棋はなか〱強く、若い時には腕力も強くてよく角力をとつた相だ。仲小路廉なども芳川が云ふところによれば、已が見出したといふことであつた。壇打事件の時には彼が內務大臣で、それには隨分當惑した樣だ。又た他縣人で伊藤、山縣と兩人に相好かつたのは、田中光顯であつた。田中は芳川と違つて、最も氣骨もあり、又た意見もある、同時に才能もある人物で、先づ兩人にとつても難物であつたと思はるゝ。宮內省に於ては、伊藤、山縣双方の代表者とも見らるべき人であつた。併しその中で何れかと云へば、山縣六分伊藤四分位ではなかつたかと思ふ。又た薩摩人の西鄉、大山二巨頭も同樣であつて、伊藤、山縣何れともよく、この兩人は薩長聯合の必要といふ根本原則より、長州の兩巨頭と相好かつたものと見て差支あるまい。

松方と伊藤、山縣

但だ此に大なる損得の分け目となつた一人が、松方その人である。松方は大久保の寵兒で、年

齡から云へば、松方が兄であり伊藤が弟であるが、政治上に於ける立場からはそれが反對で、伊藤が兄、松方が弟であつたらしく思はるゝ。それでも當然文官中の薩摩人としては、松方は伊藤の仲間とも見らるべき一人であつたらしい。ところが何時の間にか、松方は伊藤と疎隔し、却つて山縣と相親しみ、第二次山縣内閣の頃、即ち明治三十年の末期頃には、松方は純然たる山縣の政友となつたらしく思はれた。松方、井上、大隈は、日本の財界を殆んど三分して有つてゐた。然るに大隈は反對黨として、明治政府より壓迫せられ、その爲に大隈の領土は漸次窄小せられ、日本の財政經濟界に於ける勢力は殆んど松方、井上の兩分するところとなつたといふも不可ないほどであつた。その松方を伊藤と切り離して山縣に持つて行つたのは、伊藤に於ける損失の大なるよりも、山縣に於ける得の大なる方が、より大であつた。これは誰が斯くしたかと云へば、種々の經緯はあつたらうが、予は平田東助の力ではあるまいかと思ふ。何れにしてもこれは山縣派にとつては、大なる得物であつたと思ふ。

何故に伊藤は松方を失ひ、山縣は得たるか

松方を失うたる伊藤と、松方を得たる山縣との間には、その間に非常の開らきが出來たと云はねばならぬ。固より伊藤の側には、財政經濟方面に、井上なる大物が控へてをれば、その方面に缺陷は無い樣なものであるが、松方を山縣の側に廻したことは、伊藤にとつては、恐らく非常なる損失であつたと思ふ。伊藤は才子も才子、天下の大才子であるが、タクトにかけては聊か缺けてゐる。

一口に云へば餘りに調子に乘り過ぎる癖がある。伊藤は護謨玉の如く、押せば縮み、引張れば伸びるといふ如く、その得意な時の意氣揚々たると、失意の時の神氣索然たるとは、春と冬が一時に來た位の變化では無い。山縣は如何なる場合でも、その調子が狂つたことが無い。得意の時とて餘り增長しない代りに、失意の時でもじつと怺へてゐる。辛抱は山縣の信條であつて、辛抱即ち山縣と云つても差支ないほどだ。その得意の絕頂にあつた伊藤が松方に對する仕打が、恐ら

くは松方自身の自尊心を傷けたのではないかと思ふ。それに反して山縣は心中ではともかく、表向では飽迄松方を對等に取扱ひ、常に松方の面目を擁護することを努めた様である。

松方と予

薩摩の連中では、大久保薨去後は、何んと云つても黒田が長老であつたが、この人は酒癖があつて、とても何人の手にも負へない。その次には西郷從道であるが、これは天下隨一の脇師であるが、自分でシテとなる積りは當初から無く、又た明治天皇にも彼を總理大臣とする思召は在らせられなかつた様に承つてゐる。次には大山であるが、これも政治上の野心は無い。この兩人は伊藤にもよく、山縣にもよく、只だ薩長聯合大事と心掛けてゐた人であつて、その次には何んと申しても松方である。

松方は二回首相となつたが、首相としての手際は、決して上出來とは云はれなかつた。けれども大藏大臣としての松方は、明治財政史上と云はず、明治の名臣中の一人と數へても、過當では

あるまい。此の機會に少し松方のことを語る必要がある。予は何人よりも松方とは懇意であつた。それは予の父洪水翁が常に維新前から藩命を帶びて、若くはその內命を帶びて、鹿兒島に往來し、從つて鹿兒島人士とは大概懇意で、中原猶介、關勇助、小松帶刀、重野厚之丞（安繹）高崎式部（正風）、八田知紀、何れも知合で、松方も亦たその一人であつた。

それで予は松方と相識つたことは、父の關係からである。同時に予の從兄藤島正健が、松方門下の一人であつたから、その緣故からでもあつた。又た同鄉の先輩井上毅が『松方には是非話して見ろ。彼は薩摩人の中で、最も常識ある漢だ』と云ひ、頻りに予に勸告した。それで予が松方と逢つたのは、明治二十二年紀元節、憲法發布の際、黑田總理大臣官邸に於ける夜會の席上であつたと記憶してゐる。それから彼が九十歳にて、大正十三年七月易簀するまで、日を追うてその交際は親密となつて來た。

松方の出身

予は別段政治家としての松方に敬服した者ではないが、父の執として交際しつゝ、遂に政治にも若干の助言者となつた譯である。松方は若い時には弓馬の道に達し、馬も弓も免許皆傳にて、弓では鹿兒島藩師範東鄕家から、その道の相續者として、養子に貰はれた程であるから、その造詣の程は察せらるゝ。馬も頗る心得てゐて、彼が明治天皇に御信寵を得たのも、財政家といふばかりでなく、馬に就いて、畏れながら嗜好を同じくしたからと承る。松方の參內する每に、普通の大臣に比すれば、極めて長時間に亙つて、松方の參內となれば、長いといふことは、殆んど豫定の事實であつたといふことを、側近の子爵米田虎雄は、曾つて予に語つたことがある。

又た松方自身もよくそのことを語つた。而して彼は當初海軍に從事し、維新間際、薩藩が春日丸を購入した時には、松方その人が實に運用の主任であつた。然らざればその主なる一人であつたと聞いてゐる。それで、その儘でゆけば、松方はアドミラルとなるべき筈の漢であつたが、その意見が容れられなかつた爲に、方向轉換を爲し、長崎に於て判事となり、やがては豐後日田縣の知事となり、日田縣で大いに治績を擧げ、遂に中央舞臺に乘出すことになつた。

彼の日田縣に於ける治績の中には、種々あるが、彼地は最も嬰兒壓殺の惡風流行しつゝあつた

から、松方は一切それを禁んじ、他方に於ては、嬰兒收容所を設け、それを哺育した。松方微りせば、天日を見ずして闇から闇に葬られた者が、幾許あるか知れなかつた。それ等が立派な男女となつて、松方が爾後日田に遊んだ時には、それ等の者に驩迎せられたといふ話も聞いてゐる。これには賢夫人の名ある松方夫人の力も與つて大にゐることゝ察せらるゝ。

大藏大臣としての松方

松方の大藏大臣として主なる仕事は、西南の亂の後を承けて日本の紙幣が紙屑同樣にならんとするのを、遂に切り止め、その爲に天下の不景氣を來たし、怨嗟の聲四方に漲るに拘らず、他方に於ては正貨を貯蓄し、又た人を海外に出して正貨を蒐集し、遂に銀、紙同位に漕ぎ付け、不換紙幣をして、兌換紙幣となしたこと。而して又た日清戰役後日本に金貨本位を實行したるが如きは、その最も著しき例である。其他中央銀行制度と云ひ、公債發行と云ひ、凡有る財政、經濟の方面に彼の手は及んでゐる。彼は常に誇つて予に云つた。

『紙幣價格を回復する際には、自分に贊成したものが、只だ福島縣の佐野利八と熊本縣の山田武甫二人であつた。然も明治天皇が終始一貫、御支持遊ばされた爲に、遂にそれが首尾克く出來上つた。そこでその際の陛下の御滿悦と云ふものは、寔に難有きことにて、御手づから正貨を御攫み遊ばされ「松方これをやるぞ」と賜つた樣な次第で、實に感激に堪へなかつた。』

又た『金貨本位の時にも、伊藤、井上は勿論、民間の亘頭澁澤なども反對であつたが、遂にやりつけた』と云つて、何時も得意に話してゐた。松方の金貨本位に關する報告書の總論は、松方の名によつて予が筆を執つたものである。それは今尚ほその報告書の卷頭に掲げてある。

財政經濟家として松方の自信

松方には後入齋などゝいふ難有からぬ名を付けて、その意見が豹變する樣に云ふ者があるが、大抵の者は先入齋でなければ、後入齋である。必らずしも松方一人に限つたことではない。彼は財政、經濟の學に通じてゐるといふでは無いが、その大綱だけはよく摑んでゐた。曾つて佛蘭西

博覽會の時に、日本より派遣せられ、當時佛國にて有名なるレオン・セイに面會して、誨を乞ふたことがあつた。

　レオン・セイは學者でもあつたが、大藏長官たることもあり、又た元老院議員としても、國家財政の實務に參加したこともあり、彼の意見は何れかと云へば、自由派にして、先づ穩健なるものであつたから、松方には最も適當なる先生であつたらうと思ふ。財政、經濟の話をすれば、二口目には必らずレオン・セイの話をした。

　曾つて松方は、〝桑名の諸戸清六は人に向つて、相場の相談は大隈さんと爲し、經濟の相談は松方さんとすると云つたさうだ〟と云つて、自分と大隈との立場を此の如きものであると語つてゐた。卽ち大隈は相場師の親玉で、自分は天下の財政經濟家である如き自信力を持つてゐた。而して井上に對しては全く臺所經濟であるといふ樣な風に考へ、井上が餘りに部分的に頭を突込んで大體を閑却することを諷してゐた。

松方と井上

井上と松方との關係は、伊藤と松方との關係よりも寧ろ圓滑であつた。互に領域を守つて相侵さず、兩人の間には何やら紳士條約でもあつた樣に見受けらるゝ程であつた。不遠慮の井上も、松方に向つては遠慮してゐた。それで種々の問題に於ては、松方、井上共同にて引受けたことが鮮くなかつた。併し打割つて云へば、松方も井上の財政論には敬服してゐなかつたが、井上も勿論同樣であつたと思ふ。

骨董にかけては、井上は眼が利いてゐるか否かは別問題として、大先達である。彼の知邊、彼の門下は、何れも名畫、珍器を井上に捲上げられまいとして、それ〴〵可笑しき程手段を廻らし、井上の眼より陰蔽を力めてゐた程である。松方は井上ほどではなかつたが、相當の好き者であつて、その所藏もかなりあつた。曾つて或日閣議の席上、餘談に亙つて、井上が『某の處に某の人が、某の幅を賣らんとしてゐる。それは斯く〳〵の幅にて、寔に結構のものである』とい

ふ話をしたが、松方もそれを聽いて、曾つてその畫に就いては彼も既に一指を染めてゐた時であるから、『これは大變』と考へ、急に假病を作り、早く退席して早速駈け付け、井上の畫を何時の間にか明したといふ様な話も聞いたことがある。それが何の畫であつたか、又た何時であつたか、今それを思ひ出せない。

松方に關する逸話

併し松方の嗜好は何よりも書であつて、字を書くことは彼の最も得意とするところであつた。晩年には大師流に凝つて、最も習字に力め、恐らくは死に至るまでそれを止めなかつたであらうと思ふ。予にも得意の書が出來れば屢〻これを示し、又た時には携へ來つて贈られたこともあつた。

予は彼が字を書くのを、傍らから見て、自分ながら汗が滲み出た。それは彼は一字を書くにも、渾身の力を用ひて書くので、これを傍觀してさへも、自然に力が出るほどであつた。而して松方

の書は恰も松方その人の體格若くは性格を表現したるもの〻如く、豊厚悠長なものであつた。
勝負事は何れかと云へば、松方の最も好まないところで、その子弟が碁を打つと云つて、或時碁盤と碁石とを庭に投げ出したといふことも聞いてゐる。大久保甲東は、圍碁の癖ありて、如何なる大事件に際しても、これだけはやめなかつた。そこで松方は大久保に向つて、これを諫めたところ、大久保は儼然として、『碁を止むれば、私は死にます』と答へたから、それ以來は再び碁に就いては大久保に向つて、口を開かなかつた。

松方は井上（毅）の云つた通り、最も常識家であつた。又た長官としても、餘り苛察でもなく、又た放漫でも無つた。謂はゞ中庸を得てゐた。松方が曾つて井上のことを評して、『某表具師が予に向つて云ふには、井上さんのお叱言は、寔に閉口致します。あの調子ではとても總理大臣などは勤まりますまいと云つた』と、予に笑つて語つたことがあつた。その點に於ては松方は井上に比すれば、寧ろ鷹揚であつた。

併し松方は決して見掛け通りの好々爺では無く、薩摩人に共通する多少の機略もあり、變通も心得てゐたが、併し何と云つても常識家と云ふの外はあるまい。

松方の得意の話は、文久二年八月生麦事變の時、彼は島津久光の隨行者として、その駕籠脇に居たが、先驅の者が西洋人を斬つた騒ぎで、供の面々がどつと一度に其處に集まり、駕籠脇は無人にならんとしたから、松方は大音聲を上げて『駕籠脇を離るゝな』と制止したといふことである。若し櫻田事變に、松方ほどの者が、井伊の駕籠脇に在つたならば、空しくその首を取らるゝ樣なことは無つたかも知れぬ。

伊東巳代治と松方、井上の絶交

話代つて、東京日日新聞が、伊東巳代治の手を離るゝに至つた動機は、東京日日新聞の『近事片々』に井上と松方のことを惡口した。それは固より深き意趣あつたものではなく、當時新聞社にゐた八木某といふ者が、受持つて書いたといふことであつて、謂はゞ出鱈目と云つても差支無つたであらうが、それが如何なる故か兩人の逆鱗に觸れ、遂に連名にて、持主である、伊東巳代治に絶交を申込んだ。

當時巳代治は樞密顧問官であつて、傍ら東京日日新聞の持主であつた。それが爲といふではあるまいが、この事よりして巳代治は東京日日新聞を、加藤高明に讓り渡した。而して殆んど同時に松方、井上とも絶交を撤回することゝなつた。這般の消息は、野田大塊、都筑馨六などは多分知つてゐるであらうと思ふが、兩人共今は此世の人で無いから、聽くことも出來ず、語ることも出來ない。

松方の自慢話

松方の體軀は薩摩人通有の堂々たるものであつたが、その容貌は如何にも肉付きよく、白頭、白髭、面目悠揚、溫厚にして、篤實に見え、何人も此人ならばと云つて、人に安心を與へ、若くは信用を與へる樣な容貌の持主であつたことは、彼にしては恐らくは一得であつたらう。且つ曾て君側を勤めたこともあり、その行儀も寔によく、從つて高貴の方に對する態度も、自らその宜しきを得て、高貴の方々も心置なく彼を近付かせられたかと思はるゝ。

畏れながら明治天皇にも松方には時たま御揶揄遊ばされ、御戯談も仰せられたかに承る。曾つて松方邸に行幸の節、その子女に謁見仰付けられて『子供は何人あるか』と御下問の時に、松方がその夫人に『算盤を持つて來い』と話したことは、誰やらが製造した話であるが。明治天皇が彼に對し給ふ御態度は、如何にも御眷愛が渥かつたらしく拜察せらるゝ。

松方は只だ篤實一遍の漢でもなく、彼には彼相應の掛引きもあり權數もあつた。西郷南洲はなか〳〵大悪戯者であつて、或時、陳元輔の書巻に臨書し、大山巖を使として、大久保甲東に賣込みにやつたが、大久保は忽ちこれを看破して、『切角の思召だが』と引下つた。それで轉じてこれを松方に賣込まうとしたが、松方はそれを見るや否や、『西郷さんの書としては、見事のお出來であり、難有く頂戴仕る』と、その儘沒收してしまつた。

南洲はそれを賣つて、皆に御馳走をする約束であつたが、松方にロハで捲上げられて、全くその豫算が狂つた。その巻子は最近まで松方家に保存されてゐた筈である。松方はよく此の話をして、これを手柄自慢の一つに加へてゐた。

自分では廢藩置縣論は、日田縣知事の時に持出したといふことを云つてゐる位で、政治上にも

相當の見識があり。又た中年以後は專ら外交に心掛けてをり、日清戰役に先づ臺灣を占領せよなど丶いふ論も、彼は隨分早くから唱へてゐた。日英同盟に就いても、可成り熱心者の一であり、日露開戰に就いて、御前會議の節、伊藤が當時の大藏大臣曾根に向つて、『開戰となれば、財政の方は見込みがつくか』と問うた時に、曾根はハタと行詰り、一句も出でなかつた。その時松方は井上を顧みて、『不肖ながら我等兩人にて、最善の努力をするから、その方面は御安心あれ』と云ひ放つたといふことである。これ等は松方としては、先づ大出來のところであらう。

尙又た今上天皇が、皇太子として、歐洲御渡航の際にも、松方はその有力なる翼成者であつたと聞いてゐる。兎も角も彼は皇室に對しても、國家に對しても忠勤を抽んで、公爵までも賜つたが、今日彼の家は全く無爵となつてゐることは、有爲轉變の世の中とは申せ、餘りに變化が甚しき樣に思はれる。これには君德輔弼の方々にも、多少考慮せらるべき筋があらうと信じてゐる。

伊藤と川上操六、山本權兵衞

話は又た伊藤、山縣の陣立てに戻るが、山縣は武を本據として文に行つたが。伊藤は文を本據として、武そのものといふべきものは無つた。併しいざとなれば薩人の西鄕、大山は伊藤の味方であつたから、武人の味方に不足は無つた。のみならず川上操六、山本權兵衛の二人は、何れも山縣にとつては、相當の苦手であつたが、それが伊藤の子分と云ふではないが、先づ伊藤に親しく且つ近かつた。若し川上が日露戰役頃まで生存したならば、伊藤にとつては鮮からざる味方であつたかも知れぬ。川上の訃音に接したのは、伊藤が明治三十二年九州旅行中であつた。その時伊藤は餘程落膽したと見えて、左の詩を賦してゐる。

萬點流螢聚二綠楊一。　一痕纖月吐二寒芒一。

天邊忽報將星落。　起聽荒雞獨斷腸。

權兵衛は桂内閣の時には、政友會が海軍費を削除した爲に、伊藤までも向うに廻して鬪つたが、それでも何れかと云へば、伊藤とは最後まで親しかつた。何事にもあれ、權兵衛は伊藤に話を持込んだ。山縣が桂に首相を讓らんとした時も。又た兒玉が臺灣より南淸に手を出さんとした時も、皆な權兵衛が伊藤に持込んで、これを打毀した樣に聞いてゐる。

更らに前に溯つて見れば、伊藤は元田永孚に深く結んでゐた。これは予が親しく伊藤から聽いた話であるが、『至尊に對して種々政務に就き、奏上する毎に、即座に御裁可を受けることが容易でない。それで自分はこれは誰ぞ至尊の御背後に、最高顧問が居るであらうといふことを考へ付き、物色して、初めてそれが元田永孚であることを知り、それで元田と肝膽相照らすことになつた』といふことであり、『尚ほ元田と自分との關係に就いては、語るべきことがあるが、他日を期する』といふことで、彼はハルビンに立つて行つた。予もそれを樂しみとしてゐたが、遂にそれを聽くことが出來なかつた。併し聽かなくとも、その大略はよく判つてゐる。

元田の話を——これは直接では無い——聽けば、『主上から伊藤も今度洋行して歸つた後は、餘程見識も老成して來た。それで汝もよく伊藤と申合せよ、といふ御内示を承つて、自分は腹藏無く伊藤と意見を交換した』と云つてゐた。又た彼は曾つて伊藤に就いて語り、『如何にも現代

得難き人物であるが、只だ惜しきことには、これが缺けてゐる」と、「重厚」の二字を、手にて卓上に書いて見せたといふことを聞いた。

これを予に話した漢は、嘘を吐く樣な漢では無く、又た元田から斯る話を聽き得べき立場に在つた漢であつたから、予もその話は間違ひあるまいと思つてゐる。

大隈の條約改正の時に、伊藤はこれを外よりし、元田はこれを内よりして、遂にそれが中止となつたことは、彼等兩人の合作と云つても差支あるまい。固より彼等兩人以外にも、澤山の反對運動者はあつたが。

高島鞆之助

予は薩摩人としては、多くの交友を有つてゐるが、松方以外に最も今尙ほ追慕の情に堪へぬのは、高島鞆之助である。今日では高島などゝ云つても、その名を記憶する人さへ少いほどであるが、彼が師團長として、大阪に龍蟠虎踞してゐる際には、殆んど天下を動かす程の勢力を有つて

ゐた。彼は只だ一個の第四師團長に過ぎなかつたが、然も朝野を擧げて、官民を論ぜず、有志家でも、實業家でも、その門戶は開放せられ、彼の一言一行、一擧一動は、殆んど天下を動かすに足るものがあつた。

謂はゞ彼の華は大阪に於ける師團長時代であつたらう。爾來彼は陸軍大臣となり、又た拓務大臣となり、更らに陸軍大臣となつたが、漸次彼の運勢は、面白からぬ方に動き、その死するところは、寔に淋しかつた。

併し彼は薩摩人の中では、最も面白き薩摩人の一人であつたと思はるゝ。彼は又た堂々たる幹軀で、その顏の造作も、なか〳〵大きく、色は淺黑くして、一見尋常の漢でないといふことが判つた。然も應接の妙を得てゐて、澤山も喋らず、モノシラブルであつても、よく彼と對話する者をして滿足せしめた。

適々彼をして口を開かしむれば、滔々として議論をした。併し議會の演說は苦手と見えて、それには頗る閉口した樣である。

高島と川上操六

高島は金錢に對しては、殆ど無軌道といふ程、よく散んじた。つまり金錢には極めて執著力が薄かつた。同時に恐らくは拂ふものも拂はなかつたであらう。彼が紀尾井町に邸を構へた時に、それを請負つたる或る紳商は、何時まで經つても、勘定を與れぬと云つてこぼしてゐた程であつた。併し差引勘定して見れば、取つたよりも散んじた方が多かつたに相違は無く、その取つた事も畢竟散んぜんが爲に取つたに相違あるまい。

若し彼の傍によき蕭何がゐたならば、彼はその方面では躓かなかつたであらうが、彼は政治上の仕事をするには、金錢の必要なることを痛切に感んじ、その爲に金山を掘るなどの仕事に手を出して、遂にそれが彼に附き纏ふ一生の癌となつた樣だ。

併し人間は寔に痛快の人であつた。彼はよく士を愛し、その門下には澤山の人が集つたが、餘りに無差別であつた爲に、世間からは鷄鳴狗盜の雄であるかの樣に思はれた。彼に比ぶれば川上

操六は建設的の才能を有つてゐた。薩摩人としては又た容易に得難き人物であつた。器の大小から見れば、高島は英雄型であり、川上は才子型であつたが、川上の才は決して諞々たる虚才でなく、眞に實用に適する實才であつた。

川上は内務大臣としても、大藏大臣としても、如何なる大臣としても、至る處に相當の腕前を示したであらうと思はれた。彼は事を成すには人であらねばならぬといふことを知つて、極めて人材を物色して、これを我が部下に致し、然らざるまでも、我が交遊の埒内に入れることを力めた。又た有力なる人士とは交驩して、出來得る限りの驩心を得ることを力めた。

同時に仕事を爲すには、經綸が必要であるといふことを考へ、大綱より細事に至るまで、順序を立て、次第を定め、これを秩序的に實行してゆくことを心掛けた。卽ち二十七八年戰役は、此の如くにして出で來つた。三十七八年戰役には遂に及ばずして逝いたが、然も半ば彼の力と云ふも差支あるまい。

川上操六と桂太郎

井上馨侯

川上操六大將

明治軍人の秀傑川上操六

若しプルタークの流儀に依つて、山縣と伊藤とを合傳とせば、桂と川上も亦た同樣にすべき、凡有る條件を具へてゐる。予は川上にも親しみ、桂とも多年懇意の間柄であつた。双方に就いて恐らく最も深く知つてゐる第一人とは云はぬが、その中の一人ではあらうと信ずる。

過般、石黒況齋翁を見舞うた時、――子爵石黒忠悳、九十三歳――翁申さるゝには、『自分は老病、とても長く此世に望みはない。就いては貴兄に願ひ置きたき一事がある。それは川上大將のことである。大將が日清戰役に際し、如何に多くの貢獻をせられたるか。又た日露戰役の準備に如何に盡瘁せられたるか。貴兄が最もよく知るところである。然るに世間では、大將一たび去つて、これを聽かんとする者も無く、これを語らんとする者も無い。就いては何んとか貴兄の筆によつて、川上大將の豐功偉勳だけは、傳へて貰ひたきもの』と泌々語られた。

石黒子爵は日清戰役には、野戰衛生長官として、川上兵站總監と與に努力せられたる人であ

り、その爲に爵位も授けられたことは、云ふまでも無い。川上大將の死んだのは、明治三十二年五月で、僅かに五十三歳であつた。卽ち賴山陽と同年齡だ。然るに幾許もなく、大將の友人及び門下の人々によつて、九段坂上に銅像が建てられた。而してその銅像を建つる際には、嘗つて大將の先輩であり、若くは同輩であつた人々に依つて、餘り好感を有たれなかつた。それは恐らくは時期が少しく早過ぎた爲であり、若しくはそれ等の人々の諒解をよく得られなかつた爲でもあらう。

從つて其後、その傍らに出來た品川彌二郎子のそれに比較すれば、甚だ貧弱なものである。今日から考ゆれば、その時の銅像建立は見合はせた方が賢明ではなかつたかと思ふ。併しそれは今更ら致方がない。兎も角も、川上大將は明治の軍人として、傑出したる一人であつた。

川上操六のタイプ

薩摩人はその體格から云つても、二通りある。一は西鄕型であり、他は大久保型である。卽ち

身體は長大にして、その筋骨の逞ましきことは、殆んど幕內の力士同樣であつて、誰が見ても强さうに見える者がある。南洲はそれであつて、弟西鄕、大山元帥、樺山伯、高島子、若くは文官ではあるが、松方公などゝいふは、そのタイプである。

他は何れかと云へば、瘦せ型であつて、必らずしも幹軀長大では無いが、併し精悍の氣が全身に漲つてゐる。謂はゞ先づ大久保型とでも云はうか。併し大久保公は、その幹軀は頗る堂々たるもので、大久保公が內務卿時代に腰掛けた椅子は、其後幾多の內務大臣が出來ても、身體がそれに釣合はなかつた程だ。併しそのタイプの人は必らずしも堂々たるものでは無く、時としては普通以下の小男も偶ま見受くることがある。例へば野津元帥の如きがそれである。中井櫻洲山人の如きも亦たそれである。大浦兼武子、伊瀨知好成男の如きもそれである。川上大將も何れかと云へばそのタイプであつた。

川上大將は額は聊か禿上り、眉は濃く、眼はぱつちりとして、中肉中脊、寔に好男子であつた。別にその容貌は豪傑らしくは見えぬが、如何にも俊敏の氣が全身に滿ち溢れてゐた。薩摩人と云ふは、槪して新派俳優高田實の如き、ぼんやりした、ヌーボー式であるが、川上大將はとてもヌ

ーボー式などゝいふことは、藥にしたくも出來なかつた。それとてけち〳〵した小才子風でも無つたが、打てば響くといふ樣な、機敏であつて、然も應對が朗かであり、何人に向つても、一見舊知の如くであつた。怒る時に鬼神が恐れたか否かは知らぬが、子供でも、女でも、誰でも親しまぬ者は無い程の愛嬌や會釋を持つてゐた。

併し川上大將を單に世渡り上手の小才子と觀るのは、大なる誤りであつて、彼は常に胸に大なる一物を藏し、それを成就することに千辛萬苦した。早い話が第一次の仕事は、淸國との戰爭であつた。これは首尾克く仕終せた。第二の仕事は露國との戰爭であつた。これは準備中に逝いた。併し彼が如何にその爲に努力したるかは、所謂る知る人ぞ知ると云ふべきであらう。彼には常に右の手を以て、その額から髮を撫で上げる癖があつて、それは畏れながら明治天皇の御目に止まり、川上には斯く斯くの癖があると、侍臣に仰せられた旨を承つてゐる。それ程彼は陛下の御目に留つてゐた。

予と川上との交渉

明治十七八年頃から、陸軍に二つの星が輝き出した。それが川上、桂であり、若くは桂、川上であつた。予が『國民之友』に筆を執る頃には、この兩人の星が最も輝き出した。新聞記者は如何なる場合でも、方に舞臺に上らんとする役者を物色するを、一の仕事としてゐる。それで予はこの兩人に就いては、常に注意を怠らなかつた。

併し當時の予の考へでは、兎角才幹ある軍人は野心が多いものであるから、この兩人は他日我が憲政の邪魔をするものではあるまいかと、心竊かに疑惧してゐた。それで自ら進んで近付くとはしなかつた。然るに議會は開設せられ、その後桂は高島の大阪師團長より入つて陸軍大臣となるを潮合にして、陸軍次官を罷めて、名古屋の師團に赴き、川上は累進して參謀次長となり、謂はゞ中央は川上一人の舞臺となりつゝあつた。

斯くて明治二十七年東學黨の亂は、朝鮮半島に起り、愈ゝ我が出兵を必須とする場合に於て、

予は遂に川上大將――當時中將――と會見することゝなつた。人を射らば馬を射よと云ふ。斯る場合に於て、好きとか、嫌とかは問題でない。新聞記者としては、先づその種の根源を探らねばならぬ。

當時予の立場は、伊藤内閣に反對であり、伊藤内閣に向つてその種を取ることは、殆んど不可能であつたが、陸海軍は内閣の勢力範圍の外といふ程では無い迄も、左程その勢力が濃厚に及んでゐない場所であるから、反對黨としての我等が種を取るべき場所は、此處より外に無つた。

そこで予は川上大將と面會したが、一度び面會するや、殆んど十年の知己もこれに若かざる心地がし、それから殆んど一日に一回、時としては一日に二回も彼を訪問することゝした。當時の川上も恐らくは予の書いたものを讀んではゐなかつたらうが、予の評判――好評にせよ、惡評にせよ――だけは若干聞いてゐたに相違はなく、彼も亦た予を單に新聞記者の種取りとして待たず、同志として待ち、書くことゝ、書かぬこととの區別を定めて、凡有る事件の進行と曲折とを語つてくれた。當時の彼の宅は、現在大橋新太郎君の邸の一部分にして、參謀本部次長の宅としては、餘り立派とは云はれなかつた。木造の洋風建築にして、應接間が二つ連らなつてゐた。然も

その應接間は、只だ板壁を隔つるばかりで、奥の應接間で話すことは、入口の應接間に居れば、殆んど手に取る如く聞える程であつた。その傍らに日本屋の住宅があつたが、それも手狹きものであつた。

當時の内閣は、和戰何れとも決せず、川上參謀次長は、内閣を引摺つて、是非とも戰爭まで持つて行かうといふ積りであつたらしく、その爲我等にも少からざる良き種を供給した。從つて川上大將に依つて、予は當時の參謀本部の有用なる人物に紹介せられた。土屋光春、福島安正、東條英教抔といふ樣な人々も、その機會に知つたのであつた。その外、他日は大將になつた連中が、大尉や、中尉でゐた者も鮮くなかつたが、それ等の人々とも、何時の間にか友人となつた。

思ひ遣り深き川上

川上大將は頗る思ひ遣りの深き漢であつた。故上遠野富之助君は、東京で新聞記者をしてゐる中に、屢〻川上大將を訪うて、種をとつてゐた。然るに君は實業家となつて名古屋に赴いた。明

治二十七年九月十三日、天皇陛下が大本營を廣島に移し給ふ時に、名古屋に御一泊遊ばされ、當時名古屋の官民は、何れもこれを奉迎した。然るに川上大將は、その奉迎の人々の中から、上遠野君を見出し、わざ〳〵その近くに立寄つて、挨拶を爲し、久濶の情を述べた。

これが爲に上遠野君が如何にその面目を名古屋人士の間に施したか。或はこれによつて君が名古屋に於ける位置は、一層高くなつたといふことが出來なければ、若干確實になつたことは、間違ひあるまい。斯る例は幾許もある。彼は實にかゆい處に手が屆く漢であつた。

又た當時、國民新聞記者として、久保田米僊畫伯が、朝鮮に赴き、平壤陷落の後、廣島に來るや、川上大將の紹介に依つて、愈々大本營に赴き、御前揮毫を爲すことが出來た。而してそれが出來た後には、大將はわざ〳〵米僊畫伯を招き、更らに祝宴を擧げた。此の如く、苟くも一藝一能ある者は、悉く彼より認識せられたが、特に彼に感心すべきは、一藝一能なき者までも、苟くも彼に近付く者は決してこれを粗末にしなかつた。

能く小能く大の川上操六

凡そ川上大將の家に何等かの用事を持つて行く、車夫、別當の輩でも、空手で歸つたことが無いといふ程、大將は細かいところにもよく氣をつけてゐた。併し細かいことに氣の付く人は、大きいことには氣が付かぬが、さうではなく、大將はよく大體の方針を定め、それに向つて人物を簡拔し、各〻適材を適所に用いてその用を做さしむることに於ては、恐らくは他にその比類少かつたであらう。

兎に角何人も彼の下に就くものは、喜んでその仕事を爲し、自ら勞して、その勞を忘れしむる程であつた。彼は又た薩摩人としては珍らしく、金錢に淡泊であつた。されば彼は日清戰爭までは、恐らくは何等の貯蓄などゝいふものは無かつたであらう。日清戰役に大功を奏し、一躍金鵄勳章功二級を賜ひ、子爵を授けられ、少からざる恩寵を忝くし、漸く一人前の將官らしき生活が出來たが、それでも死する時は餘財幾程もなかつたと云ふことだ。

川上大將は初めから露西亞に對するには、先づ支那と親しまねばならぬことを考へ、戰爭最中から如何にして支那と親和すべきかに、それ〴〵手段を講じてゐた。それで彼はその方面には凡有る力を效し、又た自ら對露西亞の關係からして、シベリア方面にも旅行し、又た對亞細亞の關係からして、南支那より安南方面にまで赴いた。併し彼は心臟病を患ひ、日清戰役後は、その健康が比較的惠まれなかつた。

予は種々のことに就いて、相談したことがある。予が明治二十九年五月、世界一週の途に上るに先立ち、彼は當時參謀總長となつてゐたが、その參謀本部の主なる連中を率ゐて、予を一夕星ケ岡茶寮に招き、送別をした。而して翌年の夏、予が歸つて松方内閣に就官せんとする場合も、予は彼と語つて『とても見込みは無いが、男として今更ら逃ぐるわけにも行かず、討死のつもりで、この渦中に飛込むことゝなつたが、後の始末に就いては、尙ほ御相談することもあらう』などゝ云つたことがある。

其後彼は戰功の賜金によつて、隣家を買取り、家らしき家を作つたが、間もなく病に犯された。或ひは『その家が祟つたのではなからうか』とさへ云ふ者があつた。然ることのあるべき筈は無

く、畢竟日清戰役に餘り苦勞した結果であらうと思ふ。

その當時から、橋本雅邦の繪を愛し、その爲に雅邦の名作が若干彼の手に入り、雅邦とも亦た親しく相語る間柄となつた樣だ。予は偶然上野の展覽會で彼と出會し、彼に誘はれて、上野の或る旗亭で橋本雅邦、岡倉覺三など〻會食して、久振りに雅談を、試みたことを記憶してゐる。

その時彼は、『比ろ矢野公使――文雄――が北京から、乾隆時代の紙を送つて來たから、その紙に雅邦翁の畫を書いて貰ひ、貴君に獻上しよう』など〻云つたが、やがて彼はそれを果すに遑あらずして逝いた。予はそのことを覺えてゐて、改めて親しく雅邦翁に揮毫を乞ひ、翁はこれを快諾し、翁が特製したる雅邦紙に、四季の繪を描いてくれた。

予は當初翁に向つて、『筆墨を最も少く使ひ、而して畫趣を最も多からしむる畫が欲しい』と注文したが、翁はその注文を眞正直に受けて、描いて吳れた。予も感激の餘、予としては相當なる謝禮をし、それは今尙ほ大切に保存してゐる。

予と桂との交渉

話代つて予が桂と相識つたのは、明治二十八年五月二日、滿洲蓋平に於てゞあつた。當時桂は漸く海城の籠城を脱し、平和條約となつて、蓋平に師團司令部を置いてゐた。予は當時、滿洲なる我が占領地を巡遊し、端なく蓋平に來つて、彼を訪問し、親しく相語ることが出來た。固よりその以前から桂の面だけはよく知つてゐた。

曾て予が輕井澤から歸る頃、汽車を同じくしたる軍人があつた。それは多分明治二十一年か、若くは二年頃であつたと覺えてゐる。遂に語る機會は無つたが、その面目容貌はよく覺えてゐた。桂は川上とはその容貌に於ても、全く別のタイプであつた。大頭のおでこで、胴は長く、脚は短く、全體の釣合はとれてゐないが、併し一見福相であつた。されば桂のことを大黑と稱し、友人仲間では大黑と云へば、皆桂のことゝ合點いた。馬に跨れば、普通の立派な軍人であるが、徒歩立ちとなれば、脊がやゝ低き憾みがあつた樣だ。色は淺黑かつた。眼には油斷がならぬ閃きが

あつたが、同時に愛嬌があつた。

どう考へても好男子とは見えぬが、併し子供の時には、定めて愛嬌があつて、可愛き少年であつたと思はるゝ。從つて少年時代から君側を勤めてゐた程であつた。予は蓋平で逢つて以來、再び相見えるの機會は少かつたが、板隈內閣の時には、偶然の行掛りで、自然頻繁に交通した。

予は初から板隈內閣の贊成者では無つた。當時桂は板隈內閣の陸軍大臣であつて、彼は西鄕海軍大臣と與に、板垣を主とする自由黨、大隈を主とする改進黨の兩派の外に特立してゐたから、その進退も比較的自由であり、同時に西鄕海相は大隈派と接近し、桂陸相は板垣派と接近して、各〻その情報を得つゝあつたから、我等は新聞記者として、常に陸軍大臣官邸にて、情報を得ることを努めた。

當時予の代りとして、故阿部無佛翁を差向けたが、餘り屢〻往來するから、後には桂陸相も、『どうか裏門から入つて貰ひたい』などゝ云つて、注意をしてくれた程であつた。

それから板隈內閣が瓦解し、山縣內閣が出來つゝある當座、大阪に於て陸軍大演習のある際には、桂は第二山縣內閣製造の爲に、頗る奔走するところがあつた。予は當時桂と大阪に於て相見

たが、それ等のことは今茲に詳しく語る必要がない。

桂、川上の紳士協約

兎に角これから少しく桂が予に自ら語つたものを語るであらう。

事は明治十七年の初である。當時の陸軍卿大山は、明治十六年の末、陸軍の各科の人物を選抜し、軍事上の視察の命を奉じ、明治十七年、一行十四人が愈〻出發することゝなつた。當時桂は陸軍大佐にして、參謀本部局長の一人として、隨行を命ぜられたが、歩兵科の大佐川上近衞聯隊長も亦た隨行者の一人であつた。桂は何れかと云へば、獨逸に二回も留學し、獨逸仕込みの武官にて、謂はゞ學理派の筆頭であつた。川上は何れかと云へば、實地派の筆頭であつた。

然るにこの兩人を選抜して隨行せしめたる大山は、兩人に向つて申すには『陸軍將來の事、一に貴君等兩人の肩上にあり。今後は宜しく互に提携して、その任務を盡され度し』と云つた。これが兩人の心肝にしみ〲と浸み渡つたと見えて、これから兩人互に『如何なる場合にも我等

兩人は、誓つて喧嘩をせぬであらう。君は軍事を擔當せよ。我は軍事行政を擔當せん』とて、交交相誓つたと云ふ。

斯くて桂は予に向つて『流石に大山さんは器が大きい』と云つて賞讃した。これは決して例のニコポンでなく、心から敬服した樣に思はれた。爾來この兩人は明治十七年二月、横濱を解纜するより、船室を與にし、巡遊中は旅館でも何時も同じ室に入り、互に相ひ扶掖し、十八年一月に歸朝した。

當時の隨行者中には、兩人の先輩野津、三浦などもあり、中には旅費を食ひ貯めて貯蓄したといふ人さへあつたといふことであるが、兩人は一錢一厘の貯金も無く、悉く消費し、借金をこしらへて歸つた程であると云ふ話を聽いた。何れにしても兩人は互にさるもの、喧嘩をしては双方が損であるといふことを考へ、互に陸軍部内に於ける、紳士協約を定め、陸軍省は己が持つ、參謀本部は君が持てと、軍事と、軍事行政とを、互に分擔することにしたのであらう。

桂は兎も角も維新以來、直に奥羽の戰爭から歸つて、横濱にて外國語を學び、それより獨逸に留學し、歸つて來たのが、明治六年の末である。而して又た明治八年四月、再び獨逸に赴き、十

一年六月井上馨が、大久保内務卿の遭難に際して、倫敦から召還さるゝ時、相伴つて歸朝した程である。兎に角外國流の學問は一通り出來てゐたに相違はない。

桂、川上と讀書

併し桂は一生讀書子では無かつた。獨逸留學中には、ゲーテや、シルレルの若干を讀み、神學さへも幾分か嚙つたといふ位である。けれ共中年以後は新聞以外には、書物らしき書物は讀まなかつた樣である。予と相識つた後は、『本は德富さんが讀んでくれるから、自分には必要が無い』などゝ、勝手な理窟を振り廻してゐた。この點に就いては、川上は尚更らであつた。兩人共人間學の卒業生であつたが、讀書の方には何れかと云へば、緣遠かつた。山縣は一介の武弁と云ひつゝも、讀書はなか〳〵好物であつた。特に新智識を得んが爲には、如何なる書物でも手にすることを敢てした。又た兒玉なども讀書家ではなかつたが、一寸詩位は作つた。寺内は何れかと云へば、讀書家の方であつた。

川上は曾つて近衛聯隊長として、明治天皇小金井觀櫻の行幸に陪した。何れも歌題を賜つたが、將校、諸官、苦吟とれを久しうした。然るに彼は直ちに左の一首を短册に認めて、天覽に供へた。

草木には情なきものと思ひしに
今日のみ幸に散るぞめでたき

斯る歌では、島津義弘や、新納武藏守は『後世恐るべし』と一笑するであらう。併しそれが却つて天顏の喜びを添へ奉つたやうに承る。彼にとつてはその缺點さへも善用するの道を知つてゐた。

桂、川上の兩人が讀書子で無つたことは、確かに伊藤や山縣に一著を讓らねばなるまい。併し兩人共タクトにかけては、何れが甲、何れが乙といふことはなかつた。

論功行賞に於ける川上、桂

日淸戰役の始まるや、桂は第三師團長として、屢〻出征のことを參謀次長たる、川上に申送つ

た。併し何と云つても第五師團が地の利を得たからして、第五師團に先立つことは出來なかつた。併し愈〻彼が第三師團を率ゐて出征した時には、第五師團長野津道貫は、意地惡くも彼の來着を待たず、平壤の戰爭を仕終つた。桂は地團駄を踏んだが、とても追付かなかつた。

併し爾來第五師團と第三師團は、加藤、小西の如く、互に交替して、先鋒となつて滿洲に侵入したが、桂は故らに深入りして、第五師團に置いてけ放りを食はせ、遂にその爲に海城の籠城となつた。川上は予に向つて『この戰爭中、大本營に向つて、援軍を乞ひ來つたのは、桂だけである』と云つたが、桂としては數萬の優勢なる大軍に包圍せられては、援軍を乞ふのも致方は無つたであらう。併し廣島に在る川上は、戰地の桂に向つて、廣島からよく物を送つてゐた樣である。

彼等兩人は過去は兎も角も、同時に大佐となり、同時に陸軍少將となり、同時に陸軍中將となり、互に一歩たりとも先に出でず、一歩たりとも後に殘らず、毫厘の違ひもなく進んで來た。愈愈論功行賞といふ時になつても、川上は當然參謀次長とし、野戰兵站總監としての功勞により、子爵を授けられたが、自餘の師團長は、何れも男爵であつたに拘らず、桂のみは、戊辰の戰功を併せ加へて、川上同樣子爵となつた。これも恐らく川上に對する均衡上、然かしたものであらう

と察せらるゝ。

三十七八年戰役前後に於ける桂

尾崎行雄君は、『最も嫌ひな漢は袁世凱と桂太郎である』と、幾度か繰返してゐた。好き、不好は銘々の勝手であつて、予は別段それに對して抗議をいふ理由を有たぬが、好きにせよ、嫌にせよ、桂太郎は明治の政治家としては、個人として最も多くの事功を仕遂げたる一人であることは、歷史がこれを語つてをり、又た證據立てゝをる。日露戰爭を絕頂として、その前後數年間に於ける、首相としての彼の働きは、目覺ましきものであつた。

予は人物としては、伊藤、山縣は勿論、大隈、板垣など、それ〴〵特色あつて、或は桂以上といふべき人がその他にも鮮くなかつた樣に覺えてゐる。併し政治家としては、彼以上の者を見出すことは、容易でないと思ふ。端的に云へば三十七八年戰役の如きも、彼なればこそと思ふ節が少くなかつた。

假りに伊藤の首相では、山縣は充分の働が出來ず。山縣の首相では伊藤が充分の働が出來なかつた。然るに第三者たる桂がゐた爲に、彼等銘々その力を遺憾なく效すことが出來たのではあるまいかと思ふ。或る意味から云へば、桂は他人の褌で相撲を取つた樣であるが、そのこと自身が桂ならでは出來ない藝當である。

桂の短所と長所

誰が何んと云つても、帝國陸軍の基礎を定めたのは、山縣の力最も大である。けれ共從來佛蘭西流儀の陸軍を、獨逸流儀に引直したることは、そのことが善にもせよ、惡にもせよ、桂の力最も與つて大にゐる。桂は後から政治家となりすましたから、彼の陸軍に於ける功績は、帳消しになつた樣だが、假に彼が川上と同時に死んだとしても、彼が陸軍に貽したる足跡は、實に大なるものであつた。

彼は隨分自ら忍び、同時に人を使ふ上にもよく忍んだ。陸軍に於て佛蘭西派の急先鋒とも云は

る〻寺内正毅をして、佛蘭西退治の役目を果たさしめたるなどは、寺内自身にとつては、定めて當惑であつたに相違ないが、敵の本陣に入つて、その矛を奪ひ、直ちにその矛によつて敵を退治するの鮮かなる手際は、桂でなければ一寸眞似る者はあるまい。

桂もそのことは『自分も隨分無理をした』といふことを、述懐してゐた。又た桂の後輩である兒玉なども、隨分桂の爲には迷惑なる役目を果たすべく、餘儀なくせられた。彼の仲間でも、『桂は狡猾い漢である』といふことだけは、通りものであつたが、斯く札付きとなりたるに拘らず、尚ほ彼等が桂と協力し、又た桂を自然中堅層の中樞人物として擔ぎ上げたのは、何處にか桂にとるべきところがあつた爲と云はねばならぬ。

政治家としての桂

總てを乘除しても、彼は一大常識家であつた。常に建設的の傾向を以つて、容易に破壞的の作用を爲さなかつた。偶ま斯くする場合でも、後の始末をちやんと考へてゐた。末は野となれ、山

となれといふやうなことは、彼には殆んど出來なかつた。野とか山とか、何んとか型がつかなければ、承知が出來ない性分であつた。

他のことはいさ知らず、仕事にかけては、彼は決してやりつ放しでも無ければ、ほつたらかしでもなく、一から十まで、始末のとれる漢であつた。

言ひ換ゆれば、政治家として彼は當てになる漢であつた。それで下僚であり、部下である者は、不平を云ひつゝも、彼には逆かず、彼から離れなかつた。その點に於ては伊藤などは何れかと云へば天才政治家であつた爲に、部下としては隨分困つたことがあつた。曾つてグレー卿が、その首領である、ロズベリー伯に就いて云つたことがある。『天才政治家の子分となるには、その首領の注文する代價を、然も時としては拂ひ了ふせぬだけの代價を拂ふか。さもなければ、無償にて奉仕せねばならぬ』と。

これは伊藤などには當て嵌まる節もある樣だが、桂は決してその政友若くは部下に向つて、拂ひ了ふせぬ代價を要求したり、若くは無償で彼等を奉仕せしめたりする樣なことはしなかつた。働いた者には相當の功勞を認識した。又た決して無理の注文はしなかつた。前にも云つた如く、

寺内などには、随分無理を強ひた様であるが、それは寺内の人物をよく見込んでゐた爲である。それで後藤の如き、大浦の如き一筋繩でゆかぬ人間も、甘んじて彼の味方となつたのであらう。而して何よりも彼が部下の心を繋いだのは、虛心坦懷、よく部下の言ふことを聽いたからであらう。彼には恐らくはオリジナリテーなるものは全く無つたと云はぬが、決して多くは無つた。けれ共凡有る人の意見、凡有る人の知識を取つて、我用と爲し、然かもそれを自分が使用するに、最も都合よく受入れることに就いては、恐らくは他にその比類がなかつたであらう。

何人であれ言聽かれ、謀用ひらるゝ程、愉快なことは無いのである。有爲な人ほどそれである。桂は只だニコポンで人心を繋いだのではなく、よく人の言を聽いてこれを用ひたからである。

桂、川上の對立

長く桂の部下であつた、眞鍋斌は、桂を謀略家と云ひ、川上を權謀家と稱し、此の兩人が互に利用し、利用せられ、虛々實々の魂膽を以つて相ひ對峙したる次第を語つてゐるが、兩人とも難

を排し、紛を解く、所謂る四角なものを丸くして通す腕前に至つては、殆んど甲乙は無つた。伊藤などは大政治家の見識を備へてゐたに拘らず、とれを實行するのタクトに至つては、稍々缺乏したるところがあつた樣だ。

桂、川上兩人に至つては、共に有り餘る程のタクトを有つてゐた。如何なる場合でも、桂にせよ、川上にせよ、人をそらしたことは無つた樣である。併しながら才の美といふ點から云へば、川上は潑剌として外に溢れてゐた。桂は何んとなくそれが内に包まれてゐた。謂ば川上は鍬形の兜に緋縅の鎧といふ出立ちであつたが、桂は椎の實形の兜に黑絲縅の鎧といふ地味な方であつた。

それで短き競爭に於ては、川上が常に勝を制したが、長き丁場に於ては、恐らくは桂の方が勝を制したかも知れぬ。假りに川上が明治三十二年五十三歳にて逝かず、更らに桂と同時代まで存らへてゐたならば、如何であつたらうか。恰も伊藤、山縣の關係を更らに川上、桂の關係として、これを延長したかも知れぬ。兎も角それは見物であつたに相違ないが、憾むらくは川上去つて桂の一人舞臺となつた。

桂と同時代に於て、桂と稍々競爭若くは對立の立場に在つた者は、山本權兵衛、西園寺公望、

平田東助三人であつたらう。然も山本は只だ海軍省に立籠つて、海軍省内では虎であつた。併し海軍省を一歩出れば虎とも猫とも餘り明白には認識せられてゐなかつた。西園寺公望は伊藤在世中は寧ろ伊藤の蔭に隱れてゐた傾きがある。平田東助は一本立ちの政治家としてよりも、山縣有朋の懷刀として幅を利してゐた。

それで桂は甘くも伊藤、山縣の間に於ける緩衝地帶を我が領地と心得、双方の領分をそれぞれ侵蝕して、漸く一人前の政治家となつた頃には、彼自身も亦た殆んど不起の疾に犯されるに至つた。要するに川上は五十三歳で多くの望みを抱いて斃れたが、桂は大正二年六十七歳で尙ほ鮮からざる望みを抱いて斃れた。彼として公爵ともなり、大勳位ともなり、人臣としては殆んど極點に立つて、此上の慾望は無い筈であるが、彼は尙ほ伊藤、山縣の辿り來つた道の外に、自己の新天地を開拓して、大いに爲さんと欲する雄心は、勃々として止まなかつた。

能く忍ぶ桂

忘恩は政治家の常である。或は忘恩ならざれば政治家たる能はずといふ程であるが、桂は此點に於て他の政治家より以上に忘恩であるとは認められない。維新以來眞にハートの人としては西鄕南洲を推さねばならず。才を愛し能を喜び、人をしてその力を效さしむるに於ては、大久保に過ぎたる者は無い。又た人間味の最も濃厚であつたのは、恐らく木戸松菊であつたと思ふ。桂はその何れに對しても固より企て及ぶべくも無つたが、さりとて世間で思ふ程の輕薄才子では無つた。

彼にどれほどの眞情があつたかは知らぬが、他の好意に對しては好意を以つて報ゆる丈のことは忘れなかつた樣だ。孔子は『匿レ怨而友二其人一左丘明恥レ之。丘亦恥レ之』と云つたが、桂は實によく忍ぶ人であつて、隨分腹の中には熱鐵を飲ませられたる如き場合でも、それを顏色に表はさず、よく辛抱するだけの修養はもつてゐた。嘗て桂は予に向つて『有爲者必忍矣』と書いて贈つたが、これは桂のモットーであらう。又た總理大臣官邸の二階に於ける一室には何人の畫であつたか、韓信股潛りの畫幅が掲げてあつた。有心であつたか無心であつたか、何れにしても彼は韓信をよき手本とした樣だ。

但だ彼に所謂る俠骨なるものがあつたかと云へば、それはなんとも云へない。伊藤は自ら稱して、『七分の忠節三分の俠、忠俠併せ來つて一人となる』と云つたが、その俠なるものは何處から眺めても桂には見出されなかつた樣だ。併しそれが果して伊藤の自ら云つた通りに、彼にあつたかといふことは、これまた自分には見出されない。若しこれを見出し得る人があれば、それは何んと云つても井上馨その人であらう。予は明治二十年代に彼を評して、『明治の幡隨院長兵衞』と云つたが、今も尚それを訂正する必要を感んじない。

政治家の離合集散

公郎太　桂

桂公筆蹟

下は著者への書簡

現實的の桂太郎

桂に就いては、尚ほ語らなければならぬ、多くの事を有つてゐる。桂の缺點としては、その人格に氣品を缺いたことである。彼は決して野人では無つた。家も長州人としては、大たる武家の枝葉では無いとしても、名門の繋りである。壯にして君側をも勤めたほどの者であり、又た歐羅巴に於て教養を受けたる者であるから、文化人と云つて差支無い。彼は決して本來の野人でない。

併しその人間が餘り現實的であり、餘韻嫋々などゝいふところもなく、奥床しきといふところもなく、高貴なる品位といふ樣なこともなく。謂はゞ現代資本主義機構によつて生産せられたるが如き、通俗一點張りの代物であつた。

但だその效果の上から論ずれば、彼程個人として多くの仕事をしたる者は、明治時代の政治家としては、絕無ではないが、僅有だ。我等は缺點は缺點として、彼が全國の力を一にして、三十七八年役まで辿り着き、又たそれを兎も角も切拔けたることに就いて、今尚ほ感謝せねばならぬ

と信ずる。

第二次山縣內閣に對する伊藤の態度

我等は先づ桂內閣の成立に就いて語らねばならぬが、これを語るには、更らに溯つて、第二次山縣內閣に就いて、少しく觀察せねばならぬ。伊藤は自ら政黨を作らんとしたが、山縣等に阻止せられ、內閣を投出し。更らに大隈、板垣を推薦し、此に於て隈板內閣が出來上り、それが又た後に殘つたる西鄉海相、桂陸相と、米國より歸朝したる星亨、其他の政黨者流や、又た伊東巳代治等の官僚者流など、凡有る者の陰謀や、陽謀にて、遂に半歲足らずして瓦解した。

而してその後に出來たのが、第二次山縣內閣である。これは明治三十一年十一月八日であつた。當時伊藤は支那旅行中であつて、既に歸朝の途に就いてゐたから、伊藤の歸朝まで待たんとすれば、待つことが出來たのだ。然るにそれにも拘らず、否な寧ろそれを奇貨として、却て伊藤を拔きにして相談を爲し、山縣內閣が出來上つた。而してその諒解を得る爲に、山縣は都筑馨六を長

崎まで差向けた。

斯る次第であれば、伊藤が山縣内閣に對して、充分の好意を示し得なかつたことは、勿論である。山縣は如何なる場合でも兵法を以て政治上に處することを忘れなかつた。即ち進むにも兵法を以てし、退くにも兵法を以てした。而して彼は兵法上に於て常にその力を全うして、陣を退くことを忘れざるが如く、政治上にも亦たその通りである。所謂る壇の浦まで行くなどゝいふことは、山縣は斷じて行はず、又た行ふを欲しなかつた。

されば彼は適當の場合に退陣を心掛け、心竊に桂を以てこれに擬した。然るに兩人の間に於ける機密は、早くも漏れて、これに對して最も不滿を感じたのは、山縣内閣に於て、新たに海相となりたる山本權兵衛であつた。權兵衛は直ちに伊藤に赴いて、この事を告げ、遂に伊藤の廣橋にて、それが闇から闇に葬られた。

× × × ×

序でに話して置くが、當時の外相青木周藏は、伊藤と共に山口出身の者であるに拘らず、その間は圓滑でなかつた。その爲と云ふではないが、義和團の事件に際して、獨逸皇帝ウイルヘル

ム二世が、ヴルデルゼー元帥を以て、聯合諸國の軍隊の總帥とする旨を發議し、何れもそれを承認せんとするに際し、伊藤は、陛下の軍隊を外國元帥の統帥下に置くのは、至尊の尊嚴を冒瀆するものであると悲憤慷慨し、夜半に起きて、その意見を草したることがある。予も親しく伊藤からそれを示されたることを記憶してゐる。

又たその頃でもあつたか、臺灣總督兒玉は、支那の北方に於ける變に乘じて、南支那に大いにその力を逞ましくせんと欲し、その準備が出來たばかりでなく、既にその事に着手した。然るにそれが山本權兵衞の聞くところとなり、又た忽ち伊藤に馳け付けて、伊藤がそれに横槍を入れ、これも亦た中止となつた。

その爲に納まらぬのは兒玉であつて、兒玉は臺灣總督を辭職し、併せて軍職、其他一切を奉還し、一野人となるの決心をした。そこで大騷ぎとなり、米田侍從は、特使として臺灣に派遣せられた。兒玉は遂に勅命を畏みて、それを撤回することゝなつた。而して山縣も亦た義和團の騷ぎで、遂に辭職の機會を失つた。

第二次山縣内閣より第四次伊藤内閣に至る

然るに話代つて伊藤は明治三十二年頃から、頻りに全國を巡遊し、政黨に關して隨處にその改造を說きつゝあつたが。その機熟して、立憲政友會を起し、自らその總裁となつて、その宣言書を發表したるは、三十三年九月十五日であつた。事此に到れば山縣は一刻も猶豫せず、同月二十六日を以て辭表を奉呈し、その翌日に至つて内閣總辭職となつた。

而して内閣組織の勅命は、伊藤に向つて下つた。諺に『人を呪はゞ穴二つ』と云ふが、大隈板垣が野合し——聯合と云はんよりも、野合に幾い——憲政會を組織するや否や、伊藤が直ちに彼等を推薦したる同樣の筆法を以つて、山縣は又たこれを伊藤に試みた。伊藤の不平や知るべしである。漸く九月十五日に政黨の看板を掲げ、その二十七日には山縣内閣の總辭職となつて、自分が後を引受けねばならぬとは、伊藤の腹になつて見れば『山縣も餘りに惡辣だ。如何に自分と立場は異ればとて、如何に自分が困難の位地にあるかは、少し察しても宜い筈だ。然るに却つて

それもよい事にして、自分に難題を打かけるとは何事ぞ』といふことであつたらう。そこで伊藤は大磯からも容易く腰を上げず、東京に來てもおいそれと引受けず、すつたもんだの騷ぎの末、漸く十月十九日に、第四次伊藤內閣は出來た。

貴族院增稅案に反對す

此の內閣は出來る時からが甚だ難產であつた。而してその間に自ら副總理を以て任じたる、渡邊國武が、伊藤に向つて絕交を申入れ。それが又た公にしがたき筋の力によつて心機一轉となり、その爲に閣內の折合も初から面白くなかつた。而して最初に貴族院の各團體は、遞信大臣星亨を攻擊し、星の辭職となり、原敬がこれに代つたのは、同年十二月二十一日であつた。それから議會の開會となるや、貴族院は主として、伊藤內閣の增稅案に反對し、遂にこれが爲に勅語の下降を煩はし奉るに至つた。此時の貴族院に於ける、伊藤內閣反對黨は、山縣直系の人々にて、今日の淸浦老伯の如きが、その急先鋒の第一人者であつた。

當時山縣も松方も京都に居、その爲に西鄕從道は、わざ〳〵京都まで出掛けて、山縣、松方兩人の盡力を乞ふことゝなり、予も伊藤の依賴にて、途中にて松方に一切の政情を話してくれとのことにて、國府津まで松方を出迎ふべく、國府津に一泊し。翌朝プラットフォームに出て、汽車の着くのを待受けたところ、偶然安廣伴一郞君に出會した。

安廣君は恐らく平田其他の反對黨側の旨を齎らして、是を山縣に報告する爲であつたと察せらるゝが、予は伊藤の依賴にて、增稅案通過に就いて、山縣、松方兩人の骨折りを乞ふ爲であつた。併し山縣、松方が切角努力しても、遂に勅語まで煩はし奉る必要を見るに至つたのを見れば、如何に貴族院に於て、アンチ・伊藤の氣焰が騰上しつゝあつたかゞ判る。

伊藤辭職後の相續者

序に一言して置くが、桂は第三次伊藤內閣の時には、自ら謀首と云はずんば、參謀長となつて働き、初めて陸軍大臣として入閣の志を達したが、それより隈板內閣、第二次山縣內閣まで

持續し、第四次伊藤內閣の出來るに及んで、疲勞とか病氣とかいふ名義にて、伊藤が强ひてこれを留むるに拘らず遂に辭職して、後を兒玉に讓り、兒玉は臺灣總督と掛持ちになり、桂は葉山に靜養することになつた。

これは休養の必要を感んじたのは勿論であつたらうが、伊藤の所謂る政友會內閣たるものが桂にも面白くなく、その爲に罷めたものと思はるゝ。桂尙ほ然り、況んや山縣直參の面々に於てをや。貴族院が伊藤內閣に反對したのも、決して偶然ではなかつた。

伊藤內閣は漸く勅語の下降にて增稅案を貴族院に通過し得たが、其後遞信大臣原敬と、大藏大臣渡邊國武の確執により、遂に內閣不統一の爲に投出すこととゝなつた。是が明治三十四年五月五日である。他の閣僚は皆な辭表を呈したが、渡邊藏相一人は斷じて居据り、伊藤首相と進退を與にしなかつた『己れは勅命を奉じて藏相の任に就きたるものであるから、首相と與に進退するの必要は無い』といふ意味を强調した。然も何時迄も頑張ることが出來ず、彼も亦た罷めねばならぬことゝなり、一時西園寺公望が、臨時總理大臣となつた。

惟ふに伊藤の胸中を打割つて云へば、己れの衣鉢を繼ぐ者は、西園寺であると見たであらう。

而して山縣の胸中を打割つて見れば、桂と見たであらう。けれ共西園寺は臨時の二字を削つて、居据ることとも出來ず、お鉢は急に桂に廻らず、先づ井上を起すこととなつた。

井上當人も一度はやつて見たしと考へたものであらう。豫ねて自分の子分でもあり、友人でもある澁澤を引張つたが、澁澤は自ら辭するばかりでなく、井上に向つてこれを中止する樣に勸告した。而して井上は更らに桂を招き、桂に向つて首相たらんことを望み、桂がそれを承諾すれば、自分も一省の大臣となつて、これを助くるを辭せずと云つた。

併し桂は早くもその意を察し、自らこれを辭するばかりでなく、又た井上に辭せんことと勸告した。斯くていよ〳〵お鉢が桂に廻つて來、伊藤自らの口よりこれを推薦することゝなつた。行着く先は初から見えてゐても、それに達する迄はなか〳〵の九十九折を經て來た。政界のことは何時もこの通りである。目には近く見えても、そこに行着くには、なか〳〵の難路を經ねばならぬ。

第一次桂内閣の成立

それから先は桂と伊藤との太刀打ちである。何れもその道の巧者なれば、虚々實々、盛んにその術を闘はした。桂は飽迄伊藤の再起を促し、伊藤は又た飽迄桂の奮起を要望し、その爲大磯と東京の間を、人も書簡も往復し、而して漸く桂が内閣を組織するに至つたのは、明治三十四年六月二日で、桂は時に五十五歳であつた。

今ま試みに左に歴代首相の、初めて首相となりたる當時の年齢を掲ぐれば、即ち左の通りである。

伊藤博文	四十五歳
黒田清隆	四十九歳
山縣有朋	五十二歳
松方正義	五十七歳
大隈重信	六十一歳
桂太郎	五十五歳
西園寺公望	五十八歳
山本權兵衛	六十二歳
寺内正毅	六十五歳

氏名	年齢
原敬	六十三歳
高橋是清	六十八歳
加藤友三郎	六十二歳
清浦奎吾	七十五歳
加藤高明	六十五歳
若槻禮二郎	六十一歳
田中義一	六十五歳
濱口雄幸	六十歳
犬養毅	七十七歳
齋藤實	七十五歳
岡田啓介	六十七歳
廣田弘毅	五十九歳
林銑十郎	六十二歳
近衛文麿	四十七歳

桂の五十五歳は歴代首相の比較年齢としては、決して晩いとは云はれない。

所謂る緞張內閣

日本の內閣組織を通觀すれば、第一次桂內閣に至つて、初めて元老若くは元老級以外の人が組織する樣になつた。今日では誰が內閣を組織しても、怪しむ者がないばかりでなく、殆んど無頓着であるが、桂が內閣を組織した評判が、世の中に出來た時には、芝居茶屋の女將武田屋おとらが、都筑馨六に『今度は愈々緞帳芝居が出來たさうですね』と云つたことを、予は親しく都筑から聽いたことを覺えてゐる。

それ程左樣に意外のショックを一般に與へた。されば當時桂內閣の閣僚も、殆んど一人たりとて、喜び勇んで參加した者はなかつたらしい。淸浦伯なども、澁々ながら山縣の顏に對して、入閣したらしい。特に海軍大臣山本權兵衞は、第二次山縣內閣から引續いて留任してゐたが、今度は罷むると駄々を揑ねたところ、西鄕が『若し貴君が罷むるならば、予が代つて桂內閣の海軍大臣とならう』とまで云つたから、それではといふことで桂と談合し、桂から海軍擴張に關す

る、若干の言質をも得て、留任することになつたらしい。桂と目さる者で、海軍が最も苦が手と見たから、豫じめ此事では西郷から保障をとつてゐたものと察せらるゝ。特に加藤高明は第四次伊藤内閣から引續き留任せんことを、孰れも期待したが、同人は頑として應ぜず、遂に去つた。若し加藤がその儘留任したならば、日英同盟の締結に就いての殊勳者として、加藤は世間に持囃さるゝべきであつたが、それをみす／＼小村に渡したのは、今から考ゆれば、餘り幸運の漢とは思はれない。併し加藤も乃公安んぞ桂輩の下に就かんやといふのが、當時の意氣込みであつたかもしれぬ。

桂と伊東巳代治

此際に於て特に一言すべきは、伊東巳代治の態度である。伊東巳代治は變な漢である。伊藤を引張つて自由黨に近付けたといふよりも、寧ろ自由黨を引張つて伊藤に近付けたといふ方が適當かも知れぬが、兎も角伊藤を政黨者化したる張本人は、巳代治であると云つても差支ない程、兩

者の間に斡旋した。斯る行掛りがあれば、常識から云へば、斷然彼は政友會に加入すべき、否な寧ろ政友會建立の筆頭に据わるべき漢であるが、彼は甘くも身を轉じて、その埒外に立つた。

多分その時か、その時と遠からぬ際であらう、伊藤は自ら一升德利を下げて、巳代治の宅に出掛け『これから貴樣と別れの盃をする』と云つたといふことであつた。その事の眞僞は兎も角、伊藤には恐らく少からざる失望を與へたものと察せらるゝ。

話代つて桂内閣の出來る當初に於て、桂の相談相手は全く巳代治であつた。伊藤などもよくその内情を知つてゐる。『桂の手紙は巳代治が書いてやつたのだらう』とまで云つた程であつた。されば桂は内閣を組織する場合に於ては、彼を副總理とし、政治上の實務に就いては、彼の指導及び援助に俟たんと期待したのだらう。實を云へば桂は陸軍大臣としてこそ事務に精通してゐたけれども、首相としての經驗は全く皆無であり、一般行政に就ては、流石の當人も自ら危むところがあつたと思はるゝ。

然るに愈ゝ内閣を組織する段となつて、桂が巳代治に申すには、『海陸軍は姑らく措き、其他の椅子ならば、何でも貴君の望み通りの椅子を分つことゝするから、何分この際は一肩ぬいで貰ひ

たい』とて出掛けたところ、案に相違して、巳代治は御免を蒙つた。

理窟を製造することには、天下一品の巳代治であるから、申譯には事缺かなかつたであらうが、濟まぬのは桂の胸の中だ。桂は恰も二階に引張り上げられて、梯子をとられた樣な窮地に陷つた。今更ら弱音を吐くわけにもゆかず、兎も角もやるだけやるといふ決心をした。

元來桂は政治家である。政治家は功利主義者である。功利の爲には恩も忘れ、怨も忘るゝが當り前である。桂は第二次松方內閣組織の際に、陸軍大臣を約束せられて、それが高島の爲にふんだくられ、桂は面目を踏み潰した。その爲に桂は松方に對しては、少からざる不滿を抱いたが、第二次山縣內閣の組織せらるゝ場合には、第一に松方に馳け付けて、山縣との協力を懇請した。又た隈板內閣の時には大隈及びその仲間からは獅子身中の蟲とまで嫉視せられ、又た事實に於てそれ以上の邪魔を彼等に加へてゐたに拘らず、彼は大隈に對してはその晩年には少からざる便宜や都合を計つた。大隈に桐花大綬章を下賜せられたるが如きも、桂からの申立があつたからといふことを聞いてゐる。桂は此の如く時と場合に於ては舊怨を釋くことを忽せにしなかつた。

然るに伊東巳代治に就いては、それ以來死に抵るまで、釋然たらざるものがあつた。固より彼

もさる者であるから、それを露骨に示さなかつたが、併し桂は一生の中で巳代治から受けたる人心の恃むべからざるといふ教訓ほど、痛切なものはなかつたらしく思はるゝ。されば日露戰爭の際に巳代治が自ら進んで言論の操縦掛りとならんことを期待したが、桂は遂にこれに應じなかつた。それは桂ばかりでなく、小村が又た同様であつたが、何れにしても桂は爾來巳代治に對しては敬遠主義をとることゝなつた。即ち巳代治から飲まされた熱鐵は、長く久しく桂の腹中の壘塊となつた。

桂內閣組織後當面の大問題

桂內閣の出來たと同時に、一方に於ては財政問題に衝着し、他方に於ては外交問題に當面した。外交と云ひ、財政と云ふも、目的は唯だ一つである。財政問題は手短かに云へば、軍備の問題である。軍備は何處に對しての軍備かと云へば、固より對露の軍備である。外交も亦た同様である。誰に對しての外交かと云へば、露國に對しての外交である。

今茲に日英同盟に就いて、詳しく話す必要はない。但だ此の大問題に就いて、桂と伊藤との間に、少からざる葛藤が生じたことだけを一言する。

加藤高明の語るところによれば、第四次伊藤内閣の時には既に倫敦に於て、日英同盟の烽火が上げられつゝあつた。段々これがものになるべきことは、誰より先づ加藤が承知してをるべき筈である。加藤は曾つて彼が英國公使である際、即ち日清戰役後、日本から富士、八島を英國に註文してゐる際、當時の内閣の大立物チエンバーレンと相語つた。その時チエンバーレンが日英の同盟とは云はぬが、兩國親近に就いて語り、『此際若し日本が富士なり、八島なりを、一隻英國に讓り渡して呉れゝば、それによつて兩國の親交は、幾ばく進捗するか、測り知ることが出來ない程だが、何とか方法はないか』とまで、打明け話をしたといふことである。

爾來英國は南阿戰爭に從事し、愈々世界の憎まれ者となり、その朋を求むる最中であつたから、謂はゞ、西の島帝國と、東の島帝國とが、互に世界の孤立者として、相ひ接近するに至つたのである。

我國に於ては、當時二個の潮流があつた。

第一は露國と共に東洋問題を解決せんとするもの、第二は露國に對して、東洋問題を解決せんとする兩者であつた。伊藤は前者であり、山縣は後者であつた。卽ち伊藤の親友たる井上などは伊藤と全然同一であつて、讓步し得らるゝ限りは讓步して、平和の間に露國と協商せんとするものであつた。

山縣の政友である松方、及び陸海軍の代表者である、大山、西鄕などは、固より親英論者であつた。桂が何れに屬すべきかは、云ふだけが野暮である。

日英同盟に關する伊藤と桂の交涉

桂もさる者、なか〳〵油斷はならない。そこで倫敦から頻りに日英同盟の打診がやつて來るに際し、桂はわざ〳〵當時伊藤が武州金澤に居たから、これを訪うて、その事に就いて相談をしたところが、伊藤もその翌日は桂を葉山の別莊に訪うて、尙ほ種々協議をなし、自ら筆を執つて談判すべき要項を認めた。

桂の自傳にはこの事がよく書いてある。桂が伊藤を武州金澤の別邸に訪うたのが、八月三日、その翌四日には、伊藤が更らに桂を葉山の別邸に訪うてゐる。桂は『我より解答の案を、自分と公と合議の上、調製したり』と記してゐる。當日は伊藤も大分機嫌がよく、桂の依賴により、桂の別莊に『長雲閣』の名を附し、その額面を書し、又左の如き詩も作つた。

任レ他世論亂如レ絲。　大海看來似二小池一。
相國豈無二閑日月一。　不レ談二兵事一只談レ詩。

併し伊藤は何れかと云へば英國通であり、英國通であるから、英國が容易に東洋の島帝國と同盟を結ぶ樣のことのあり得べからざるを信じ、只だその事の成否如何に關せず、向うからの註文に應じて、斯く返事をすべしとの意見を書き認めたるまでゞあつて、その心中には初から、露國と共に協商するを以て近道でもあり、且つ安全の道でもあると思つてゐたのであらう。

伊藤の米歐漫遊

斯くて一日も無事であることの出來ない伊藤は、愈よ世界を漫遊することゝなつた、伊藤は當初米國に赴くといふ話であつたが、井上から桂に向つて、切角のことであるから、米國と限らず、歐羅巴までやつては如何といふ相談があつたから、桂は固よりこれに贊成した譯であつた。これは多分伊藤、井上の間に申合せがあつたことゝ思はるゝ。

愈よ出掛けるといふ時になり、桂は送別會を三田小山の邸に開いた。來會者は伊藤、井上、山縣、桂の四人で、盃盤の間に侍する者はかな子夫人であつた。酒酣に、耳熱する時に伊藤は例の調子で、一座に向つて申すには、「今度位愉快な旅行はない。自分は何等拘束せらるゝところなく、掣肘せらるゝところなく、自分の腹一杯のことをやつてゆけるから、寔に愉快である。」と云ひ、更らに進んで、自分が露國に對して談判するところあらんとする口吻を漏らしたから、山縣が遮つて云ふには、『それはさることであるけれ共、貴君の出先きにて、左樣な大事を獨斷すべきではあるまい。先づこれを政府に報告し、第一には陛下の思召をも伺ひ、第二には政府のこれに應じ得らるべきやも相談し、然る後これを斷行せねばならぬ』と云ひ、桂も亦た『不肖ながら、某も當局として立つ上は、兎も角それ等の大問題は一應此方に御通告の上、然るべく願ひ上ぐ

る』と云ひ添へた。

然るに伊藤は以ての外に機嫌を損じ、『左樣なる窮屈なる次第では、最早や旅行を中止するの外はあるまい』と云ひ、一座大いに白らけたところ、漸く井上などの口入れにて、『その場はとり繕ひ、兎も角も愈ゝといふ場合には打合その上やることに相談を纏め、出掛けたのは、明治三十四年九月十八日であつた。其後のことは云ふに及ばない

兎も角も出先に於ては日英同盟と日露協商と、即ち露國に對する同盟と、露國と共にする協商と、同時に運動が行はれた。英國ではこれを見て、日本が故らに牽制運動を爲すものと見て、愈ゝその機を失はざらんことを期し、遂に明治三十五年一月三十日調印成り、二月十二日には愈愈これを貴衆兩院にて發表することになつた。而して伊藤は英國でウヰッテと種々協議したが、未だ要領を得るに至らずに、日英の同盟が長足の進捗を爲し、伊藤は歸途英國に立寄り、十二月二十七日にはエドワード七世に謁見し、立派な勳章などを貰ひ、涼しき顏をして歸つて來た。

政治家に親友無し

政治家には親友が無いとは、政界を親しく渡つて來た者でなければ、痛切にはその言の的確なるを感ぜぬであらう。平生は如何にも心腹を打明けてゐるが、いざとなれば忽ち敵對の位地に立つことが鮮くない。而して敵必らずしも敵ならず、味方必らずしも、味方でない。多くの場合では政敵よりも寧ろ政友に油斷が出來ぬ場合が少くない。

西郷、大久保兩人の如きは、何れも一世の雄であり、互に權勢榮達を以つて相爭ふ如き、凡俗の政治家ではなかつたけれ共、その最後には彼の如き悲劇に陷つた。近くは英國に於て勞働黨の兩橫綱とも云ふべき、マクドナルドとスノーデンでも、當初から必らずしも親友と云ふほどでもなかつたが、晩節は極めて冷淡なものであり。スノーデンの自傳などを見れば、マクドナルドに向つて、かなり無遠慮なる皮肉をあびせかけてゐる。

英國自由黨の三人男と云へば、前にはチエンバーレン、デルク、モルレーであつた。此の三人

男の中で、デルクは私行上の失態の爲めに落伍し、チェンバーレンとモルレーは、やがては正面衝突をした。後の三人男はアスキス、ホルデン、グレー三人であつた。彼等は啻に政見を一にしたばかりでなく、その出處進退を一にし、一生渝らざる親友であつたが、然も世界大戰の最中にアスキスが、在野黨と聯立內閣を組織するに際し、在野黨の意を迎へてと云へば、語弊があるが、併し在野黨の申分に餘儀なくされて、ホルデンを閣外に振落した。

東西古今政治家ほど苦しき職業はなく、又た情けなき職業は無い。ソルスベリーがその曾て保守黨の首領としての競爭者であつた、イツデスレー伯の彼を首相官邸に訪問し、未だ面會せざる以前、その控へ室の椅子に倚つたまゝ斃れたのを目擊し、そのことに就いて『すまじきものは政治家だ』と云つたのは、寔に理りある文句だ。

桂の晩節に於ける桂對元老

斯る餘言は姑らく措き、桂もその先輩から引立てられたるに拘らず、その晩節にはかなり先輩

の同情を失つた。これは先輩が桂に對する燒餅であると云へば、それ迄であるが、桂ほどの利巧なる漢が、先輩に燒餅を燒かするほどのことをするのは、よく〱彼が箍の緩んだことが判る。而して斯く箍が緩んだのは、畢竟彼が成功に陶醉したからであらう。

成功ほど政治家を毒するものはない。併し又た餘りに用心すれば、政治家もいぢけて、旋毛曲りとなり、これも亦た困つたものとなる。床の間の置物としては雅致があるかもしれぬが、棟梁の材とはなられない。

曾つて桂の死後その傳記を編纂することを依囑せられたる際、予は豫ねて桂の作り置きたる自傳を携へて、その一覧を乞ひ、それに就いて『然るべく誨を受けたし』と山縣に賴つた。稍〻久しくして山縣を訪ひ、『過日差出したる自傳は一讀せられたるか。それに就いて意見は如何』と云つたところ、山縣の云ふには、『固より一讀した。併しこれには別段何も申すことは無い。それはこの自傳は恰も桂が詩でも作る如く、起承轉結、よくその辻褄を合はせて書いたものであるから、これは此儘にして置くの外はあるまい』と一笑した。

山縣なども桂をあそこまで引立てゝ來たが、最後には必らずしも桂に滿腹の同情を湛へてゐた

とは思はれない。

桂の留守中に、否な桂の歸朝の間際に、桂を內大臣として推薦し、途中まで人を以て桂を要して、遮二無二これを承諾せしめたのは、果して桂に對する十二分の好意であつたか。若くは桂以外には內大臣として、新に踐祚遊ばされたる大正天皇を輔翼し奉るに、適當の人が無つたか。それ等のことは今これを質すことも容易でないが、桂の方から云へば、甘くもその手に乘つて、全く封込められたと云つても、差支あるまい。

併し予は決して山縣が惡意を以つて此の如きことをしたといふのではない。只だ桂に對する好意が幾ばくあつたかといふことである。

首相としての桂

話代つて桂が常に予に語つて云ふには、「何時も忘れぬのは兒玉の親切である。自分が大病に罹り――多分チブスの時であつたらう――愈々死線を越えて、未だ何等食慾がつかない時に、兒玉

は自ら日本橋の魚河岸にわざ〳〵出掛けて、極めて新鮮なる魚を選擇し、それを持參して刺身に作り、いざこれにて食氣をつけろと勸めた時には、予も覺えず感淚を流した。而してそれから日に增し回復して、うまくも一命を取り返したーと云つた。

桂その人は餘り感激性が强いとも思はれない。又は感謝心が多量であるとも思はれない。併し彼は忘恩の輕薄才子ではなかつた。語を換へて云へば、世人が思ふよりも彼は親切でもあり、殊に勝氣でもあつた。但だ彼には餘り手練手管が多過ぎたから、それだけのものと思はれたのは、彼にとつては寧ろ損であつたといふことも出來るであらう。

その證據は彼の下に閣僚となつた者は、悉くとは云はぬが、大概彼の庇護によるものが少くなかつた。彼は何時もその閣僚の苦戰を見て、見殺しにする如きことは無つた。否な彼が自ら矢面に立つて閣僚の危急を救つたことは幾ばくあつたか知れなかつた。例へば桂內閣の際に於ける文部大臣としての小松原英太郎の如き。遞信大臣としての後藤新平の如き。農商務大臣としての平田東助の如き。大藏大臣としての曾根荒助の如き。大概その通りであつたと思はるゝ。

されば餘事は姑らく措き、内閣首班としての桂は、決して頼り少きものではなかつた。

伊藤井上の友情

但だ今に於ても政治家の間に於て、美談ともすべきは、伊藤、井上の交情であつた。兩人は隨分互に競爭もし、喧嘩もした樣であつたが、然も彼等の友情は實に濃かなるものであつた。予は曾て井上の内田山邸に於ける、病氣回復の園遊會に出席したことがある。

それは明治四十二年五月のことであつたが、その前年の秋、井上は興津の別莊にて病に罹り、既に棺桶の用意も出來、葬儀委員まで選定せられてゐたほどであつたが、『煎豆に花が咲く』といふ諺の通り回復し、遂に翌年の春にその園遊會が開かれたのである。その時予は左の如きことを書いてゐる。

『園遊會の見物は、餘興よりも、金賀羅菴の飾附よりも、火の如き杜鵑花よりも、實に侯の五十年來の親友伊藤公の演說なりき。何故に之を聽くと云はずして、見ると云ふ乎、英雄一片の

涙は聞く可きものにあらず、見るべきものなれば也。」

今も尙ほ記憶してゐるが、躑躅の花が咲きほころびたる庭上に於て、伊藤は何やら初めは反りかへつて、演說を始めたが、やがては感情が制し切れず泣き出して、何事を云つたか判らなかつた。けれ共そのきれ〴〵の中から聽き取らるゝことは、兩人がこれまで死生を携へて來たこと、今後も愈々井上が攝養をせんことであつた。

井上は何時も何かと云へば伊藤が井上に對して與へたる歌

　　國の爲盡す心を大君の
　　　しろしめすさへいとふ君かな

といふ色紙を壁上に揭げたものであつた。この一首の歌は井上にとつては千萬の寶玉よりも難有きものであつたと察せらるゝ。卽ち兩人の如きは政治家の中に於いて、稀に見る、而して始めあり終ある友誼を全うしたるものといふことが出來よう。

板垣退助と大隈重信

大隈重信侯

板垣退助伯

政黨の前途

即今北支事件で世の中は鼎の如く湧いてゐる。斯る時節に交遊の昔噺しをするのは、眞に痴人夢を說くの類である。けれ共、事件は一時的のものである。歷史は終古的のものである。目下の急に應ずることを忘却してはならぬが、又た我等は長き歷史の綱を辿つて行くことも、閑却してはならぬ。

今日程政黨の不景氣なる時代はあるまい。けれ共明治以來、大正、昭和の三代を通じて、政黨を無視しては、日本の歷史は書けぬ。特に政治的開發史は書けぬ。又た今後とても我等は政黨全盛時代が到來するとは請合はぬが、同時に政黨全滅時代の來ることとは、尙更ら請合はれない。

そは既に議會存すれば、政黨若くは政黨らしきものがこれに伴つて生ずるは、必然の事情あるが爲だ。手を代へ、品を代へ、今後に於ても、政黨は相應の働きを爲すであらう。

但だ問題はその政黨が如何なる政黨であるか、將たその勢力が如何なる程度であるかだ。

予と板垣、大隈

日本に於て政黨の元祖は、誰が何んと云つても、板垣退助である。これに次ぐ者は大隈重信である。其他にも固より政黨の發達に力を效した者が鮮くないが、兎に角第一指は板垣に折り、第二指は大隈に折らねばならぬ。

此の一事に於ては、伊藤でも、西園寺でも、桂でも、星でも、原でも、皆な彼等兩人の後塵を拜する者と云はねばならぬ。予は幸にして、此の兩人には壯年時代より親しく相接するの機會を得た。

固より予は板垣の子分でもなければ、大隈の幕下でもないが、第三者としては、必ずしも常にとは云はぬが、或る場合には、極めて接近したる立場から、彼等兩人を眺めてゐたことがある。

予の眼中に映じたる板垣退助

予が板垣と相見たるは、明治十五年七月の頃で、その紹介者は、新島先生であつた。大隈と相見たるは、明治十九年八月、島田三郎の紹介によつてゞあつた。即ち板垣とは、予が二十歳の時に相知り、大隈とは予が二十四歳の時に相識つた。

予が板垣と面會したる顛末は、既に『蘇翁自傳』に詳しく書いてあるから、今此に繰返す必要はない。當時の板垣は四十六歳、分別盛りと云ひながら血氣尚ほ壯んの時であつた。相原尚褧の爲に刺されて、その傷が漸く癒えつゝある時であつて、更にそれを全癒すべく、箱根蘆の湯に赴くことになつたから、予は更にその後を追つて同所に赴いた。

彼の容貌は如何にも男らしく氣高く、その額は廣いとは云はぬが、かなりに秀で、眼は窪んで、ぱつちりと開き、鼻は高く、兩頰は削げてゐたが、顏の道具は一切大きく、且つ鮮明に揃うてをり、一見人格者であるかの如き感を與へた。嘗つて中江篤介が、『ミゼラブル』といふ言葉の標本は、

板垣の顏である』と評したことを聽いたが、成程どこにか一抹の淋しきところがあつて、よく言へば悲壯とでも云ふか、平たく云へば何やら貧相の樣に思はれて、松方とか、桂とか云ふ如き福相とは、餘程異つてゐた。

背もすらりとしてゐ、音吐も土佐人であれば、極めて朗々として、演說は別段上手いとは思はなかつたが、談話は娓々として聲きなかつた。

板垣と戊辰戰爭

彼は多情の人であつたと思ふ。その愛妓小清が死んだ時には、板垣は布團を被つて、幾日とか泣いてゐたといふことを聽いた。又たその親近の者が『近頃は大將が餘りに氣が荒くなつた。何んとか第二の小清を當てがはねばなるまい』などゝ、冗談を云つたことを小耳に挾んだ。併し予に對しては風流の話などは絕對にしなかつた。但だ明治十九年、『將來之日本』の原稿を携へて、土佐潮江の邸に於て彼を訪うた時は、此方から質問もしないのに、彼は言ひ譯らしく、『自分にも

一人の妾がゐるが、それは妻より年長で、謂はゞ婆である』などゝ云つて、問はず語りに辯解してゐた。

家庭で幸福であつたか否やは、予が知るところではないが、餘り惠まれてはゐなかつたのではあるまいかと思ふ。晩年は若き夫人を得て、樂しく家庭的に暮らしたらしい。けれ共彼は要するに家庭的の人ではなく、一生公人として立つた樣である。

彼の得意の話は、何んと云つても戊辰戰爭の話であつた。今市に於ける大鳥圭介、沼間守一などの幕府の人々と戰つたる話やら。日光を燒打するところを、彼の注意にて保存したる話やら。特に白河城を取り、棚倉、三春を降し、二本松を陷れ、遂に東北の盟主であり、雄鎭である、會津若松城を圍んで、開城せしむるに至つたことなどは、彼の最も得意とするところであつた。予は屢ゝ彼に面會したが、彼の氣分の惡い時でも、一度び話頭を若松城開城の題に轉ずれば、閻魔顏が忽ち地藏顏に變じたることを經驗したことが、一再では無つた。

當時此の方面の主將は、彼と薩藩の伊地知正治であつた。伊地知は風采奇古で、とても想像に及ばぬ醜男であつたといふことが、サトーの記事にも載つてゐる通りであるが、併し彼は大久保、

西鄕のブレーン・トラストの第一人、若くは唯一人とも云ふべき漢にて、韜略は彼の最も得意とするところであり、それで板垣とは隨分衝突もし、又た協力もし、謂はゞよき取組であつたと思はるゝ。

元來當時のモルトケとも云ふべき、大村益次郎は、東北平定に就いては、豫じめ枝葉を枯らして、而して後に本幹に及ぶの戰略を取つたが、板垣は中頃より寧ろこれを逆に、根本を取れば、枝葉は從つて我が手中に落つるものとして、その主力を會津に用ゆることゝなつた。これには伊地知も同意したが、その方略は正しく當つた。當時官軍は專ら土佐、薩摩等であつて、何れも南國の兵が多かつた。若し會津包圍が嚴冬の頃になれば、それこそ風雪將軍、氷霜將軍など代る代る東北軍の援兵となつて、どれ程官軍が困つたか知れない。

然るに八月に若松城の攻擊を初め、晩秋の頃には片付けて、十月には旣に東京に凱旋したといふことは、なか／＼そればかりでも容易ならぬ手際と云はねばならぬ。

板垣憲政運動の由來及びその動機

予が箱根で彼と暫らく襖一重を隔てゝ同居した頃は、他に用事が無いから、殆んど彼の談話を晝となく、夜となく聽き詰めてゐたが、彼は動もすれば孫子の語を引張り出して來た。孫子十三篇を全部暗記してゐたかどうかは知らぬが、兎も角もその要點だけは暗記してゐたに相違ないと思うた。同時に彼はスペンサーの社會平權論なるものも讀んでゐたと見えて、その話もした。彼は予に向つて、自分が自由民權論の必要を感んじ、國會政治の建設の爲に努力するに至つたのも、會津戰爭の際、大いに感んずるところがあつたからであると云つて、左の如き話をした。

『若松城陷城の後、松平肥後守が城を出て幽居しつゝある際のこと、或る一人の百姓が恐る恐る土佐兵の隊長二川元助――後に男爵坂井重季――の許に來り、申すには、寔に殿樣もお氣毒に存じますから、手作りの芋を少しばかり獻上致したいと思ひ、持つて參りましたとて、蒸したる芋若干を持參した。如何にも奇特のことゝ百姓を賞めて、それを受取り、彼の望み通

りにしたと、二川が一同打寄つて閑談をしつゝある際に話した。

何れも奇特のことゝして感じてゐたが、予はそれに就いて大いに考ふるところがあつた。それと云ふは、會津は東北の大藩である。然も二百幾十年、藩祖正之以來今日まで續いてゐる。然るに此の大事件に際して、籠城して働いたのは、その人民の幾千分若くは幾萬分の一である、極めて少數なる士族のみである。其他の町人、百姓は、皆な手を袖にして傍觀し、何れも我が持物を失はざらんとして逃げ隱れてゐる。中には少しの賃銀を與ゆれば、欣然として官軍の用を爲す者も鮮くない。即ちその百姓の如きは、絕えて無くして、僅に有つた者にて、その他は殿樣が切腹しようが、蟄居しようが、何等頓著は無い。

斯る狀態では、會津藩が落城したのも、無理からぬことである。これを廣く日本に押廣げて考へれば、又たその通りである。若し、一旦外國と事あるに際して、今日の儘にして置かば、國を衞る者は僅かに國民の幾百萬分の一にも過ぎない。それではとても一國の獨立を維持するなどのことは、出來樣筈がない。

それで予は高知に歸るや否や、兎に角總ての人民から兵を採ることを原則とした。所謂る士

の常職を解いて、總ての者の力に依つて國を衛るといふことの必要なることを知り、此に於て初めて自由民權の已むべからざる所以を悟つた。卽ち大なる責任を負擔せしむるには、先づそれに相應する丈の權利を與へねばならぬ。一般に政權を分配することは、國民と共に國を衛る所以である。これが予が今日ある所以である。』

言葉はその通りで無つたとしても、意味は全くその通りであることを、五十五年前の記憶として、尙ほ鮮明である。これは板垣が後日譚として、種々の理窟をつけ加へたかも知れぬが、併し彼が云ふところは、決して故らに理窟を製造したのではあるまい。何人も少しく思慮のある者ならば、斯く考ゆべき筈である。

兎に角板垣の民權論は會津戰爭の戰利品中の主なるものであつた。これは板垣の話では無いが、當時薩長全盛で、土佐は後藤及びその主人山内容堂の公武合體說で、全く立後れの姿となつてゐた。されば當時の薩長の武勳に對して、土佐が競爭すべきものは、何んであるかと云へば、只だ二つあつた。一は政權を公平に分配することである。別言すれば、公議政體を設立することである。一は平和の力たる富の增殖である。されば土佐人として、富の方面には、岩崎などが力を效

し、公議政體の方面には、板垣が力を效すことになつた。而して後藤はその一本の足は岩崎等の繩張り内に、他の一本の足は板垣等の繩張り内に、双方に立働いた。

同時に板垣は又た戰後に於て、敵將の最も錚々たる沼間守一を聘して、盛んに土佐に於て兵を訓練することをした。これは更らに武力を養つて、天下の變を俟んとしたるものであつたらうが、それは幸に明治四年七月の廢藩置縣によつて、その心配は無くなつた。而して彼も亦た廟堂の人となつたが、明治六年征韓論の破裂で辭職以來は、專ら公議政體の樹立に努力した。民選議院の建白は、即ちその第一著であつた。

予の板垣に面會したる滿足

予は初めて當代第一流の政治家なる人に接し、頗る愉快を感んじた。固よりその以前にも、種種面會したこともあり、言葉を交したることもあつた人々も鮮くなかつたが、然も一見直にその人の最奥の琴線に觸るゝほどに近接し、殆んど赤裸々的の交際を得たことは、今度が初てゞあつ

た。その爲に予には鮮からざる滿足を與へた。

明治十五年夏休みが過ぎて故郷に歸つた時に、予は左の如き惡詩を口吟んだ。

此遊恰似韓也風。天地開宏氣象雄。

遼海岐山壯觀外。別看當世韓魏公。

これは蘇轍が十九歲にして、韓魏公に上つた書を例に引いて、予が板垣退助その人を見ることを得たる喜びを表したものである。板垣を當世の韓魏公などゝいつて尊崇したのは、世間を知らぬ少年の仕業といふ人もあらうが、當時に於ける板垣退助の聲望は、實に日本の全國を衝動せしむるに足るものがあつた。當時の多くの人々の中には、恐くは韓魏公以上の人物として、板垣に隨喜した者も鮮くなかつたであらう。

但だ大隈は勿論だが、板垣も亦あまり人には感心せぬ漢であつた樣だ。彼は子供の時から後藤とは竹馬の友でもあれば、喧嘩の友でもあり、後藤に就いては屢々語つた。併し同じ惡口を云うても、谷に對する程ではなかつたが、谷干城に對しては、餘程癪に障つたものと見え、谷といふ名を聞くだに面白く思はぬ風をした。而して『谷は決して將帥の器ではない。戊辰の戰爭にも自

ら狼狽て敵と斬合をした程である』とて、冷笑してゐた。

但だ彼が最も口を極めて賞讃したのは、中岡愼太郎であつた。彼の部下としては谷重喜、片岡健吉、山田平左衛門などに就いて語つた。又た中江篤介などは板垣も彼を奇人として、特別待遇をしてゐた。

彼は又た彼の親友にして會津の戰役に討死したる牧野群馬を口を極めて賞め、又た北村長兵衛の勇を賞した。北村は後には政府方となつて明治十年には高知に出張し來り、立志社に彈壓を加へたる一人だ。彼は東北戰爭には砲兵隊の長として、彈丸をとめて、その銃口には、己れの臀を當て、いざ打てといふ時に、一寸臀を代すことにしてゐたと云ひ、その大膽不敵驚くべしと話してゐた。

板垣洋行の問題

好事魔多し。話代つて明治十五年の初冬の頃、東京から電報が熊本の相愛社に達し、『板垣洋行

に就き、誰ぞ然るべき人、至急上京ありたし』とのことであつた。相愛社は熊本に於ける急進派であつて、予の交友池松豐記、有馬源内、松山守善、高田露、宗像政、田中賢道なども、皆なその錚々たるものであつた。予は彼等から是非上京して貰ひたしとの依頼を受けたから、大江義塾授業の爲、一日も缺く能はざるに拘らず、再び東京に出掛けた。

その時は青山なる中江篤介と人力車に相乘りして、高輪後藤邸なる板垣を訪うた。高輪の後藤邸は只今竹田宮の御邸にて、宏壯なる西洋館や、又た珍らしき茅屋根の日本家屋が出來てゐた。板垣はその別棟にゐたから、早速面會したところ、當時病中といふに拘らず、予を引見し、親しく一通り洋行の經緯を述べた。

この洋行なるものは、何の爲であるか、又た誰が計畫んだか、今此に詳しくこれを語る必要は無いが、兎に角自由黨の結黨式を擧げたのが、明治十四年十月二十九日であつた。然るにその翌年の七月頃、既に外遊を心掛くるといふことは、果して自由黨の總理として、その黨務を處理する上に於て、得策であつたか否か、今日から考へても、多少の議論はあることであらう。

但だ板垣の云ふところによれば、『後藤が申すには、政府からは既に伊藤が國會開設の準備とし

て、憲法取調べの爲、歐洲に赴いた。――これは明治十五年三月のこと――されぱお互も亦た民間黨の首領として、外遊の必要があらう。幸に一切のことは予が辨んずるから、君と同行したいといふことで、自分も成程と感んじ、栗原亮一を伴つて出掛くることを決心した』とのことであつた。その栗原は、箱根では予と同室をし、板垣の祕書官同樣の仕事をしてゐた漢である。

自由黨は十五年四月、岐阜に於て板垣の遭難あり、幸に板垣が武術を心得てゐたから、相原尙褧の兇刄も彼に致命傷を與ゆる能はざらしめた。併し其爲に自由黨が衝動を受けたることは、頗る激しかつた。而してその六月には、漸く『自由新聞』を創め、その旗幟を東京の眞中に揭げて、盛んに本來の面目を發揮せんとするに際し、突然、卒然、總理が洋行するなどゝいふことは、黨員全體にとつては、不思議でもあり、奇怪でもあり、半ばその理由を解するに苦しむとし、半ばその時宜を得ざるを怪しみ、黨員中にも甚だ不人氣であつたことは、已むを得ぬと云ふよりも、寧ろ當然のことであつた。

自由黨の大損害

さればこの反對を打消すべく、釋明やら、辯解やら、八方に手をくばつたに相違なく、その爲に予の如きも出京することゝなつたのである。予當人としては、板垣の洋行するとせぬとは、何等問題でないから、只だ神妙に板垣の辯明若くは釋明を聽いて、それ以上これに對して擬議を挾むなどのことは、敢てしなかつた。

併し此の事件の爲に自由黨にとつては、取返しのつかぬ大なる損害を來した。それは馬場辰猪、大石正巳、末廣重恭三人が、自由黨より離れ、板垣の傘下を去つて、獨立黨を組織したること。又た『自由新聞』の客員として、專らその社説を擔當したる田口卯吉が、『自由新聞』を去りたることである。

人數はそれだけであるが、彼等は何れも自由黨に於ては、取換への無きインテリ分子で、それを失ふことの損害は、決して鮮くなかつた。特に馬場辰猪の如きは、インテリ中のインテリとも

云ふべきものであつた。末廣も當時のジャーナリストとしては、屈指の一人であり。又た大石の如きも縱横の策士として、其時から大風呂敷を擴げてゐた一人であつた。田口卯吉の如きは、舊幕出身の新聞記者にして、明治時代を通じて、彼程の記者は、殆んど比類稀なりといふべき程の腕を有つてゐた。

彼等を失ふことが、自由黨の論壇に於て、如何に大なる損害であつたかは、言ふまでもない。但だ田口は他の三人が板垣の洋行に反對したと異つたる理由に於て、——詳らかに云へば、彼の友人が多くは大隈傘下の改進黨員であるに拘らず、彼は大隈が曾つて保護貿易論者であつた爲に、その親友と離れて、只だ一人それに加らず、板垣側に加勢した。然るに今や自由黨と改進黨との軋轢が激しくなるを見るにつけ、彼はその親友等と正面衝突するを好まず、去つたのである。

板垣の洋行費と國事犯の首斬り料

抑ゝ馬場、大石、末廣の反對は、洋行に反對ばかりでなく、洋行費の出所に就いて反對したの

である。板垣は本來士族としても、平士中の上位を占むる馬廻り格であり、然もその家はよき知行所を有つた爲に、頗る富んでゐた。併し彼が自由黨總理の頃は、最早や清貧を以つて聞えたる身分であつた。

內地の旅行さへも自費では辨んじかねたる板垣であれば、秘書を連れての殿樣洋行が、自費で出來る筈は無い。後藤は阿波の舊藩主蜂須賀侯爵家から、融通したと云つたが、馬場等はなかなかそれでは安心しなかつた。

彼等はこれは多分蜂須賀と稱して、實は政府が洋行費を支出したものであらうと推察した。板垣はそれを憤慨して、大和の土倉庄三郎から調達し、三千圓を借り受けたといふことであるが、それで決して十分でないことは、何人も疑を容れない。

されば假令土倉が若干を出したにせよ、洋行費の疑問は疑問として、尙ほ存在する譯である。併し板垣自身は如何に考へたか、そこまで立入つて揣摩する必要は無いが、或人が『板垣といふ漢は不思議な漢である。如何なる泥水でも、これは淸水であると云へば、默つて淸水としてそれを飲むを厭はない』といふことを云つたが、これはあまり穿ち過ぎたる言葉かも知れぬ。

兎も角もこの事件は、自由黨にとつては、一の厄難であつた。前に申す通り、内訌を生じたるばかりでなく、これが爲にさなきだに良好の間柄でなかつた改進黨との間に、非常なる軋轢を起した。恰度予が板垣を後藤の邸に訪うてゐる際に、前申す如く、『自由新聞』の主なる連中は、洋行反對で去つたから、陣容を立直す爲に、改めて大阪から古澤滋を招き來つた。

而して當時の『自由新聞』紙上に、古澤が板垣の洋行費に就いて辯んじ、改進黨に喰つて掛かり『幾千圓の國事犯首斬り料ではない』など〻云つて、大いに改進黨の副總理河野敏鎌に當てつけたる記事が出で來つた。板垣もそれを讀んで『古澤の毒筆にも困つたものだ』と、口には云つて、心では頗る愉快の情に堪へない趣きを呈してゐた。因みに云ふ、河野敏鎌は、河野益彌とて、武市瑞山の徒であり、板垣など〻は當初は反對の位地に立つてゐた。それが明治政府に出で〻江藤新平に引立てられてゐたが、後に江藤新平の亂の時には、裁判官となつて、江藤新平以下を斬罪に處し、その爲であるか否かは知らぬが、慰勞金を賜はつたといふことである。即ち國事犯の首斬り料とは、そのことであらう。それと板垣の洋行費とは、同日の論ではないと云つたのである。

大隈の風采

話代づて、これから改進黨に就いて、少しく語らねばならぬ。予が大隈に逢つたのは、前にも云つた通り、明治十九年夏、雉橋邸であつた。只今大橋圖書館のある隣りであつたと思ふ。兎に角當時に於ては、竹橋騒動の時に、近衛兵が大砲を打込んだとか、打込まんとしたとかいふほどであつて、木造ではあるが、堂々たる西洋風の建築であつた。

當時の大隈は後日の好々爺たる大隈ではなかつた。其時彼は四十九歳であり、風采は揚らず、何れかと云へば、幹軀は堂々であつたが、顔はばかに額が廣く、口元がへの字なりにしまつてゐるだけで、顴骨は秀で、髯は無く、板垣の上張下殺の三角顔に比して、大隈はやゝ圓味を帶びたる四角であつた。眼は大きくはないが、時々キラリと光つて、人の顔を見、なか〳〵油斷のならぬ面相であつた。その風采に森厳とか、崇高とかいふところは、少しも表はれてゐなかつたが、なか〳〵容易に近付き難き威容を具へてゐ、早稻田に於ける後年の大隈とは、とても同日の論で

はなかつた。

併しその時分にも相應に講釋はした。少しは禿げてゐた爲であらうが、額は板垣に比すれば、頗る廣かつた。而して板垣は見る間にその感情が時々刻々顏面に表示せられたが、大隈は決して無表情ではないが、その胸中をそのまゝ映畫として顏面に寫すなどのことは、斷じてたかつた。島田三郎は予に『大隈は大久保甲東の如き人である』と云うたが、それだけは初にも後にも予には合點がゆかなかつた。

予が大隈と親しくなつたのは、其時ではない。それより後のことであつて、それは他の機會に語ることゝする。

大隈と改進黨

話前に溯つて、明治十一年五月大久保の遭難して逝くや、その後繼者は伊藤と大隈であつた。問題は何れかであつた。從來の經歷から云へば、大隈は伊藤の先輩である。伊藤が兵庫縣知事の

時に、大隈は既に參議であつた。而して築地の梁山泊では大隈が兄貴分で、井上も伊藤もそれに雁行した。而して大久保全盛の時には、兩人が大久保の左右翼となつてゐた。

大久保は伊藤を親愛したが、大隈を畏敬といふ程ではないが、缺くべからざる材として用ひた。語を換へて云へば、伊藤は譜代の筆頭であり、大隈は外樣の筆頭といふ位のところであつたらう。

爾後の政局は、この二人の協力によつて行はれたが、やがては此の二人の間に意見の相違やら、若くは感情の齟齬やら、若くは權力の競爭やら、種々のものが手傳つて、遂に明治十四年の政變を來した。

此の政變の結果が、恰も明治六年征韓論の結果、板垣をして民選議院の建白をなさしめたる如く、大隈をして遂に改進黨の首領たらしむるに至つた。

大隈が自ら施主となつて、改進黨を建立したるか、若くは他の面々が持寄つて、遂に大隈を擁立したるか、見樣によつては何れとも云ふことが出來るが、やはり自由黨も板垣あつての自由黨である如く、改進黨も大隈あつての改進黨であつた。彼等兩人は勘く共ロボットではなかつた。

凡そ民間黨に加入すべき、總てとは云はぬが、多くの者は、自由黨に於て網羅した筈である。

それで如何に大隈の力を以てするも、一番がけは板垣にしてやられたから、二番がけの功名をするの外なかつた。

自由黨と改進黨

併し世の中にはまだ多くの落穂があつた。落穂といふよりも、鍬を入れない未墾地があつた。自由黨は必ずしも貧乏黨ではなかつた。地方の地主若くは大地主などは、皆な喜んでこれに加入した。併し世間には自由黨を以つて過激となし、純理に偏するとなし、動もすればこれを以つて壯士の團體、理窟屋の團體、過激黨の團體と見做すものがあつて、天下の思慮分別あり、金あり、學問あり、種々の持物を有つてゐる、卽ち恒産あり恒心ある者は、聊かこれに加入するを躊躇した。

そこに所謂る改進黨の開店があつた。そこで一度この店を開くや、案外に顧客が多かつた。中には自由黨に片足を踏み掛けたる者も、後返りして改進黨に加入した者も少くなかつた。改進黨を組織する主なる分子は、第一が大隈に屬する官僚黨であつた。それは河野敏鎌、北畠治房、前

島密といふ如き連中であつた。次には官僚の中の小野梓が率ゆる、若き大學出身者であつた。高田早苗、天野爲之、市島謙吉などゝいふ人々が、皆なそれである。次には福澤門下の矢野、藤田、箕浦、尾崎、犬養などの徒である。

更らに一の大なる團體は、嚶鳴社と稱したる、沼間守一の率ゐたる、島田三郎、角田眞平、大岡育造などの徒であつた。沼間守一などは義理から云つても、歴史から云つても、當然自由黨に來るべき筈の者であつた。然も彼は板垣に就かずして、大隈に就いた。これは或は沼間が河野敏鎌と離れ難き關係があつた故かも知れぬ。

何はともあれ、自由黨が明治十四年十月二十九日結黨式を東京淺草の井生村樓に擧ぐるや、改進黨は翌十五年三月十六日、東京木挽町明治會堂にその結黨式を擧げた。板垣等とすれば、これまで專制政府の巣窟に在つて、その主なる役者であつたものが、舞臺一轉急に改進黨の首領となつて、全國に黨員を募集するなど、恰も種播きから草取りまでは、自分達に任せて置いて、いざ鎌入れとなれば、眞先きに進んでこれを刈入れ、己の倉に積込まんとするもので、餘りに蟲のよき話ではないかと、口には云はぬが、心には思ふのは、寧ろ當然のことであらう。

自由黨と改進黨の軋轢

然るに改進黨の方では、兎に角自由黨をその對照とするからして、我店を張る爲には、我店の効能を述べねばならず。効能を述ぶるに就いては、他の店の缺點も擧げねばならず、遂に改進黨では、勢ひ、自由黨に對して、讒誣とは云はぬが、非難。非難とは云はぬが、批評を加へ、その爲に如何に自由黨の感情を害つたか、料り知るべからざるものがあつた。

ところがこの洋行費一件である。この洋行費一件に就いて、種々の議論が新聞の上に出で來つた。ところが當時の新聞なるものは、悉くとは云はぬが、卽ち御用新聞と稱せられたる福地の『東京日日新聞』を除けば、他は皆な殆んど大隈の息のかゝらないものはないほどであつて、それらの新聞が、板垣洋行に就いて書くことが、所謂る改進黨の指金で、故ら讒誣するものと自由黨側が受取つたのは、必らずしも不思議のことではなかつた。

而して政府にも亦た策士無きにあらずで、政府としては鷸蚌の爭ひ漁人の利で、自由黨と改進

黨とが互に喧嘩さへしてをれば、政府は萬々歳であるから、彼等が如何に此の喧嘩の火の手を煽ることに内々盡力したかは、これを推察するに難くない。

板垣は洋行した。それは明治十五年の十一月であつた。その留守中に於て、自由黨の機關新聞たる『自由新聞』の筆政を司つたのは、實に古澤滋であつた。彼も亦た土佐人にして、武市瑞山の流を汲む者であつた。彼は夙に民選議院建白の筆者として知られたる者にして、新聞記者としては、又た他に比類無き程、深刻、辛辣なる筆の持主であつた。

古澤は啻に議論の上にて敵を論破するを以つて、屑しとせず、併せてその論者にも、毒矢を挾まずんば止まなかつた。今日の言葉で云へば、寧ろ人身攻撃を以つて、論敵を制する武器とした。而してこれから所謂僞黨撲滅、三菱退治の問題が出で來つた。

僞黨撲滅、三菱退治

僞黨撲滅とは、卽ち改進黨の撲滅である。三菱退治とは、三菱と大隈とが關係あり、大隈の兵

糧方を三菱が勤めてゐるから、人を射んとせば、先づ馬を射よの筆法にて、三菱退治が大隈を退治する所以であるからと考へた爲である。これは自由黨ばかりでなく、政府でも亦た同樣に考へてゐたものらしい。

自由黨は當時の政府が蛇蝎視してゐたことは間違ひない。曾つて或る有名なる神主が、祝詞を讀んだ時に『火附け、盜賊及び自由黨の類』といふ文句を並べた位であつた。併し政府が衷心恐れ、且つ憎んだのは、自由黨でなく、寧ろ改進黨であつた。云つて見れば、板垣黨よりも、大隈黨である。板垣よりも、大隈が憎くもあれば、恐くもあつた。そこで政府としては他の政黨の力を以つて退治せしむるを以つて、一の便法としたに相違ない。政府は此に於て三菱退治の爲に、共同運輸會社を創立して、海運の上に於て三菱と競爭せしめた。

而して他方に於ては、自由黨の新聞及び同志を驅つて、海坊主退治、僞黨退治を絶叫せしめた。古澤滋が三菱を攻擊したるは、連篇累牘殆んど一卷の書物を成すも餘りあるほどであつた。

これは皆な板垣洋行の留守中のことである。

予の態度

此で予自身の態度を一言して置きたい。予は當初から板垣の人間味には傾倒した。彼は士人としての廉潔心もあり矜持もあり、純理に偏するかと見れば、又た極めて感情強く、その性格の矛盾が、却つて我等を愛着せしむるものが無いでもなかつた。

けれ共彼は統律者としては度量が狹く、政治家としては手腕が足らず、經世家としては經綸がなく、恐らくは彼に最も適當なる仕事は、純粹の軍人であつたに相違ないと思ふ。

併し彼にはどこやら豫言者の如き風格もあれば、殉道者の如き氣分もあり、兎も角も俗物中の巨擘である後藤、大隈輩の企て及ばざる如き氣品の高きところもあつた。

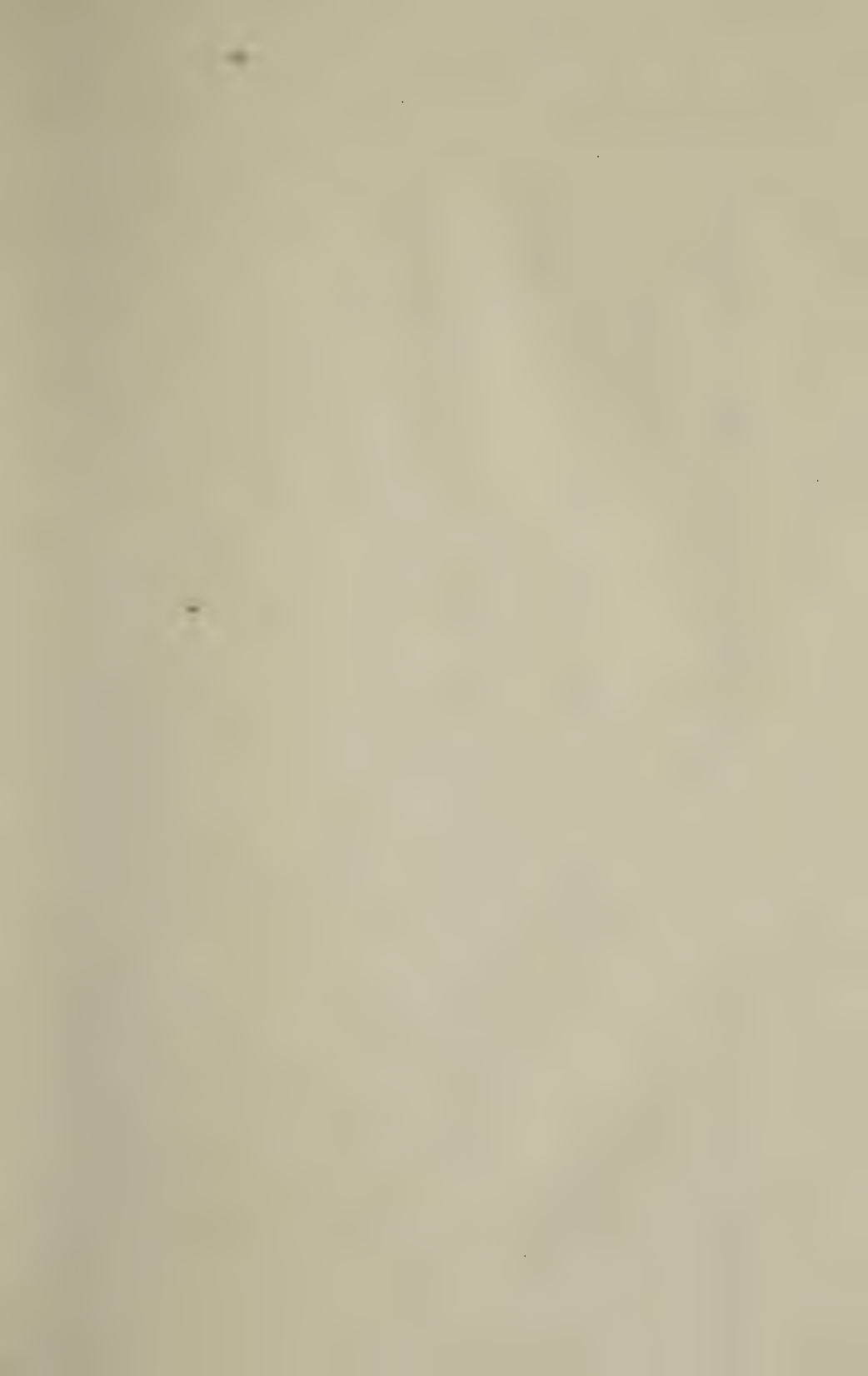
されば予は個人としては常に彼を尊敬したが、當初から身を挺して彼と共に政治上の運動をなさんとする如き心持には、なることが出來なかつた。

但だ田口卯吉、馬場辰猪の如きインテリ分子の中には悉くとは云はないが、或る程度までは

恰も我が思ふところを思ひ、我が爲さんと欲するところのものを爲しつゝあるから、予も不肖ながら後進として、彼等と共に竝び驅つて、何かの御用に立たんものと考へてゐた。

然るに爾後馬場は日本を去つて在らず。それで予は遂に予の『将來之日本』を、田口の手によつてこれを世の中に公にすることになつた始末は、既に『蘇翁自傳』に述べたれば、今此に繰返す必要はない。

たゞ板垣に就いては、我が日本の國民が、餘りに忘恩ではないかと思ひ、聊かこの機會に於て彼の爲に氣焔を吐くことゝした。

八方より眺めたる大隈

一生一度政治上の戀愛

予は一生に一度、心から此人の爲にと打込んだ。それが空しく幻滅に歸したことは、予の一生にとつて、大なる教訓であつた。今更ら誰を恨み、誰を咎むる理由も無い。但だ自らの不明、不知を慚づるのみだ。

斯く冒頭して語り出す話は、予と大隈との關係だ。予は當初から板垣をば、一種の理想家として受取り、初めて相見たる當初より、その人格とその經歷とには、打たれたが、此人と共に天下國家の政治を經綸するなどのことは、夢にも思はなかつた。それで板垣には最後に至るまで、何等失望もせず、落膽もしなかつた。

單り大隈には然らずだ。予は當初から大隈の手腕を認めたが、更にその人格に傾倒するなどゝいふ氣持はなかつた。寧ろ强ひて云へば、相見ざる前より多くの惡評を耳にしたから、必らずしもそれに雷同したといふ譯ではなかつたが、聊かそれに感染するところがあつた。然るに時代は

變じ、急進黨の急先鋒とも云ふべき板垣は、陸奥宗光を仲介として、動もすれば當時の藩閥者流と提携するの傾向を來し。却て藩閥に非ずして、藩閥の仲間とも見られたる大隈は、追々藩閥と離れて來た。

頃は明治二十三、四年より、五、六年の頃である。予の足は屢々早稲田に向つて動いた。それは只だ新聞記者として、種を取るばかりでなく、種々の意味に於て動いた。大隈は條約改正で、切角外務大臣として――明治十四年國會開設の問題から辭職を強要せられて以來――久振りに內閣に列し、その手腕を振はんとした間際に、內外朝野の反對に逢ひ、その極は來島恒喜の爆彈にて片足を失ひ、同時にその官職をも失つた。これは明治二十二年十月のことである。それから當分彼は樞密顧問官として、戸籍だけは官吏であつたが、それも在野黨の板垣と會合したとか何とかと云ふ理由で、免官となつた。同時に彼は非常なる政府の迫害を受けた。詳しきことは知らぬが、彼の最も痛手は、政府が彼の糧道を絶つたことだ。その爲に流石の彼も多少當惑した。

これは單だ風聞であるが、當時彼は嗜好の盆栽まで賣飛ばさねばならぬほどであつたと云ふ。健氣なる彼の夫人は、彼を勵まして『かまふものではない。私の著物や手廻りでもそれ〲處分

すれば、いくらか持續くだらう』といふ、堅き決心を示したといふことさへ聞いた。
それは何にしても、彼は政府から非常なる迫害を受けたことは間違ひなかつた。

予が理想の政治家としての大隈

予は此の狀態を見て、心から義憤が燃えた。而して一方に於ては政府の外交政策が、餘りに歐化主義に傾き、然も歐米崇拜主義に傾きたるを見て、心中甚だ平らかならざるものがあつた。當時の政府は、我等の眼中には、英國のリベラリズムの弱點、缺點を、その儘模倣してゐる樣に思へた。言ひ換ゆれば、彼等は歐米追隨であると認めた。而してそれに代る者は誰であるかと云へば、只だ大隈あるのみと思うた。それは何故かと云へば、大隈は外務大臣として、盛んに條約勵行をやつた。條約勵行とは、條約を文字通りに實行し、その爲に當時の日本在留外人に不便、不利を極端に與へ、彼等をして自ら進んで此の條約を改正することに發言、若くは贊成せしめんとしたのだ。即ち伊藤、井上等は、只だ外人の御機嫌をとつて條約を改正せんとするに引代へ、大

隈は外人に苦痛を與へて條約を改正せんとした。卽ち一方は砂糖や飴を舐らせて外人を手玉に取らんとし、他方は胡椒とか唐辛子を嘗めさせて、外人を自ら覺醒せしめんとした。
これが果して得策であつたか、否かは別として、予の眼中には當時の政治家達は、何れも外人を恐るゝ、恰も虎の如きであつたに拘らず、大隈だけはそれを猫として取扱はざるまでも、決して虎とは恐れなかつただけの見識があると認めてゐた。此の如く予は政治的にも、個人的にも、大隈は神輿に擔ぎ甲斐のある、日本唯一の政治家と認めたのである。平たく云へば、何時の間にか、予は大隈に向つて、政治上の戀を仕掛けてゐたと云つても差支あるまい。

進んで大隈の決心を聴く

大隈は中年までは寡默にして、容易に口を開かず、その爲に人は彼の胸中測り知るべからずと云つてゐたが、彼が片足を失つて、早稻田に引込んでゐる頃からは、最早や彼の口は殆んど水道の口の如く、際限も無く開いた。一度び開けば、混々として、止るところを知らない程であつた。

けれ共彼が餘りに贅辯である爲に、彼に向つて眞面目の話をすることは、決して容易でなかつた。彼は實に多く喋つたが、然も多く明さなかつた。

併し予は或日彼を訪うて、斯く語つた『自分は御身を理想的の政治家と思つてゐる。それで聊か今後犬馬の勞を效す積りである。但だ御身は果して今後政治の活舞臺に立ち、尙ほ爲んとするの覺悟ありや、否や』その時は大隈も幾分か予の熱心と誠意に、その心が動いたと見えて、殊勝な顔付で云ふには『自分も足を切られた當座は、野鶴閑雲、政治以外に奉公の道を效さうと考へてゐたが、爾來當局者の自分に對する態度が、餘りに陋劣を極めてゐるから聊か癪に障らないこともない。それは兎も角も、自分も機會さへあれば、必らず國家の爲に盡さんと思つてゐる』といふことで、予はその言葉を聽いて、愈ゝ滿足した。而してこれからきつと此人を一度は是非總理大臣に擔ぎ上げて、存分の働きをして貰ひたいと決心した。此で理つて置くが、予は未だ曾て大隈の方から助力を賴まれたことも何もない。助力は全く予の大隈に對する自由奉仕であつた。

餘事は兎も角も、外交の一點に於ては、予は彼に期するに、パーマーストン卿以上とは云はぬが、それに匹敵する位の手腕、力量はあるものと認め、切角その爲に骨折つた。而して此の芝居

はとても大隈一人で打てる芝居でなく、それならば又た板垣と共に打つ芝居でもなく、伊藤と共に打つ芝居でもない。それには松方より外に人が無い。大隈が酸素ならば、松方は窒素である。大隈の手腕に松方の信用を加へ、大隈の推進力に松方のブレーキを添へれば、申分ないと考へ、聊か自ら大隈、松方の聯合を計畫し出した。

これは恐らく明治二十五年、六年、七年、八年に亙つてのことであると思ふ。その事の消息は他に誰も知る者が無つた。又た誰に語る必要も無つた。但だ予の從兄藤島正健が、松方の門下生であつた爲に、彼と相語り、彼も予と志を同くして、互に協力した。而して予は當時鮮からざる政友を野黨に有つてゐたに拘らず、それ等の人々には何事も語らなかつた。それは未來を語ることは、徒らに語つて益無きばかりでなく、事を成すに害ありと認めたからだ。然るにその最中に東學黨の亂は生じ、朝鮮出兵となり、遂に日清戰役は出で來つた。

大隈の爲に努力す

予も廣島に赴いた。而して内外の事情を見るに、當時第二次伊藤内閣は、赫々たる勢であつた。併し『歡樂極れば、哀情生ず』で、戰後には必らずその内閣は崩壞する時期が來るに相違無く。それを承くる者が、卽ち大隈、松方の聯合内閣であり。且又たそれであらねばならぬと考へた。而してその爲には、斯る國家危急の場合に、大隈が早稻田に閑居して動かないのは、得策でないから、須く廣島に赴き、天機奉伺をせよと頻りに勸告した。然もそれは不幸にして、彼の左右の人々が、『これ大隈をして、敵の重圍に引張り込む所以である』としてこれに反對し、遂に行はれなかつた。

併し當時大隈に眼を著けた者は、固より予一人でもなく。又た大隈と松方とのコンビが若し可能ならば、最も善きコンビであると認めた者も、決して予一人ではなく。互に期せずしてそれ等の爲に骨を折つた者のあつたことは、予固よりこれを認めてゐる。又たそれが誰であつたかも略ぼ知つてゐる。併し予はそれ等の人々に頓著なく、予の身も魂も、殆んど大隈に打込んだことは、間違ひない。

予の洋行と松隈内閣の成立

然るに遼東還附があり、其後松方は大藏大臣として、一時伊藤內閣に据つたが、やがて辭職をした。それも松方一人の意見でなく、その政友の意見も鮮かならず加つてゐ、その中には不肖予の如きも、その一に數へても差支あるまい。これも畢竟他日大隈とのコンビの爲に、伊藤內閣と共倒れをさせたくないばかりに、强ひて松方を辭職せしめたのであつたことは、申す迄もない。

斯る次第であつたところ、予は明治二十九年の春、大病に罹り、殆んど生死の關頭を彷徨してゐたが、漸く一命を取止め、病床にて愈〻世界一周を企てた。そはやがては我等の期待する大隈、松方內閣が出來るに相違無く、その爲には予の如きも、出來た上は多少の貢獻をせねばならぬと考へ、謂はゞ病氣保養旁〻、その仕入れに歐米漫遊を企てたのである。

斯くて病床から直に起つて、早稻田に赴き、大隈に事情を話したところ、大隈は早速これを承知し。又た金策を相談したるところ、何んとか工夫がつくであらうとのことで、その相談も成

立した。因みに云ふ、予が洋行する時に、桂の如きは、多分川上操六が何か周旋をしたであらうと考へてゐた相であるが、川上や松方には一錢一厘の援助も乞はず、又た大隈にも絶對に一錢一厘の援助も乞はなかつた。但だ大隈の口入れで、或る銀行から借金をしたまでである。固より利息は或は普通より若干安かつたかも知れぬが、當然ついてゐた。

斯る次第で予は洋行をしたが、洋行して漸く倫敦に著いてゐる中に、一日朝食の卓上『タイムス』を讀んで見れば、伊藤内閣が總辭職を爲し、次の内閣組織の大命は、松方が拜することになつたといふことである。予はこれを讀んで實に吃驚した。吃驚したといふことは、尠く共予の理想の内閣が出來るには、今後一ケ年の歳月を必要とした。然るに今ま出來ては、所謂る月足らずの子である。それがとても物になるべき資格は無い。

それで予は切角組立てたる芝居が、これが爲に御破算となつたと考へて、先づ當分歸國しまいと決心した。ところが又た料らずも九死一生の大病となり、やがては手緊しく予の歸朝を促して來るから、これでも歸らなくては義理が濟まぬと考へ、漸く病骨を抱へて日本に歸著した。これが明治三十年の六月のことである。

何故に幻滅を感じたるか

日本に歸つて見れば、最早や松隈内閣は内輪大騷動であつた。而してその事情を見れば、大隈の擧動は、予の豫期したるものとは頗る相反するものがあつて、予にとつては、實に意外であつた。島田三郎は『大隈は大久保の如き性格を有つてゐる』と云つたが、早稻田の閑居を離れて、廟堂に立つた大隈は、大久保どころか、殆んど當てにはならない政治家であつた。その仕事が全く手から口で、何等一定の方針も無ければ、徹底したる政策も無く、本日定めたることとも、部下の議論や苦情の爲に、勝手にそれを變更して顧みなかつた。

予は當初から日本の國是は今後只だ如何にして露西亞と戰ひ、如何にして露西亞に打勝つべきかといふことにありとし、一切の力をその一點に傾けんと欲した。然るに大隈は尙ほ民力休養とか、地租輕減とか云ふ樣な、二十七八年戰役以前の問題を繰返して、國是の遂行を阻害するの論に與みせんとした。これではパーマーストンも何もあつたものではないと考へ、今更らながら予

は幻滅を感んぜざるを得なかつた。予は頼まれもせぬのに至る處で大隈を說いた。然も世界漫遊の途次外人に對しても、若くは在外の我が同胞に對しても、盛んに大隈の宣傳をした。中には某公使などゝは晩餐に招れたが、偶ま伊藤、大隈の人物論になつて、殆んど徹夜に幾きまで激論を鬪はし、その家人を驚かした。予が大隈狂であつたことは、恰も法華宗信者が、お祖師樣に於ける程であつた。然るにそれが悉く事實に卽して訂正せらるゝに際しては、予たるもの焉んぞ幻滅を感ぜざるを得んやだ。

併し今となつて考ふれば、予は大隈より欺かれたるでもなければ、一杯食はされたのでもない。大隈は依然たる大隈である。但だ予は大隈の言論の或る部分を取り、その言論と予の理想とを揑ね合はせて、一種の偶像を作り、それを大隈として信仰したのであつて、大隈が予を欺いたのでなく、予自身が予に欺かれたのである。大隈は實に不思議の漢である。甞てその率ゐたる改進黨の中に、解黨、不解黨の議論が起つて意見が對立したる時に、双方から大隈の意見を訊いたところ、解黨論者には解黨論と受取られ、非解黨論者には非解黨論と受取られ、双方大隈は我等の仲間であると爭つた由にて、所謂る口說の雄とは、斯る者を指すべきものかも知れぬ。

今日となつて見れば、壯年客氣、事功に急にして、思慮に乏しかつた結果として、自ら慚愧するの外はない。併しこれによつて眞劍に大隈學なるものをすることが出來たことは、間違ひなかつたと思ふ。

予は大隈に對して幻滅を感じたけれ共、不快を感んじたることとは無つた。但だ予が松方內閣瓦解後、大隈に對して從來の交誼もあり、眞心から予の進退の報告を爲し『斯る次第で予も閑暇を得たから、これより大いに讀書を爲し、修養に努むる積りである』といふ樣なことを書いてやつたところ、その意味を妙に取違へ、何やら予が大隈に向つて一度叛いたのが、再び降參でもしたかの如き口吻を以つて、新聞記者に話し。その手紙の文句さへも掲げたるを見て、予は如何にも人の好意を濫用し、信用を蹂躪したるものと憤慨し、爾來ピタリと足を早稻田に絕つた。

それが幾年であつたか。恐らくは十年に幾つたであらうと思ふ。然るに或時、大隈の園遊會の

招待を受けた。予もつら〳〵考へた。予一人が憤慨したところで、全く無益の沙汰である。大隈はその時その時のことを、勝手次第にやつてのけるから、考へて見れば別に深き惡意があつたわけでもあるまい。もう大概で切上げたが宜からうと考へ、予もシルクハットにフロックコートで早稻田に出掛けた。而して園庭を歩きつゝあると、向うから又たシルクハットでやつて來る漢がある。相見れば大浦兼武だ。

互に珍らしい所で相見ると云つて一笑した。予は『僕も久振りで來た』と云へば、彼も亦同様のことを云つてゐた。大浦は固より山縣の子分と見られ、大隈黨には寧ろ緣の薄き者であつたからだ。爾來予は政治家としては大隈と交らなかつたが、所謂る文明批評家の大隈として、社交人の大隈として、明治政治家の長老として、大なる意味の敎育家たる大隈としては、屢ゝ相交り、凡有る會合に於て、相ひ接觸した。特に大隈は苟くも予が依賴すれば、多くの不便を忍んで講演に出掛けて來てくれた。

予が德川慶喜公と初めて相見たのも、大隈邸であつた。而して予が曾つて或る場合に『臣節論』なるものを草したる時の如きは、大隈はこれを激賞して、その數句を自ら暗記してこれを他

に紹介した程であつた。大隈の病んで起たざる以前、予は彼の嗜好としたる南洋の蘭を得たから、これを彼の病床に贈つた。これが予の彼に對する長き順緣、逆緣の結末であつた。

大隈の長所

大隈は何處にその眞骨頭があつたか。それを知ることは容易ではない。併し彼は佐賀人の特色である、負けじ魂に於ては、最も豐富なる持主であつた。彼は泣き言を云はず、大概のことは辛抱してゐた。この辛抱力の强かつたことは、彼をして宛然一敵國となさしむることが出來た。次には彼は變通の策略に富んでゐた。それで彼は如何なる難題に際しても、兎も角もそれを切拔くるだけの智慧と腕前とを有つてゐた。彼には殆んど袋町が無つた。隅に押込まれても、くるりと身をかはして、廣場に飛び出すだけの才覺を有つてゐた。

第三には彼は理財の才があつた。これは彼は壯年時代から金錢に就いては本來の趣味を有つてゐて、これを融通するの道を知つてゐた。彼はその主人鍋島閑叟より、藩の基金の融通方を托せ

られ、これを上方の巨商に預け、それ〴〵その運用をしてゐた。それで彼はその糧道を絶たれても兎や角やつて行くだけのことは出來た。彼の籠城費は、彼が明治十四年、官を罷めた頃に買收したる早稻田の地面が、漸次地價を生じ、その地代やそれを切賣りしたるものにて支へたといふことである。悉くとは云はぬが、恐らくはそれが稍ゝ事實を得たものであらう。

必らずしも豪奢ならず

世間では大隈を非常なる豪奢と認めてゐるが、併しそれは彼が金を費ふことが上手なまでであつて、決して世の所謂る豪奢とは意味を異にした樣である。彼は茶代などは隨分奮發したといふことであり、遣ひ物なども相手次第では隨分思切つたものを遣つたといふことであるが、一般には寧ろ質素と云つて差支ない。又た金の勘定は細かつた。予自身の經驗を云へば、予は彼と最も親密にしたる時代でも、未だ曾つて金錢上に於て、彼より融通を受けたことは無つた。

但だ前にも申す通り、洋行するに際して、或る銀行に口をきいて貰つたが、元利とも支拂つた

から、別に大隈より恩惠を受けたといふことではあるまい。曾つて予の友人Ｙなるものが、予の郷里より立候補したことがあつた。彼は『報知新聞』の記者でもあり、大隈とも懇親の間柄であつて、大隈と相談の上に、若くは承諾を得た上に立候補したものであつたと思ふ。その選擧費用を負擔する時に、大隈は、自ら六分を拂ひ、予に四分を拂はせた。これは予に於ては、何等苦情は無いが、併し如何に彼が金錢勘定に粗雜でなかつたかは、これでも判る。

彼の門戸に久しく出入りしたる者は、大概綾子夫人及び彼の長女熊子夫人に感心してゐる。予は不幸にして二女性ながら親しくすべき機會を有たなかつた。多分此の二個の女性が荒漠たる廣き彼の門戸に、多くの綠地を作つてゐたのであらうと思ふ。この二個の女性の功德も亦た忘れてはなるまい。但だ萬一綾子夫人に嫌らはれたる者は、長く彼の門戸に出入りすることが出來なかつたといふ說もある。

彼は眼中人無く、西鄕南洲さへも、彼の眼中には殆んど一介の武弁に過ぎなかつた。パークスとも屢〻抗論、相屈しなかつたといふ。然も王陽明ではないが、ソクラテスではないが、彼も亦たそれ等の亞流として、夫人の前には頭が上らぬといふほどでは無くとも、頗る斟酌するところ

があつた樣だ。併し彼にも種々悲劇もあつた樣であるが、家庭的には他の元老よりも寧ろ幸福であつたといふことが出來樣。尠く共夫婦の關係に於て。又た親子關係に於て。

大隈の強點

大隈の最も大なる強味は、記憶力である。特に數字に對する記憶力である。同時に彼が讀書の人であつたことが、彼をして老いて益々若からしめたのであらう。彼は自ら讀書人たることを、標榜せざるも、維新の凡有る政治家の中で、最も大なる讀書人であり、その點に於ては、或は學者として世に立つたる福澤以上であつたかも知れぬ。彼は漢學者から蘭學者となり、英學に轉じ、英學の敎師となり、英學生の監督者となり、縱令英語より得たる知識は、直接にはそれほどでなかつたとしても、間接に得たる知識は多大であつたと思ふ。

而して彼の讀書慾は、晩年に於て益々增進した樣である。世間では眞面目に受取らなかつたにせよ、彼は自ら東西文明の木鐸として、一種の文明觀を打立てんと企てゝゐた樣である。

予は晩年に屢〻彼に面會し、又た彼より著述の寄贈を得て、よく彼の云ふことを聽き、彼の老いて愈〻盛んなるに敬服した。彼は別に予に何等感謝することは無つた樣であるが、予は曾つて彼がその老母の葬儀に、不自由なる足を人に助けられて、悄然として護國寺の石段を登りつゝあるを見て、彼が老母に對する孝養の情の濃かなるを看取し、それを新聞に書いたことがある。彼はそのことを予に向つて、一再ならず繰返して感謝してゐた。

予は又た予の洋行中、彼が予の父に贈りたる盆栽の鉢植が、今も尚ほ逗子老龍菴の庭中に植ゑられ、四十餘年間、その翠色を改めざるを見て、彼に對する順緣、逆緣を考へ、然も最後に於て彼とその交りを全うすることが出來たことを、今も尚ほ幸福と感謝してゐる。

大隈、伊藤、井上

大隈は年齢に於ては、伊藤の長者である。（大隈は天保九年生。伊藤は天保十二年生）新政府に於ける位地も、彼は當初から肥前の代表者として、自然伊藤、井上よりも上であつた。何とな

れば長州には尙ほ伊藤、井上よりも先輩である木戸、廣澤、大村等がゐたからだ。築地に於ける梁山泊時代では、大隈は全く兄分であつて、井上も伊藤も弟分であつた。三人の中で年齢が末弟である伊藤は、何時の間にやら、年齢に於ては、長兄である井上を凌駕したが、大久保死後に至つては、殆んど大隈と對立の勢をなし來つた。

而してその結果が、或る意味から云へば、明治十四年の政變の唯一の原因でないとしても、主なる原因の一であつたに相違あるまい。爾來彼等は明治二十一年二月、大隈が再び外務大臣として、井上の後を繼いで入閣するまで、殆んど公私共に絕交と云はずんば、斷交の姿であつたが、二十一年以後又た兩人の交りは囘復した。然も大隈の條約改正に、最も大なる打擊を加へ、それを破壞せしむるに、最も有力であつたのは、伊藤の反對であつたことは、言ふ迄もない。

これは勿論政見の異同によつて止むを得なかつたにしろ、此の如く兩人は明治十四年に一度離れて以來、暫く合つて、長く合ふことを得なかつた。併し彼等は死に抵るまで、當初の交情を維持してゐた。

特に大隈の眼中には、伊藤よりも或は井上の方がより良く映じてゐたかも知れぬ。大隈は伊藤

を才の人と見。井上を力の人と見、且或は情の人とも見てゐたらしくある。山縣に對するよりも伊藤には友情があり。伊藤に對するよりも或は井上にはより以上に友情があつたかも知れぬ。けれ共伊藤と爭うたる如く、井上とも相當相爭うた。伊藤との競爭場裡は專ら政治であつたが、井上との競爭場裡は、財政、經濟の方面であつた。

伊藤も井上も大隈と親しかつたばかりでなく、その夫人とも親しかつた。井上の夫人は大隈の媒酌で出來たものであつて、これには鮮からざるローマンスがあり、大隈はよく是を語つてゐた。その井上が又た雷親爺として總ての人に雷を降しつゝあるに拘らず、大隈と同樣、その夫人に對しては蛞蝓に鹽、海鼠に藁と云ふ如く、非常に苦が手であつて、彼も亦恐婦患者の一人であつた。

卓上に於ける兩雄

予も大隈、伊藤の列席したる宴會、若くは晩餐會に、屢とは云はぬが、出會したることがあ

るが、これは全く見物であつた。恰も天下の英雄は使君と操とのみと云ふ如く、互に眼中人無く、何時の間にか、大隈と伊藤とは、テーブルを隔てゝ、川中島の合戰をやり初むるのであつた。けれ共テーブルの上の合戰では、公平に見て大隈の勝味が六分で、伊藤は四分であつた。兩人共に演說よりも座談に上手く、多くの人を控へたる座談には、尙更ら上手かつた。けれ共何れかと云へば、伊藤よりも大隈の方が雄辯でもあり、又たその材料も豐富であり。話題も多角、多方面に亙つてゐた。豐川良平などは、銀行倶樂部に何時も兩人を招待して、兩人の太刀打を傍から眺めて、それを座興とした樣に察せらるゝ。

伊藤も相手かまはずやりつけ、松方などの如き溫厚の人を相手に、稠人廣座の中で、隨分手緊しく論んじつけて、傍からは今少し言葉に文をつけたたらば宜からうと思ふほどであつたが。その伊藤が大隈に對しては、君、僕同樣のぞんざいな言葉を使ふが、どこやら敬意を表してゐた樣である。而して往々伊藤も大隈の爲に揶揄せられて、一寸挨拶に困つたこともあつた樣だ。その點に至れば、大隈は實に機鋒縱橫であつた。これが昔の沈默、寡言の人であつたなどゝは、誰しも想像が出來なかつたであらう。

談論の雄としての大隈

談論の雄としては、予が接した限りに於て、大隈以上の者はあるまいと思ふ。如何なる者を相手としても、相應の挨拶が出來る者は大隈より外に何人もあるまい。その專門、若くは部門に就いて比較すれば、大隈以上の人もあつたらうが、所謂雅俗上下、千狀萬態、ゆくとして可ならざる無きは、大隈であつた。如何にして彼が斯る技巧を得たるか。その素養は少壯時代からであらうが、その成熟は全く中年以後のことであらう。

凡そ人と對話するに二種の方法がある。その一は我が長を以て、他の短に當ることである。その二は我が長を以て、他の長に當ることである。佐久間象山先生の如きは、漢學者には蘭學を以て當り、蘭學者には漢學を以つて當り、詩人には和歌、歌人には詩、酒客には茶、茶人には酒と云ふ如く、何時も相手の不長所のところに打突かるのを、談話の要諦とした樣であるが――眞僞は詳かならず――大隈は決してさうではなかつた。

禪坊主が、『道に劍客に逢はゞ、須らく劍を談ずべし。これ詩人に非らざれば、詩を說くなかれ』と云つたが、大隈は正しくその通りで、相手が學者であれば學問を以て當り、相手が實業家であれば、實業を以て當り。坊主にはお經、神主には國典、軍人には軍事、銀行家には金融と云ふ如く。その極、亞米利加の客にはワシントンの講釋をしたり、英國の訪問者にはマンチエスター派の講釋をしたり、おめず、臆せず、相手の最も得意とするところ、適意とするところに向つて、その談論を試み、それが爲に相手を煙に卷いたことは、殆んど百發百中であつたらしい。

但だ屢〻彼の門戶に出入する者は、往々同一の談話を珍らし相に幾度も繰返へされたことがあり。更に最も驚くべきは、前回訪問して、此方から述べたる意見が、次回の訪問には、彼の意見として、此方に向つて講釋せらるゝことがあつて、餘りにその消化の速かにして、その效果の現金なるに吃驚する如きことも、皆無ではなかつた。

大隈と友情

併し大隈は決して出鱈目を喋べるでは無く、若し豫期し得べき場合がある時には、決してその準備を怠らなかつたらしく察せられた。相手はとつさの間に辯んじ來つた如く考へても、大隈自身は相當の準備をしてゐたらしく察せらるゝ。けれ共準備したにせよ、しなかつたにせよ、兎に角大隈の頭は、質屋の庫の如く――稍ゝ無系統、無秩序であつたかも知れぬが――凡有るものが貯藏せられ、それが彼の記憶から混々として出で來り、所謂る左右原に逢ふの有様であつたことは、爭はれぬことであつて、これだけを見ても、彼が如何に卓越したる人物であつたといふことが判る。

大隈は容易に人の悪口も云はなかつたが、同時に容易に人を賞めたことも無つた。松方などは、殆んど眼中に無つた樣であつたが、兎も角相手としたのは、伊藤であつた樣だ。併し伊藤のことも、兎角伊藤の弱點やら、その弱蟲であつたことやら、又た當惑して意氣沮喪したことなどを、よく語つた。別に悪口といふではないが、先生がその高足門弟の道場に於ける不覺を、面白半分に物語る如き態度を以て。

但だ井上に就いては、『井上の胃腑は、駝鳥の如く、砂利でも、土でも、何んでも呑込んで消化

する』などゝ云つて、冷笑し半分に語つてゐたが、併し井上の所謂る迫力、推進力には、多少重きを置き、又た井上の情誼をも認識してゐた樣に考へられた。井上が最後に大隈を引張り出して、大隈內閣の產婆役を力めたのも、その一は政友會が癪に障つて、大隈の手でそれに折檻を加へんとしたのであらうが、併し他の動機は、大隈に對する最後の友情の發露であると見ても間違なからう。

大隈と大浦兼武

大隈の晚年、その最後の內閣を組織した以後のこと、曾つて大隈より會見を求められ、早稻田に赴いたことがあるが、四方山話しの末、予の友人である、大浦兼武に就いて、大隈の意見を訊いたところ、大隈は容を改めて曰く、

『自分は大浦とはこれまで何等政治上にも交涉は無つた。ところが今度此の內閣を組織するといふ場合に、加藤高明などゝ相談の上、大浦を愈ゝ內務に据ゑることゝなり、その旨を大浦に加藤

よりして通じたところ、やがて反對の意見が起り、强ひてそれをやれば、內閣組織の上に少からざる障碍を生ずる虞があつた。予もほと〱當惑し、今更ら彼との口約を變ずるわけにもゆかず、さりとて切角出來つゝある內閣を壞すわけにもゆかず、困つた結果、兎も角もその事情を大浦に打明けるに如かずと思ひ、これを大浦に打明けたところ、大浦曰く「自分は決して內務の椅子でなくては入閣せぬなどゝいふことを固執しない。如何なる椅子でも、御身が適當と思ふ所に推薦せられたし。若し萬一予の入閣が不利であるといふことならば、決して御心配には及ばない。予は不肖ながら、閣外にあつて、御援助致すであらう」と云ひ、極めて素直に此話を引受けた。予もほと〱それに感心したが、爾來同僚として相交るに、彼程あてになる者は無く、彼ほど賴母しき者は無く、予は實に人を見ることが、容易でないといふことを、大浦によつてこれを知つた』といふ樣なことを語つた。

これは恐らく心からのことであつたと思ふ。但だ、大浦はその爲に初め農商務大臣となり、漸くにして內務大臣に轉じたが、二個師團通過問題にて、遂に瀆職事件を惹起し、その職を辭せねばならぬことゝなつたのは、寔に遺憾のことであつた。併し大浦も亦た大隈に對しては決して惡

い感じは持たなかつたのであらう。大隈は己を捨てゝまでも人を救ふが如きほどの俠氣はなかつたとしても、徒に人を陷れて自ら喜ぶ如き小人では無つた。彼は俗物の尤であつたが、その俗は決して俗惡ではなかつた。新しき語を作れば、俗善とも云ふべきものであらう。

デモクラシーの生んだ人物

大隈は山縣等の如く、來る者も時としては拒み、去る者も時としては追ふといふ如きことではなく、自ら門戸を設けず、來る者は拒まず、去る者は追はずで、その門戸は停車場同樣の感があつた。それでも始終一貫、大隈の政友も少くなく、又た政治を別にしての友人も少くなかつたのを見れば、彼にも人を惹き付ける力が決して少くなかつたことが判る。彼は決してその友人をタクシー同樣に勝手に乘り、勝手に乘り捨つるといふことではなかつた。

多少人間の情味も解してゐた樣であるが、併し赤心を人の腹中に置くといふ如き漢ではなかつた。相應に人の世話も燒いたが、併し所謂相應であつて、身を捨てゝも人の爲に盡すなどゝい

ふ様なことは無つた。その爲に相應に大隈の爲に働いた者もあらうが、身を捨てゝまでも大隈の爲に働くといふ者も、左程多くなかつた樣に思ふ。併し要するに彼はその出身は官僚であるが、半生以後は大衆的の人物であつて、日本のデモクラシーが生んだ、一の人物と云つても差支あるまい。

世間では大隈の殿様振りを云ひ、豪奢を唱へ、貴族的政治家の標本らしく云ふが、我等の眼中にはやはり、彼は飽迄大衆的であつたと思ふ。大隈の豪奢は、只だ人の眼に著くところだけで、眼に著かない處は、切りつめてゐた。寧ろ人の眼に著くところは質素にして、人の眼に著かない處に豪奢を極めてゐる者から見れば、大隈の趣味はその趣味の程度が高尚でないばかりか、贅澤でもなかつた。併し彼が餘り傍若無人にやり廻した爲に、畏き邊りにも或る時代には、御覺えが目出度くなかつた樣であるが、それは寧ろ彼の寃罪と云つても差支無からう。

予曾て後藤を大隈に紹介す

今手許に大隈家に保存しある予の書簡の寫しがあるから、此にこれを掲げる。

後藤新平氏を紹介申上候。當人は定めて、御承知と存候得共、官吏中にては奇才に有之、若し御提撕被成下候はゞ、他日或は多少の用にも相立ち可申と存候に付、呉々宜敷奉願上候。當人は償金を以て國家社會主義の一端たる事業に供し度意見を有し、萬御協賛を仰ぎ度とて罷出候ものに有之、此事は伊藤侯にも略說致したる由に有之候。右御含の上、當人の腹に落つる可く、可然御垂示奉願上候。當人は閣下を以て、天下の豪傑と相信じ候ものに有之、兼て欽慕申上候由に付、此事も併せて御含の上、申添候。　早々不一

十二月十六日夜(明治二十八年)　　徳富生

大隈伯閣下

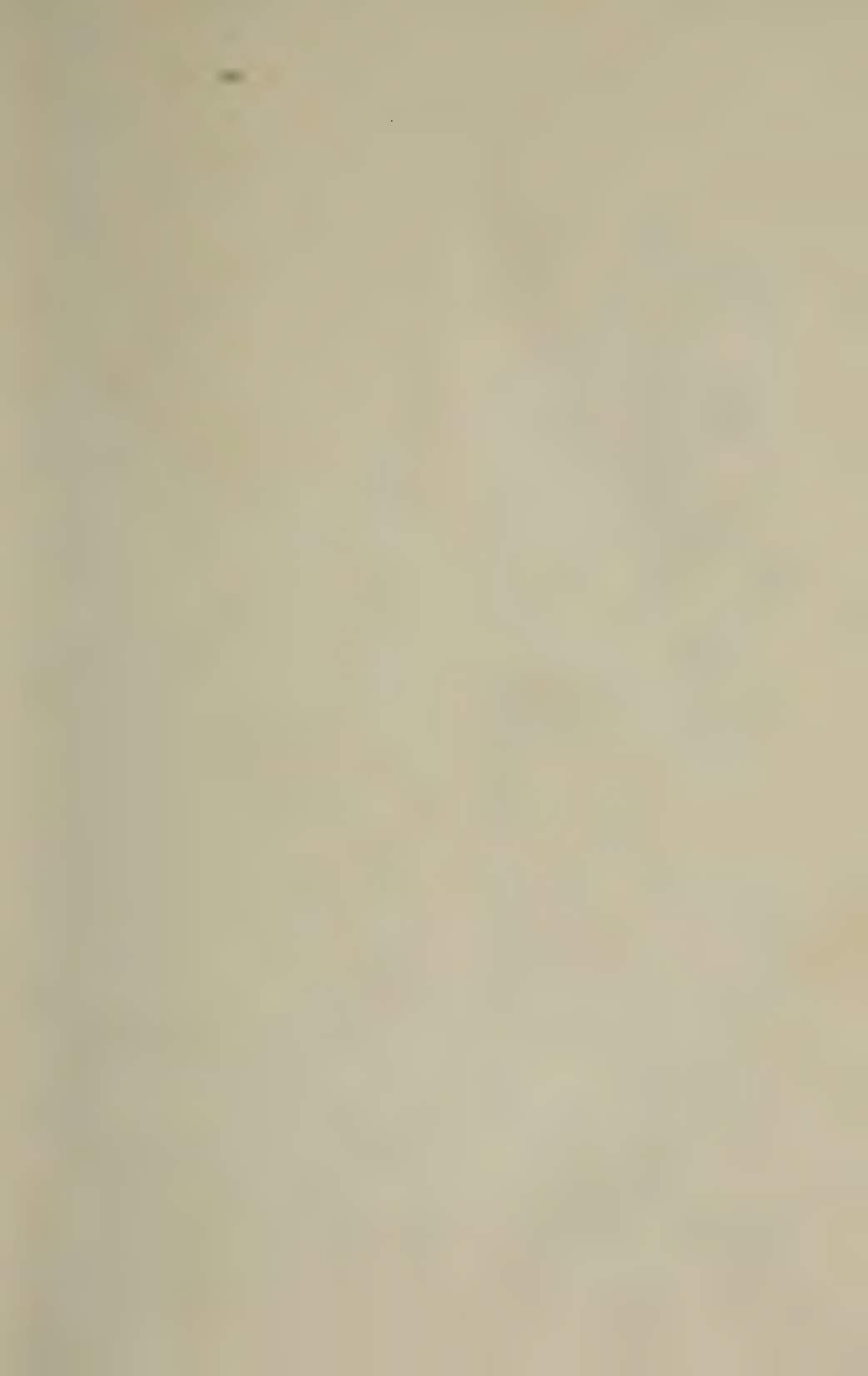
即ち予が他日の後藤新平伯、當時の後藤新平を彼に紹介したものである。これは後藤が相馬事件から出獄して、廣島檢疫所に子爵石黒忠悳の推薦によつて採用せられ、やがて再び內務省衞生局長に復職したる頃のものであらうと思ふ。斯く紹介せられたる後藤

が、大隈死後は世間から第二の大隈として稱せられ、その大風呂敷を擴げるところに於て、互に相ひ酷似したるばかりでなく、その門戶の千客萬來までも、稍ゝ同じ樣に立至つたのは、紹介したる予も、紹介狀を持參したる後藤も、これを受取つたる大隈も、三人ながら豫想しなかつたことで、人間は全く一寸先きは闇の世で、何人も自分の運命さへも、自分で測り知ることが出來ないものであれば、況んや他人の運命などは、尙更らである。併しその過ぎ去つた跡を考ふれば、又た自ら然るべき理由、然らざるべからざる事情の存することは爭はれぬことだ。

小説よりも奇なる生涯の

陸奥宗光

陸奧宗光伯

勝海舟

小說よりも奇

明治年間に於ける政治家中、最も珍らしき存在の一は、伯爵陸奥宗光であらう。如何に割引しても彼は政治家として、明治の史上に若干頁を剩すべき漢である。明治政府の大官として、即ち元老院幹事として、時の政府を顚覆し。又は、時の要路の大臣を暗殺するなどゝいふことの陰謀に與みし。然もその要路の大臣なるものは、彼とは政友でもあり、政友以上の朋友でもあるといふに至つては、隨分思ひ切つたことを目論む漢と云はねばならぬ。若し目論むといふ語が過當であれば、如何に差引いても、與みしたる漢と云はねばならぬ。

それが平氣でさういふことを目論み、その事の破れて入獄するや、又た平氣で獄中より出で來り、新規蒔直して、その顚覆せんとしたる政府の人となり。遂に己れも亦た最も重要なる外務大臣となつて、條約改正やら、日清戰爭やらに就いて、それぞれ功績を立て、然も漸く人生五十を過ぐる四歲にして逝きたるは、實に異常の生涯と云はねばならぬ。

世人はヂスレリーの生涯を見て、これを傳奇的といふが、陸奥の生涯はそれに比すれば、より傳奇的である。如何なる奇想天外より出る小說家でも、彼の生涯ほどの波瀾多き、變化多き生涯を、空中に描き出すことは出來まい。

陸奥との初對面

予が陸奥に接したのは、明治十九年の夏、彼が下谷根岸の金杉に住したる時代であつた。予は確かには記憶せぬが、多分島田三郎の添書で、彼を訪うたと思ふ。當時彼は仙臺の獄を出で、それより洋行し、歸來、辨理公使として、井上大臣、青木次官の下に、政務局長の仕事をしてゐた。彼は維新以來多くの履歴の持主であつたが、如何にも若々しき氣分が滿ちてゐた。當時彼は四十三歳、予は二十四歳であつた。

彼は予の顔をつく〲見て、突然『君の家は熊本縣の南端薩摩境の水俣であらう』といふから、『その通り』と答へたところ、彼は語を繼いで『君の家はよく知つてゐる。君の親は勿論、君の

姉婿なども知つてゐる』と云つた。話はそれからそれと飛んで、それ以來予は陸奥と親しく往來することになつた。實を云へば、豫て陸奥に就いては吾父から聽かされたる、相當の豫備知識を有つてゐた。併し多分當人は忘れてゐるであらうと思ひ、又た忘れなくとも、今更ら古き話を持出すこともないと思つて、默つてゐたのであるが、彼の方から斯く話し掛けられては、此方でもその儘それを肯定するの外なかつた。

陸奥に對する豫備知識

ところが正直のところ、彼の評判は、吾家ではあまり香しくなかつた。予の家には當時長崎に於ける、諸藩遊學生の人々――その中には陸奥等の屬する、海援隊の人々もあつた――の一群の寫眞があつたが、その中の陸奥の顏だけは、誰が消したか知らぬが、墨か何かで塗り消してあつた。それ程彼の評判は吾家では良好ではなかつた。彼は長崎から多分予の從兄江口高確に伴はれて來たであらうと思ふ。

何れにしても、彼は暫く予の家に滯在した。而して世間の眼を憚つて、彼を旅から來たる醫者と稱し、彼の外出する時には、藥箱を擔がせて、後から步かしめたといふことである。當時予の鄕里より五里隔てたる、佐敷町に、幸準藏といふ人があつた。その妹は吾父の弟の妻であつたから、勿論予の家とも懇意であつた。ところが或日吾父が陸奥を伴ひ、幸家の墓地に赴いたところ、陸奥が幸家の墓に餘りに鄭寧に頂禮をするから、吾父は怪しんで『御身は何故にそれ程鄭重にせらるゝや』と問うたところ、陸奥は『既に自分は幸と兄弟の誼を結んでゐるから、幸の尊親族は卽ち予の尊親族である』と云つた。

そこで正直一途の吾父は、餘りに白々しいと思ひ、『斯漢は油斷のならぬ漢といふ感じがした』といふ樣なことを語つてゐた。當時陸奥は伊達小次郞とも云ひ、錦戶太郞とも名乘つてゐたさうだ。其他種々の話が殘つてゐるが、何れにしても輕薄才子とか、油斷のならぬ漢とかいふ、評判であつた。併しそれはそれとして、予は一見此人は寔に當世の人物である。必らず今後に何事かよく成す漢であらうといふことを、卽時に認識した。

陸奥の好意

當時陸奥は所謂歐化主義の尖端を行く、急進黨の一人で、その首領としては井上馨、次に青木周藏、野村靖、西園寺公望、光妙寺三郎などにて、加藤高明なども、當人はいざ知らず、陸奥の方では固より仲間の中に加へてゐた樣である。予は初めて陸奥から『神農も初めは烏頭に眼をまはし』といふ句がある。神農が藥草を發見する時には、凡有る草を自ら嘗めて見た。烏頭といふ草は苦くて、とても口にすることも出來ない。ところが流石の神農も初めは一切無差別に嘗めたから、烏頭には苦がくて眼を廻したといふ譯だ。外國の文物を採り入れるにも、我等は幾度か烏頭に眼をまはすことを、覺悟せねばならぬ』といふことを聽いた。

又た同じ意味のことを、西園寺公に『世間で長を採り、短を捨るといふが、それは我に選擇の見識が出來た上のことである。今日日本が西洋の文物を採用するに、何れが長、何れが短の辨別が出來る筈がない。それで今日の計は長も短もない。何でもかでも、一應西洋の文物を採ること

である。長短の問題はその後である』といふ樣なことを語つた。

說明の仕方は異るが、意見の筋は同一である。陸奧が如何なる程度まで予にインテレストを有つたか知らぬが、「予は今日に於ても彼が予に對して甚だ好意を表したることを感謝してゐる。『將來之日本』を彼がどの位の價値に買つたかは知らぬが、『國民之友』には確かに多大の興味を有つてゐた樣だ。それで予の方から別段依賴もしなかつたが、彼の方から屢〻手を出して、予の爲に門戶を開いて吳れた樣だ。

而して明治二十年の末、保安條例の發布せらるゝ頃には、予は大病であつたが、彼は予の爲に心配して、醫者を周旋してやらうなどゝいふ手紙をよこしたことがあつた。

陸奧と相乘り車に乘る

その時分のことである。予は嘗て陸奧と相乘り車にて、靑木周藏を外務次官々舍に訪問したことがあつた。當時は相乘り車なるものがあつて、よく遊蕩兒が藝者などゝ乘つたものである。又

た老人が介添など〻乗つたものである。又た貧乏者が經濟的に乘つたものである。因みに云ふ、予は『國民之友』發刊の當初、新橋からよく予の義兄湯淺次郎と相乘り車で、靈南坂下まで乘つて歸宅したことを覺えてゐる。

その當時から陸奥が肺病患者といふことは、誰も知らぬ者はなかつた。然も陸奥は口を開けば口角唾きを飛ばして、その傍にをる者は唾きの雨を浴びせかけらる〻虞があつた。斯る漢と相乘り車に乘ることは、予も聊か迷惑と思はぬでもなかつたが、彼としては予に對する好意であると認め、予は乘つたのである。因みに予は京都でも往々新島先生と相乘り車で、喰ひ廻つたことがある。

陸奥米國に赴く

然るに第一次の井上の條約改正は、種々の異論にて失敗し、井上は辭職することになり、一時伊藤が外務大臣を兼ねてゐたが、やがて珍らしくも明治十四年以來、跡を政府に絕ちたる大隈が

入つて、外務大臣の要職に就いた。これが明治二十一年二月であつた。元來大隈も薩長閥外の者であり、陸奧も亦た同樣であつた。特に陸奧は何が嫌ひかと云へば、藩閥ほど嫌ひはなかつた。然るにその陸奧が大隈とそりが合はぬのは、何故であつたか。その理由は予には判らない。けれ共彼は何やら大隈嫌ひであつた。

されば大隈の外務大臣にならんとするを聞くや、陸奧は最もそれに反對運動をした。それだけは別に不思議はないが、不思議なるは、大隈が一度び外務大臣となるや、彼は忽ち大隈を訪うて云ふには『御身も定めて聞きつらん。予は御身の入閣に反對運動をした。それは個人として御身に反對する者ではないが、政治には統一が必要だ。牛は牛連れ、馬は馬連れといふことがある。然るに今ま俄かに異分子の御身を政府に入るゝは、政府の爲にも、御身の爲にも、兩損あつて一得無し。これ予が反對した所以である。併し今ま御身が外務大臣となられたる以上は、予の進黜陟は一に御身に任かす。若し强ひて予に希望を述べよとならば、予は此際外國に赴きたし』といふことを告げたところ、大腹の大隈は『予を北米合衆國公使に榮轉せしむることゝした』といふことを、親しく陸奧より聽いたことがある。

同時に陸奥は『斯る次第であるから、米國では餘程しつかりやらねばならぬ。間違つたらばきつと仇を取らるゝであらうから、それには氣をつけねばならぬ』といふことさへも、附け加へて話した。斯くて陸奥は飄然として米國に赴いた。その時には彼の從弟、後の岡崎邦輔は、長坂邦輔として隨行者となり、内田康哉は外務省の外交官補であつたか、或は書記官であつたか、隨行員となつた。而して彼の夫人亮子、女清子なども相伴つた。清子はその出發以前から鳥居坂の英和女學校にて西洋料理の食べ方などを學習すべく、故らにやられてゐた樣である。

陸奥と同志社

話代つて同志社では、同志社大學運動が漸く具體的に發展し來る際であつて、京都では知事北垣國道、大阪では師團長高島鞆之助、控訴院長兒島惟謙なども、それ〴〵新島先生の志に共鳴するところがあつた樣だが、併し中央の大舞臺では遂にものにならなかつた。然るに何時の間にか新島先生と陸奥との間に聯絡が出來て、いよ〳〵陸奥によつて、東京の大舞臺が開拓せらるゝ

ことゝなつた。陸奥その人は同志社にどれ程のインテレストを有つてゐたか、又た新島先生の人物にどれ程傾倒した事か知らぬが、兎も角も陸奥によつて東京に於ける同志社の門戸は開かれたといふことは、疑を容れない。

その理由は予が推測するところによれば、第一は當時矢野文雄などはユニテリアンを以つて日本の國教としては如何などゝいふことを提唱した位の時代であつて、所謂る歐化主義には基督教が附き物であるから、基督教の學校を隆盛ならしむるは、歐化主義を擴張するといふ意味であつたかも知れぬ。或は又た私學としては、慶應義塾が當時殆んど獨歩の勢であつた。――早稻田は尚未だ今日ほどには發展しなかつた――それで尠く共、同志社をして、民間私學の一要素たらしめんとし、出來得べくんば、慶應義塾と對立し、日本を中分して、教育上に於ける福澤の勢力と、新島の勢力を對立せしめたいと希望してゐたかもしれぬ。

何れにしても陸奥はなみ〴〵ならぬ世話を燒いてくれた。卽陸奥によつて井上に紹介せられ、井上によつて、凡有る井上麾下の紳商に紹介せられた。同時に大隈が井上に代つて外務大臣となつたから、遂に井上、大隈の合併運動となり、外務大臣官舎に於て、前大臣井上、現大臣大隈

が主人となつて、當時の紳商を會合し、井上が自ら筆を執つて勸進帳を書き歩いた。卽ち大隈、井上が二千圓づゝの寄附を勸進帳の筆頭に書き、それで一夕にして三萬餘圓の金が出來た。三萬圓といふも、今日から云へば、三十萬圓にも相當するものであらう。これが明治二十一年である。而してこれ等の仕事は皆な陸奥の手ほどきによつて出來たもので、同志社はこの點に於ては誰よりも多く陸奥に感謝せねばならぬ。

鹿鳴館會合の小話

陸奥はいよ／＼米國に赴くことになり、その家を引揚げ、鹿鳴館を宿としてゐた。鹿鳴館は日本歐化史の記念建物であつたが、今は山下町舊華族會館である。當時予も一再ならず彼を訪ふたことがある。その時のことで一寸面白き物語りがある。同志社のことで陸奥の出立以前、鹿鳴館で小集を催すことになつた。ところが新島先生は禁酒家であつて、自ら進んで人に酒を提供する抔といふことは、好まぬ人である。然るに青木周藏は獨逸仕込みのクリスチヤンであつて、

『ビールなどは水も同様で、一般的飲料である。切角人を集めて置いて、ビールも飲ませぬなど莫迦〳〵しきことがあるものか』と盛んに異論を唱へ出した。

青木といふ人はなか〳〵面白い人であるが、理窟屋であり、その理窟が動もすれば、非常識に赴く理窟屋であつた。そこで新島先生も頗る當惑したところ、陸奥が云ふには『青木等が酒が飲みたければ、予の室に備へて置くから、飲ませて差支ない。何も新島君が出すにも及ぶまい。又た青木とても新島君の酒なら飲むが、俺の酒なら飲まぬといふこともあるまいから、さういふことは問題とするにも當るまい』とのことで、話はやがて解決した。

又た當時予が談話しつゝある際、或る高官の人が來たとて、一寸中座をしたが、後から陸奥が予に語つて云ふは、『今來たのは薩摩の川村純義である。子といふものは誰でも餘程可愛いものと見ゆる。彼の息子が今ま米國留學中であるからと、わざ〳〵予に宜敷く頼むと依頼に來たのだ』などと話したことがある。元來陸奥は長州人とは良かつたが、薩摩人とは殆んど相容れなかつた。

然るに薩摩の長老の一人である川村伯が、駕を枉げて彼に依頼に來たといふことであるから、

よく〳〵のことであつたと思ふ。彼としては意外に思ふたのであらう。

陸奥と言論

陸奥自身も言論には頗る重きを置く漢であつた。自ら『辯如懸河膽如天』といふ詩を作つてゐるが、膽天の如しは兎も角も、辯懸河の如しは間違ひなかつた。その演説も左程感心するほどではなかつたが、若し熟練したらば、大隈、伊藤以上であつたらうと思ふ。座談にも稍々議論調を帶びて、却つて子分の岡崎邦輔の方が上手であつたかも知れぬ。邦輔のは春雨の降る如く、何んとなく物柔らかに、人の心に浸み透る様に話すことが上手であつた。陸奥のは論鋒奇俊、人をして應接に遑あらしめざる妙味があつた。

同時に詩も素人ではあつたが、なか〳〵月並的でない面白味があつた。文章も上手、下手は姑らく措き、達意の文であり、彼が薩長藩閥に不平の餘り、『日本人』なる一文を草してこれを木戸に與へ、憤然として官を去つたほどであるから、その文章も事理明白、氣焰もあり、光彩もあつ

た。從つて彼は言論には多大の興味を有つてゐ、その爲に予に對しも、予自らよりも、彼の方から接近を欲したわけであらうと思ふ。兎に角當時の大官連の中にて、文學的の素養と云はずんば興趣を有つたもの丶中では、第一とは云はぬが、當然陸奥もその中の一人であつたに相違ない。

予が未だ『國民新聞』を發刊しない以前、村山龍平が大阪から東京に乘出す頃、陸奥が米國に出立する以前、彼は村山及び予を彼の麻布仲ノ町の新邸――前區役所前――に招き、日本一の經營者と、日本一の記者との仲を取持つて呉れたことがある。理つて置く、この日本一といふことは、彼の言葉をそのまゝ此に借用したので、予自らが云ふのではない。

その結果村山が予の赤坂榎坂町の宅に二人引の人力車で乘り來つて、遮二無二、予を朝日新聞に云々の話をしたが、予は强ひて斷り、遂に斷り切れずして、論文數篇を送ることを約束して、當分送つたことがある。それも村山といふよりも、寧ろ陸奥に對する義理立てゞあつた。

大臣を期して歸朝す

話代つて陸奥は米國ではなか〳〵評判がよかつた。それもその筈である。彼は公使として九鬼隆一の跡を繼いだのであつて、彼は維新の當初、明治政府に出身以來、外人關係には最も緣故もあり、經驗もあり、然も最近外務省の政務局長として、その實務に當つたから、彼のワシントンに於ける行動は、痒いところに手が届く樣であつたのは、疑を容れない。けれ共彼の志は決して米國ではなかつた。彼の志は日本であつた。彼の言ふところによれば、彼の夫人亮子も社交的には頗る勗めたさうである。彼は何故かこの夫人亮子には頗る憚るところがあつた樣だ。彼の傳記の作者が『君は常に夫人を恐る』と書いたのは、恐らくは事實であらう。彼は予に向つて訊ねもせぬのに『予の妻は播州龍野の藩士の女である』と語つた。事實は知らぬが煙花界より拾ひ上げたる婦人であるといふことだ。

山縣が黒田首相、大隈外相の風波を避けて、内務大臣として、歐米を巡回してゐた時に、陸奥と山縣とが米國に於て出會した。その間に如何なる約束が成立つたか、如何なる相談が成立つたか知らぬが、兎も角も、三條暫定內閣の後を繼ぐ者は、山縣より外には無つた。陸奥もその閣僚の一人たることを期してゐた。

而して東京からも井上若くは井上の意を承けて、青木などから、頻りに歸國を促し來つた。それで彼は明治二十三年一月、日本に歸り來つた。彼の米國滯在は一年有半で二年には滿なかつたと思ふ。然るに歸つて見れば、山縣內閣は立派に出來揃つてゐて、陸奥の据るべき半席の椅子も無つた。陸奥の不平や知るべしである。その時分に予は屢〻陸奥に面會したが、固より予には詳しきことを話しもせず、予も聽きもしなかつたが、彼の胸中滿々たる不平だけは、明白に看取せられた。

陸奥の農商務大臣就任

當時彼には二つの方法があつた。第一はその儘米國に歸るか。第二は當時の所謂る政黨に加入して、公然藩閥の相手となるか。當時板垣は昔の愛國公黨なるものを再興し、頻りに陸奥を迎へんとしつゝあり。又た大阪方面に於ても、中島信行や、其他彼に緣故ある者が、頻りに彼を誘ひつゝあつたから、彼はその方に足を入れゝば、忽ち野黨の首領になることは、間違ひなかつた。

併し山縣としては、切角味方に引入れて、彼を以つて政黨に衝らしめんとする積りであつたから、その漢が却て敵の大將となつて、攻め來るなどゝいふことは、彼としても愉快のことではなかつた。そこで平生瘦せてゐる山縣が、更に一層瘦せるほど、此事に心配した。山縣が直面すべき帝國議會の開設は時々刻々に迫り來つた。

陸奥はどこまでも山縣に食言を詰り、その實行を迫つた。山縣は慰諭する道を考へたが、陸奥はなか〳〵一歩も讓らなかつた。ところが仕合せにも、五月になつて、農商務大臣岩村通俊が、病の爲に辭することゝなつた。それを好き潮合として、內閣改造を企て、陸奥も五月十七日、愈愈農商務大臣に就任した。同時に榎本武揚が去つて、芳川顯正が文部大臣となつた。

當時陸奥は不平の餘り、上方に旅行し、その取巻く子分と與に、舟を宇治川に泛べて、例の通りの調子で、はしやいでゐた。舟が伏見に下つて、豐後橋の上から『東京からの電報』と叫ぶのを、受取つて見れば、愈々大臣就任の吉報であつたといふことを聽いた。

陸奥は家はあつたが、何時でも亞米利加に歸へることの出來る樣に、家に歸へらず、例の鹿鳴館に宿をとつてゐて、大臣になるや否や、其宅に歸つたものであるから、予が彼を訪問した時に

は、夜に入つて尙ほ未だ電燈の設備さへ出來てゐなかつた。當時次官であつた前田正名が飛んで陸奥の所に來り、その進退に就いて、陸奥と話合をしてゐた樣である。

陸奥と金錢

陸奥は大臣となつても、尙ほ議會のことは忘れず、遂に和歌山縣から選出せられて、代議士となつた。その時分自ら『和歌山縣の一平民』と名乘つて『國民之友』に投書をしたこともあつた。話をすれば限り無いが、只だ予と彼との交遊だけに就いて一言する。彼はその詩に於ても自ら

祇愛二杯酒一不レ愛レ錢。

と云つた通り、杯酒そのものは兎も角、錢を愛さなかつたことだけは、間違ひ無つた。花柳界では彼のことを『くれさうでくれぬはむつの金』と唄つたさうだが、彼は美人に對してはいざ知らず、世の志士に對しては氣持よく散じた。彼自身の財嚢が重かつたとは思へなかつたが、金を出すことは、何等遲疑しなかつた。彼が洋行する前には、同志社にも寄附をして行つたが、併し

それは何か彼に思ふところがあつたと見えて匿名としてゐた。固より澤山の金でなく、三百圓位と覺えてゐる。併し當時の彼としては、先づ奮發と云つても宜からう。

又た歸朝後、予は予の郷里の有志者、某々等の爲に金策を頼まれ、已むを得ず彼に相談したところ、彼は直ちにそれを用立てた。予自身は彼に何等金錢上に負ふところは無かつたが、併し彼は予に對しても尠く共好意を表し、引立つる積りでゐたには相違ないと信じてゐる。但だ予自身が彼に對して何等酬ゆることの無つたのは寔に遺憾であるが、一寸の蟲にも五分の魂で、彼には彼の了見があり、予には予の了見があつて、詭隨曲從することが出來ぬと、解釋するの外はあるまい。

彼は井上や松方などゝ違つて、理財のことには左程心を留めなかつた。伊藤ほどであつたかは知らぬが、兎も角もあまり頓著しなかつた樣だ。併し彼の側近及び背後には若干の資本家が存してゐた。例へば今村清之助の如き、古河市兵衛の如き、その他にも若干ある樣だ。彼等がいくばく程度に奉仕したか知らぬが、彼自身は金錢に屈託したこともなければ、困窮したこともなかつた。但だ彼が入獄中遺族が若干困つてゐただけのことはあつた樣だが、それもほんの暫くの間で

あつたらうと思はるゝ。彼は兎も角もその方にかけては、仕合せ者であつた。彼は常に『坂本龍馬が双刀を取上げて飯の食へる者は予と陸奥だけである』と云つたといふことを、得意として屡屡話した。その方にかけても、彼の才智を用ふれば成功したに相違あるまいが、彼は何よりも政治専門であつた様だ。

松方内閣に於ける陸奥品川の對立

山縣內閣の時に彼がどれ程骨を折つたかは知らぬが、第一議會の時に、政府と議會とが對立したる場合、當時の所謂る土佐派の裏切りによつて、遂に妥協案が成立ち、中江兆民をして『無血蟲』の文を草せしめ、遂に憤然として議席を擲ち去らしめたことには、彼の手が果してどれ程及んでゐるか判らぬが、尠く共彼は相當の働きをしたに相違あるまい。

それ等のことは予自身としては、甚だ不愉快に思うたところがあつた。然るに山縣內閣が代り、第一次松方內閣の時に至り、癒て內閣內には品川、陸奥の對立を見た。

これは予一個の考かも知れぬが、品川と陸奥とは、その容貌から氣質までがどとやら似通つてゐた樣である。然るに兩人が對立するといふことは意外の樣であるが、その似通つたるところが、却て對立する所以ではなかつたかと思ふ。

序ながら一言するが、或る意味に於ては陸奥と井上毅とも亦、その肺病やみで瘦せて神經質で政治好きで議論好きであるところは、どとやら似通つたところがある。

それは兎も角、品川の後には白根專一なる者があり、陸奥の後には何者がある必要もなく、彼一人で切廻したものである。但だその頃は彼と伊東巳代治とは良好の關係があつて、互に持ちつ持たれつしてゐたのではなからうかと思ふ。これは只だ予の想像である。陸奥は松方內閣の所謂る政務參謀總長を以て任ずるつもりであつたところが、言葉では兎も角も、心の中では品川が陸奥蠻の指揮命令を受けて動くものかといふ考があつて、容易に承知出來なかつた。而して事實には二人の政務參謀總長對立の姿となつて、松方の手では如何とも爲し難くなつた。

文治派と武斷派

ところが品川の方には、内務省なる堅城があり、その下には次官として白根專一あり、遂に思ひ切つた大干涉を行つた。これに對して陸奧の不平や知るべきである。當時予と陸奧との交際は再び親密になり、陸奧によつて内閣のことは手にとる如く、明かになつて來た。武斷派、文治派といふ文句は、誰が發明したか判らぬが、尠く共陸奧は予の爲に、松方内閣の武斷派、文治派を分類して、それ〴〵予に話してくれた。當時の『國民新聞』が、政治ニユースに於て、他を凌駕することの出來たのは、半ば以上陸奧の力と云はねばならぬ。同時に予は首相松方とは、政治以外個人としては、予の父以來の交際であつて、常に往來したが、併し別段政治上のことに就いて、彼是れ論議することがなかつた。只だ餘り痛快に『國民新聞』で内閣の内幕を暴くから、知らぬ顏して松方に面會する時に、何んだか氣が咎めないこともなかつたが、これも新聞記者の職務であると思つて、表面だけは平氣の顏をしてゐた。

陸奥外相となる

それから陸奥はやがて辭職し、樞密顧問の閑職となつて以來は、帝國ホテルを出張所として、毎日ホテルに出掛けて來。ランドルフ・チヤーチルの演說集などを、背廣のポケツトに入れて、それを長椅子によりかゝつて讀みつゝあつたが、屢ゝ電話をかけて、予を話相手に招いたことがあつた。

その當時彼は必死に伊藤內閣の建立を骨折つてゐたが、なか〳〵伊藤が容易に尻を上げず、偶ま彼の獻策を容れたかと思へば、彼が小田原から東京に著く前には、電報でそれを取消すなどのことがあつて、陸奥はそのことを予に告げて『困つた』などゝ云つたこともある。當時伊藤は小田原の滄浪閣に住居してゐて、小田原までの交通も、今日ほどの便利はなかつた。

併し陸奥は伊藤を動すには、巳代治を動かすに若くはないと考へ、謂はゞ人を射ば馬を射よの譬の通り、巳代治に向つて、頻りに働きかけてゐた樣である。

扨て愈よ伊藤内閣の出來る時には、陸奥は電話で伊藤に呼ばれて『これから君を外務大臣に推薦する』といふを聽き、西ケ原の邸まで禮服を取寄せることが出來ず、手近かにゐた岡崎邦輔のを借用して、親任式に出掛けたといふことである。彼にとつては正に得意の天地が開ける時節が到來した譯である。

陸奥と原敬

此で少しく挿話に入る。それは彼と原敬との關係である。予は原敬に就いては、豫備知識といふものが若干あつた。彼が報知新聞記者となり、それから渡邊浩基に作つて、全國を行脚したこと。而して彼は政府黨の新聞『大東日報』の主筆として、大阪で筆を執つてゐたといふことなどである。

其後彼は外務省に入り、而して農商務省に入つて、多分岩村の祕書官をしてゐたのであつて、陸奥はその儘岩村から祕書官を譲り受けたのではなかつたかと思ふ。予と陸奥と話をする時に、

原敬が例の人を喰つた樣た調子で入つて來た。予は又た例によつて話を中止したが、陸奥は『關まはない。話し給へ』と云つて、予に談話を續くることを促した。

而して曾つて陸奥が予に語つて云ふには『原敬は實に奇特の漢である。予は彼と從來何等の緣故もなかつた。只だ農商務省に入つて予の秘書官となつてゐたに過ぎない。ところが予が農商務省を辭むる時に、原敬が予に來つて云ふには「私も是非一緒にやめたい。と云ふのは隨分私もあなたに我儘を致しましたが、それでもよく私を信任して、使つて吳れられた。あなたの在職中は、あなたの印判を私が預つて、あなたに代つてそれを使用した程でありますから、隨分私が橫暴であるとて、恨みを買つたことも少くなかつたらうと思ひます。兎に角、理窟は拔にして私も辭めさせて貰ひたい」とて、彼は遂に予の慰諭を聽かず、辭めた。又た曾つて「近頃閑暇になつて、獵をしたから」とて、取つて來た鴨か何かを予に贈つて吳れた。彼はなか〳〵見掛けによらぬ氣骨のある人間で、賴母敷き漢である。』と話した。

それで予も初めて原敬が何者であり、又た何者として陸奥が原を買つたかを知ることが出來た。兎に角陸奥の農商務省に於ける收穫は、原敬を見出したことが、その主なる一であつたかも知

れぬ。

陸奥士を愛す

又た陸奥に最も感んずべきは、士を愛することであつた。愛するといふことは、只だ人間を愛するといふ意味でなく、役に立つ者を愛するといふ意味である。彼の門下には澤山の人が出てゐる。虎の如き星亨も、彼の前には殆んど猫に幾かつた。島田三郎なども、彼の門下の一人である。但だ小村などは外務省にゐながら、遂に彼の爲に大いに驥足を展ぶることが出來なかつた。曾つて外務省で原が朝鮮に赴く送別會があつた時に、談話が紡績の話になるや、飜譯局長であつた小村が、混々滔々として紡績の話をして、一座を煙に卷いた。

陸奥が『どうして君は紡績のことを知つてゐるのか』と問うたところ、小村が答へて『私は何んでも知つてゐます。若しあなたが、此にゐる原敬君ほど私を用ひたならば、私も相當の働きを致します』と云つた相であるが、實は小村は內職に紡績に關する飜譯を引受けてゐたので、よく

その事を知つてゐたといふことである。これは直接小村から聽いた話である。ところが彼もやがては代理公使として支那にやられ、それから日淸戰爭となり、追〻彼の運が開いて來た。

第二次伊藤內閣と六派聯合

第二次伊藤內閣時代に於ける陸奥は、漸次予と離れて行つた。と云ふのは、予は陸奥と離るべき何等の理由も無つたが、伊藤首相と自らその意見を異にする如く感んじ。伊藤內閣そのものの政策が氣に入らなかつた爲に、自然その中の主なる役者である陸奥とも、疎遠にならざるを得なかつた。

その中に所謂對外自主運動なるものが起り、六派聯合などが出來たから、陸奥とは愈〻正面衝突を爲して、敵、味方といふ樣な立場に立たざるを得なかつたのは、今から考へて見て、固より公事の問題にして、何等その間に私情の加つた譯ではなかつたが、只だ從來の行掛りから考へて見れば、最も遺憾とするところである。これは陸奥一個ではない。豫て懇親を忝くしてゐた

西園寺公などゝも同樣である。ところが西園寺公とは、明治二十九年巴里に於て出會し、それから又た舊交を復する機會を得たが、陸奥とは遂にその機會が無つた。

陸奥と交友

陸奥は士を愛したが、果して大隈ほどの雅量を有つてゐたか否かは、疑問である。恩仇分明といふ言葉があるが、恩は兎も角、仇はなか〳〵分明であつた。彼は紀州德川家に對しては徹頭徹尾不遜の態度を立て通した。維新の當初に於ても、彼は紀州德川家に對しては、恨みこそあれ、恩は無きものとして、その祿を食むことを屑しとしなかつた。それは彼の父が紀州家から排斥せられ、彼の一家は不幸に遭遇したからである。

彼が入獄以來、紀州德川家が、彼の遺族に對する態度の冷酷なるといふことが、又た彼には非常に癪に障はり、恐らくはそれを以て一生の遺恨とは云はぬが、遺憾としてゐたではないかと思ふ。それ程執著心があつたから、來る者は拒まず去る者は追はずなどゝいふことは、彼には恐ら

く出來なかつたではないかと思ふ。

役に立つと思ふ者は、よく世話を焼いたが、役に立たぬと思へば、これを顧るほどの餘裕を有たなかつた。此點現金と云へば、現金でないこともない。併しこれは事功を專らとする政治家としては、已むを得ないことであらう。

青木周藏、伊東巳代治などは又た彼からそれ／＼彼流儀の待遇を受けたものらしい。井上全盛時代には、陸奥は殆んど青木の爲に、犬馬の勞を取ることも辭せなかつた。兎に角青木には一桁も二桁も讓つてゐた。ところが陸奥が外務大臣となつて以來、青木は例の通り昔ながらの陸奥と思うて、彼是れ在外使臣として本省の大臣に逆に訓令を下す如き、非常識のことをしたが、それに對して陸奥も亦た相當手緊しくやりつけた。

巳代治なども彼が伊藤と相識るまでには、隨分骨を折らせたが、いざいよ／＼伊藤を手に入れてからは、巳代治は却つて邪魔者となり、殆んで閑却し去つた。そこで人一倍勘定高き巳代治が默つてゐる筈がない。その爲陸奥の『蹇蹇錄』なども、巳代治はこれを『不蹇蹇錄』などゝ云つて惡口したといふことを聞いた。

それは兎も角、彼の『蹇蹇錄』は、日清戰役に於ける、彼の覺え帳と云はんか、回顧錄と云はんか、辯疏錄と云はんか、自賛記と云はんか、何れにしても史家の見逃し難き文書であることは、尙ほ壬辰の役に於ける柳成龍の『懲毖錄』と趣を同くすることが出來ると云へよう。斯る文書は明治政府あつて以來、何人も書かず、又た書くことの出來ない重要文書であることは、今更ら疑を容れない。これを見ても陸奥が如何なる漢であつたかゞ思ひやらるゝ。

策士としての陸奥

彼は大策にも長じたが、小策にも長じてゐた。松方內閣の時に、露國皇太子事變が起り、その爲に太子に斬り付けたる巡査津田三藏なるものゝ刑事問題が、大葛藤を生じた。卽ち一方ではこれを死刑にすべしと云ひ、他方では死刑にすべからずと云ひ、すつたもんだの最中で、當時の內閣は勿論、閣外の元老も困却し切つた。その時閣僚の一人たる陸奥は、後藤象二郎と共に、『左程手數をかけることもあるまい。誰か人をやつて津田を刺殺せば、それで問題は解決するではない

か』と云つたさうである。隨分振つた論であるが、彼はその位のことは云ひ兼ねない漢であつた。山縣は曾つて彼を大臣に推薦する時に、『此者は危險人物でありますけれ共、臣が監督を致しますから、決して聖慮を煩はし奉る樣のことはありませぬ』と申上げたさうであるが、山縣としては斯く申上げたであらうと思はるゝ理由も鮮くない。伊藤は陸奥に向つて、『山縣は斯く申上げたさうであるが、予は決して左樣のことを申上げて推薦したのではない』と理わつたと云ふ。

ところが陸奥は伊藤に意見を持込むには、大概初から行ふべからざることを第一策となし、順次に行ひ得べきことを第三條以下に置き、最初に先づ第一策を出して、伊藤に思ふ存分それを叩き破らせ、次に第二策を出して、更らにこれを叩かせ、第三策に至つて伊藤も『それでは宜からう』といふ樣な方法を執つてゐたと云ふことである。併し果してその通りであつたかどうかは知らぬ。

彼の最期

彼は漢學の素養もあつて、在獄中には『左傳』から辭令を集めて、一種の外交用文書の典例を示してゐるほどであるから、韓非子の『說難』位はよく讀んでゐたに相違ない。何れにしても彼は珍らしき漢であつた。

彼が肺病であることは、入獄以前からであつたかも知れぬ。予が初めて逢つた頃でも、彼は衣に勝へざるほど瘦せてゐた。而して彼は座談の際にも、往々藥用し、何やら藥をよく飮んだことを見受けた。而して『俺が死ぬ時はこれで死ぬのだ』と云ふ樣な話もした。

彼の容貌はなか〳〵立派であつたが、どこやら狼顏、豹頭とでも云ふべき印象があつた。予が明治三十年六月外國から歸朝する時には、彼は既に病臥の人であつた。而してその病漸するを聞き、予は西ケ原の彼の邸に見舞に赴いた。併し岡崎邦輔などの意見で、『切角見舞はれたが、今ま君が面會しては、病人が昂奮して、いよ〳〵病勢を昂進せしむる虞があるから、どうぞ遠慮してくれ』とのことであつて、予も餘儀なくその儘立歸つた。

後で聞けば『德富に逢へば一議論せねばならぬ。德富ほどの譯の分つた漢が、攘夷家などゝ一緒になつて、騷ぎ廻るなどゝは怪しからぬことである』と云つてゐたさうである。それは予が六

派聯合の仲間の一人として、彼の外交政策に反對した爲であらうと思ふ。
何れにしても最後に今一度面會して見たらば、互に意思の疏通も出來たであらうと思ふが、
それが出來なかつたことは、彼としては兎も角も、予自身に於ては甚だ遺憾に思つてゐる。

遠近より見たる
勝海舟

遠方から見たる勝海舟先生

勝海舟といへば、竹中半兵衛も、本多佐渡守も、殆んど同樣の如き、歷史の遠方に隱れてゐる人物であるかの如く、現代人は考へてゐる。それも無理はない。予自身でさへも明治十三四年頃は、先生を生ける人間よりも、寧ろ逝ける人物として、眺めてゐたほどであつた。

勝先生は橫井小楠とは知己の間柄であつた。左程親しく交際もしてゐなかつた樣であるが、互に相許す間柄であつた。そこで橫井門下の士は、勝先生の神戶の海軍塾に入學したる者もあり、特に先生の二姪、橫井左平太、同じく大平の兩人は、親しく先生の門に就いて、敎を受けてゐた程であつた。

予の父は橫井小楠の門下であるばかりでなく、予の一家及び親類を擧げて、その通りであり。又た先生の夫人と予の母とは同胞であるからして、橫井先生に就いては固より親近の間柄であり、從つて勝先生のことは、子供の時からよく話を聞いてゐた。しかのみならず、維新の當初、明治

二三年の交、予の父は靜岡に勝先生を訪ひ、先生の手許にある、種々の書類を謄寫し、且又た先生よりその揮毫などを頂いて歸つたことがある。

その中には山岡鐵舟居士が、骸骨を描き、勝先生がそれに贊をしたものがある。その贊は

世の中は浮べる雲のあともなく
　消ゆるのみこそまことなりける

といふ歌であつた。又た他の一幅は、『深沈重厚是第一等資質。磊落雄豪是第二等資質。聰明才辯是第三等資質』

と書いたものもあつた。其時からして予は勝先生は、所謂る第三等の資質ではあるまいかと、生意氣ながら竊に思うてゐた。

四十歳を隔てたる海舟先生と予

又た明治九年以來、予は京都同志社在學中、常に新島先生の宅を叩いたが、その應接間には何

時も勝先生の額が掲つてゐた。それは新島先生も餘程その高風を欽慕してをられたものと思ふ。從つて予は勝先生に就いては、面會せざる前から豫備智識は澤山有つてゐた。明治十五年頃、父より書簡を托せられ、肥後球磨川産の龍領石にて作りたる小硯を呈上すべく、氷川の勝邸に赴いたところ、先生はその返禮といふ意味でもあつたか、揮毫二三枚を賜つた。若し予が面會を願つたら、無論許されたであらうが、その時分までは、先生は昔の人と考へて、自分達には寧ろ沒交渉であるといふ了見であつたから、その儘で引下つた。

ところが明治十九年來、家を携へて上京し、赤坂榎坂町に住むことになり、先生の氷川とは、單だ南部坂を隔てたるまでゞあつた。のみならず、予の妻は先生の令息梶梅太郎氏の夫人、米國出生のクララ女史に就いて、英語を學ぶことゝなり。予も亦た何やら勝先生に近付きたい樣な氣持になり、遂に親しく先生と相見る樣になつたのは、多分明治二十年以後、予が二十五六歲の頃であり、先生は六十五六歲の頃であつたと思ふ。

要するに予と先生とは、年齡に於ては四十年の距離がある。四十年と云へば、子といふよりも、寧ろ孫とも云ふべきものであらう。

近く見たる勝海舟先生

當時勝先生の家は、赤坂氷川町の一角を占めてゐた。而して先生の家には、先生の長女の嫁したる内田氏や、次女の嫁したる疋田氏などが、各々家を有つてゐた。疋田氏にはまだその夫婿があつたが、内田氏は寡婦で、専ら勝家の内政を、勝老夫人を援けて、經營してをられた。予はやがて榎坂町から、氷川町なる内田夫人の借家に住むこととなり、特にその好意によつて、別に予の父母の爲に一棟を新築して貸與せらるることになつた。而してやがてはその附近に予の弟蘆花も亦た住むこととなつた。

ところが予の借家と勝家とは、背中合せにて、予が書齋は先生の書齋と殆んど相接し、予の書齋からして、先生がどてらを著、裾を端折つて庭に出られたる姿さへも見ることが出來るほど、接近してゐた。尤も先生は滅多に庭には出られなかつたが。而して大聲を放てば、予の書齋の談話は、先生の書齋に聞ゆる位であつた。

或時などは壯士が予の宅に亂入せんとしつゝあるから、予の妻は不在と云つてこれを追ひ歸した。ところが偶ま予が入浴して風呂の中から大聲に妻と談話を交へたるところ、旣に去りたりと覺えたる壯士等は、門外に尙ほ佇んでゐたと見え、とつて返して戶を破らんばかりに叩き、『主人はゐるではないか、開けろ〳〵』と、なか〳〵騷がしき狀態であつた。そこで予は風呂より上り、浴衣を著て、その儘先生の別當の室に赴き、炬燵に入つて寢てゐたところ、予の家の者共は、予が紛失したとて、探し廻り、漸くそれを發見し、大笑となつたほどである。

それを見ても、名義は兎も角、事實に於ては予は勝先生の邸內に、帝國議會開設前から、日淸戰役後、予が洋行する迄、居住してゐたと云ふことが出來る。從つて予と先生との間は、愈よ親近を加へて來た。事實を云へば、加へねばならぬ次第となつて來た。

海舟書屋に於ける先生

勝先生の家の憲法とでも云はうか、殆んど來る者を拒んだことがなかつた。門前拂ひなどゝい

ふことは、予自身は未だ會つて經驗したことがないが、他の人も皆な同樣であらうと思ふ。予が面會した頃は、先生は樞密顧問官であつたと思ふが、固より滅多に出勤せらるゝことがない樣に承つてゐた。然も客は實に門前市をなすほどであつて、然もその客種の千差萬別なるには、何人も驚かぬ者はなかつた。

然るに先生は悉くこれを一室に引き、銘々に對してそれ〴〵應接せられてゐた。されば先生に向つて内緒話をせんとする者には、聊か當惑に感んずる向きもあつたであらう。同時に苟くも聽く耳さへ有つてゐる者は、思ひ掛けなき面白き話を拾つて歸る者も鮮くなかつた。如何に先生の門戸が廣かつたかと云ふことは、谷干城將軍の日記を見ても判る。

明治二十二年十二月

同十七日（中略）午後より勝氏に行く。初めて德富猪一郎なる者に會す。民友記者にして、有爲の少年なり。四海兄弟主義の耶蘇信者なり。勝氏の門の廣き事驚くべし。島津公派の古流も來り、改進黨も來る。自由黨も來る。現今の官吏も來る。得意家も不平家も異種類として來らざるなし。奇と云ふべし。勝氏亡友錄三部を余に贈る。日暮歸る。

當時盛んに藩閥攻擊の急先鋒として、常に改革論を主張し、谷將軍等の保守主義を攻擊したる予が、谷將軍より賞めらるべき筈はない。されば谷將軍が予に就いて書いたところは姑らく措き、『得意家も不平家も異種類として來らざるなし。奇と云ふべし』と書いてゐるが、卽ちその不平家である谷將軍自身も、來てゐることを以つて、如何にその門戶が廣かつたかゞ判る。

それと同時に先生は天下の大政治家でも、一介の書生でも、その待遇には別段の差等を爲さなかつた。全くとは云はぬが、殆んど無差別的に待遇した。先生の海舟書屋に於ける態度と風采とは、曾つて予が書いたるものがあるから、それを茲に揭ぐることゝする。

予が先生と相見たのは、先生六十歲以後であり、壯年の英氣颯爽たる當時は、單に想像するに止まるが、先生は立てば小兵で、別段偉丈夫らしく見えぬが、但だ五尺の短身總てエネルギーと云ふべきもので、何處ともあれ、手を觸るれば、忽ち火花を飛ばす如き心地がした。古人の所謂る等閑觸著火星飛とは此事であらう。顏は赭色を帶び、眼は小さくて窪み、額は廣く秀で、疎々たる髭鬚を帶び、如何にも食へない親爺であることは、一見直ちに諒解せられ、而してその唇の動く處、冷嘲熱罵、自然に迸り出るの槪があつた。先生は必らずしも人を正

面に見て話なかつたが、時々顔を眺めらるゝと、その奥深く潛んだる小さい眼の玉が飛出して、我等の腹の底に喰ひ入る樣な心地がし、殆んど全身が竦む樣に覺えた。

予は未だ曾つて先生が正面から人を叱りつけたことは見たこともなく、聞いたこともなかつたが、その上げたり、下げたり、人をひやかすことの辛辣手段に至つては、如何なる傑僧の毒語、虐舌も及ぶ所ではあるまいと思うた。されば先生と對座して數時間を經れば、別段此方からしやべること無きも、恰も取的が大關に打突かる樣なものであり、又た初心の擊劍使ひが塚原卜傳と仕合でもする樣に、精神的に非常なる疲勞を覺えた。即ち先生の微言零語が、如何なる滲透力を持つてゐたかゞ、今からでも追想せらるゝ。

先生の海舟書屋は、氷川邸の最奥の長方形の一室で、楣間には隷書で、佐久間象山の書いた、『海舟書屋』の額が掲つてゐた。先生の左右には書類が堆高く、時としては殆んど頭を沒せんばかりにあり。先生は前に行火か手炉燵の如きものを控へて据り、來客は順々に、殆んど區別なく、そこに引見せられ、時としては敵も味方も同席する場合が鮮くなかつた。而して食時になれば、先生もそこで食事を爲し、客にも同時に勸められた。應接間には椅子やテーブルを並

べてあつたが、それは公式の場合、公式の客でなければ、滅多に使用されなかつた。海舟書屋は右申す通りの一室にて、謂はゞ鴨長明の方丈室にも比すべきものであつたが、凡有るものがそこに集り、又た凡有るものがそこから散じて行つた。先生の室は來る者は拒まず、行く者は追はずで、滅多に送迎されたのを見たことがなかつた。然も人々は十分得るだけのものを得て、滿腹して歸つた。

女性の祕書官長

これも亦た勝家の憲法であつたらうが、勝家の用務は悉く皆な女性がこれを辨じてゐた。昔は兎も角も、予等が知り得る限りに於ては、勝家には所謂玄關番とか、書生とかは居なかつた。執事は居たが、それはほんの外廻りの人にて、眞の執事は我等が所謂『お糸さん』であつた。お糸さんは中老の婦人であつて、勝先生を中心とする、所謂座敷向きの用務に服する、一切の取締りであり、監督者であり、又た先生の祕書官長でもあつた。先生は何事も『おい糸』と、

お糸さんを呼んだ。書類の詮索でも、揮毫の補助でも、凡有る仕事はお糸さんがやり、又たお糸さんの指圖にて、他の若き女性達がやつた。

それで勝家の木戸御免の連中でも、何人でも、お糸さんに頭の上る者はなかつた。奈良原繁と云へば伏見寺田屋で素晴らしき働きをした薩摩の老雄だ。その奈良原が勝家に到れば、お糸さんに常に會釋をしてゐた。お糸さんは別に我等にとつては、何等その特色を認め得なかつたが、勝先生の左右に侍して、先生をして遺憾なからしめた點から考察すれば、此の婦人も並み大抵の人では無かつたであらうと思ふ。

誰でも先生に面會すれば、一度は度膽を抜れた。先生は何人に對しても、出逢ひ頭に眞拳毒手を無遠慮に下した。それで引下る者であれば、それで濟むが、それを辛抱して尚ほ先生の誨を聽かんとする者には、先生も亦た『竪子教ふ可し』として、必らず親切、丁寧に、手を取らんばかりに教へ導いてくれた。

予も正直のところ、幾度か先生の一喝に逢はんことを、恐れ、憚り、訪問を躊躇したが、思切つて虎穴に入るの決心を以つて、先生と相見たる後は、寧ろその決心の遅かつたことを、後悔し

た程であつた。先生がその身邊に婦人のみを使用した事は、維新前後、暴客刺客、凡有る難物が先生を圍繞するの際に、柔よく剛を制するの妙機を心得てゐられた爲であらうかとも察せらるゝ。

海舟先生の談話

予の眼に映ずる先生は、實に渾身これ慈悲であつた。これが評判に聞いた、惡罵冷嘲の勝海舟とは思へない程であつた。併し先生は必らず出逢ひ頭に人をからかふ癖があつた。一度び先生の口で調戲せられては、居ても立つても、たまらない様な氣持がした。併しそれを辛抱すれば、まるで變つた世界が展開して來た。それで先生に面會することは、見識開發と云はんよりも、寧ろ擊劍家や柔道家が、その師に就いて學ぶ如く、又たこれ一個の精神的訓練であつた。

先生は恰も猫が小鼠を玩具とする如く、我等を勝手次第に引ずり廻した。それで先生に面會して門を出る時には、ホツト溜息をつくことが、殆んど例であつた。それ程まで我等は先生から鉗槌を加へられたのであつたが、その根柢は即ち老婆親切であつた。その器を長じ、その才を成さ

んとするの慈悲心に外ならなかつた。
先生の口調は全く江戸辯で、たまには巻舌となり、べらんめい的ともなつた。然も先生には先生の獨自一己の口調があつて、只だ江戸ツ兒の歯切れのよい、梨でも嚙む如きサク／＼したばかりではなかつた。先生は人に物を語る時には、必らず念を押した。尠く共その相手に受け答へのあるまでは話した。話題は此方から一つ出せば、それからそれへと話が續いて行き、十も二十も、殆んど盡くる所無く出で來つた。

それで先生の話をよく聽く根氣さへあれば、先生の座に在つて何時間座つても、決して手持ち無沙汰の心配は無つた。同じ談話でも、大隈の談話は演説であり、伊藤の談話は講義であつたが、先生の談話は如何にも輕妙にして、續くが如く、斷ずるが如く、時としては突兀として奇峰天外に聳える如きことがあり、時としては山開き谿轉ずる如き妙があつて、とても他人の想像だもすることの出來ぬものであつた。午前九時頃でもあつたらう、一寸先生を訪ねたところ、立ち時を失つて新聞社に出社することも打忘れ、晝の御馳走にもなり、それからそれへと話が續いて、時計を見たら、午後五時であつた。急に立んとしたが、足がしびれて漸く立つたことがある。けれ

共先生も戊辰の話が十八番で、それは度々聽かされた。それで予は竊に『炭ついでまたも戊辰の話かな』と駄句つたことがある。火鉢の火が消えて、又た炭をついで、それから更に又た先生は悠々と得意の十八番を語り初められたことを意味するのだ。今から思へば恐入つた次第である。

偶ま先生に議論でも吹き掛くる者があれば、決して正面からそれを論駁するなどの野暮くさいことをせず、意表の答辯を得て、自ら赤面せずんば、をかしくて吹き出さねばならぬ様なことになつた。先生は、禪家の機鋒をよく得てゐたものと思ふ。曾つて渡邊國武が歳晩先生を叩いた時に、『快馬一鞭叩二柴扉一。清談半日客忘レ歸。從知是々非々外。別有三淵原關二大機一』といふ詩を示したことがあるが、寔にその通りである。

勝先生の忠告

曾つて明治二十四年頃であつたか、予は殆んど瀕死の病に罹り、醫者の手でもなかなかゆかぬといふことであつて、予の父も大いに心配し、勝先生に相談に行つたところ、先生が『よしよし

俺が治してやる。それはあまり當人が國事を憂へて、餘計な心配をするからのことである。それで頭の熱を足の踵まで下ぐれば、きつとよくなるに相違ない。而して邪氣を拂ふには、これに限る』とて、一包の硫黄と、一幅の書を賜つた。硫黄はそれを燻して、室內の空氣を淸淨にすることであり、書は今申した通り、予の逆上病を退治する、頂門の鐵針であり、左の通りの文句であつた。

年々億萬慮。總是盲想。放二下其盲一以二精神一措二其足心一。是氣血循環之淸涼法也。

辛卯晩秋　海舟禪師

卽ち故らに海舟禪師と書いてあつたが、これは今も尙ほ予が珍藏してゐる。而して左の一書は明治二十九年予が餘りに時事を憂へて煩悶したる際に、先生が特に予に與へられたものである。これは長文であるけれ共、如何にも言々予の病所に的中し、先生が予に對する大慈悲心として、難有く感銘してゐるものであるから、今此に掲載することゝする。

承候へば御病氣之旨、老拙も先月中より强く胸痛に而、其後少々愚存も認候處、益腦に感候故、萬事を放擲、論容を謝候故、大に快方に趣き候。貴兄は元來心經質故、餘

り御考慮被成候事は不宜敷、世上之事は議論通りには參不申、當節之如く、一小範圍に汲々し候は、何事も不叶□□論立て事不擧、此境は老拙幕末に實試候て、務て衆人之範圍を脫し、別に一途を開き候事にて、當今は幕末と無二之形勢再び出逢の事と歎息に候。○外交の事は廟堂如何に賢達といへども、烏渡には宜敷出來申間敷、況哉二三十年に於てをや。幾度も挫折し、後終に漸く見るべきに到り可申也。況哉少事に擾ぐは間違、是を責むるも不宜敷、唯唯大事は其人に存す、不然ば後人之事業を餘すに過ぎず、勞して功なき而已。又後生輩今日之小範圍に齷齪するは、敢而不取處なり。當時は大方針之不定故、外侮を受、內に病敗傍議斗にて、其內に兩三年の結果、事實に顯れ來り候ゆへ、如此候事歟、惡結果は是を所置するより他は無之、崇論も無益之事と被存候。其初め拙竊に今日在るを申立も致候處終に及今日候は何とも幽憤に堪不申候。御病中は萬事を放擲、心中無一事、務めて虛心に御なり成され候事、專一と存候。老拙一室中に平臥、小運動も不致候は虛心平氣之助によるもの歟と考候。

事極れば變、今より氣をもみ候樣にては後來將して如何。呉々も心を養ふ事專一と存候。

○凡事は天之降すにあらず、自から求めて苦しむ也。病もまた然る歟。胸中餘容を置き、悠々養ふ所あらば、藥石も功を奏する事速かならむ。筆を執ると議論は、當時大禁物故、唯々見舞旁及餘筆候。頓首。

三月十七日　　安　芳

猪一郎殿

先生が予に向つて『元來心經質故、餘り御考慮被成候事は不宜歟』と云はれたる如き、又た『事極れば變、今より氣をもみ候樣にては、後來將して如何。呉々も心を養ふ事專一と存候』と云ふ如き、如何にも難有き訓戒である。但だ七十五歳の今日迄、自ら顧みて先生の教を奉ずる能はなかつたことを慚るのみである。

勝先生と新島先生

新島先生も勝先生には常に弟子の禮を取つてをられた。先生も亦た勝先生よりかなり忠告を受

けられたが、新島先生の永眠を聞き、當時の同志社の後任者であつた、金森通倫、及び小崎弘道氏と連名にて、予に左の一書を與へられた。

新嶋師遠行の旨爲御知被遣驚入候。兼て師の思慮度に過ぎ、事業盛大を期するに急なる、乍不及御忠告申述候處、此の訃音に接し、遺憾に不堪候。今日行掛の大業、跡々を跡締候は、不可言六ケ敷ものに候間、諸君御深慮有之百難重り到候事と御覺悟專一と存候。小拙是迄艱危の衝に當り、唯々一誠字不撓之心得に而、内外我が負擔するもの悉く矛盾と心得居、漸く廿餘年を經過し、猶如一日の思を成申候次第、後善の策も甚六ケ敷、案外の事も生候もの、右亡師の爲、且諸君へ老朽の一言無腹藏申述候。御聞流可被下候。以上。

勝　安芳

徳富猪一郎
金森　通倫　樣各位
小崎　弘道

これは明治二十三年一月末のことである。如何にも先生の親切には、感激に堪へない。新島先

生はその病軀久しきを持する能はざるが爲に、事業の速成を期するは、止むを得ぬことであつたが、勝先生はそれにも拘らず、常に先生に『あせるな、急ぐな』と忠告してをられた。これは銘銘の立場が違ふからである。且又た新島先生の葬儀に際して、予は特に勝先生に二旒の旗を大書して頂いた。又た新島先生の墓にも、先生の揮毫を乞うた。最近予は京都同志社に於ける講演會に赴き、その序を以つて、若王寺に新島先生の墓を拜したが、勝先生が認められたる『新島襄之墓』といふ文字が、先生としては珍らしく、謹嚴に楷書にて書かれ、又た背面には『悼新島氏之長眠友人勝安芳書之』とある文字を見、當時を憶ひ出して、低徊去る能はざるものがあつた。

故舊に篤き海舟先生

序ながら附加へて置くが、予が明治二十九年の初夏より、世界漫遊に出掛けんとするや、先生は予に送別の歌やら、又た立派な寫眞に文句を書いて與へられた。その歌に曰く『ひんがしも西のくぬちも人の世はまことのほかに道やなからめ』『君ゆかばゆゆきはすれど玉ぼこのちぶりの

神に我も祈らん。』別に餞別として、五十錢、二十錢、十錢等の小銀貨を一包み與へられた。先生は『香港、シンガポールなど東洋の諸港では、日本の銀貨が相應に通用するであらうから、これをチップに使ふが宜からう。チップに多くの金をやることは、不經濟であるから、わざと小銀貨をやる』とて、チップのやり方まで懇切に敎へられた。

又た新島先生歿後、新島夫人が上京するなどの時は、先生は餘り多額ではなかつたが、若干の小遣錢を、予に托して、これを車代として與へられた。

曾つて小楠先生の遺稿を編纂した。これは明治二十一二年の交であつたが、勝先生はこの事にも骨を折られ、その資金なども周旋せられた。その時の書簡が尙ほ存してゐる。

拜啓。時下不順之候、御勇祥と相賀候。扨過日横井氏被參、故先生著書出版之事、云々話御座候間、夫々申談試候處、越前家は旣に百圓持參、右え差出候旨、可然取計吳候樣被話候。從小拙百圓救力可致相約置、兩夜に而貳百圓出來居候間、早々著手の方と存候。

伺候へば貴兄御校正とも相成方御依賴之段、時雄氏被話候故、前件御通知申上置候。同

人の宅不分明に候間、御便も御座候はば御逓之處御頼申上候。頓首。

七月十日　　　　安芳

猪一郎様

これは明治二十二年のことである。此の如くして、先生の周旋にて越前春嶽侯の方よりと、先生の寄附金にて、鮮からず便宜を得た。斯る例は枚擧に遑あらず、山王星ケ岡に横井先生の祭典を營んだ時も、先生は出席せられ、横井舊門下の越前、肥後その他の人々に昔噺をせられた。總て先生の門戸に出入する者は、皆な先生の恩惠に與らぬ者はなかつた。

先生と編纂物

それで予の家に來訪する凡有る來客の、少し面倒なる者は、概して添書を附けて、先生の方に送りやつた。嘗つて先生は予に向つて、『君は怪しからぬことをする。これからは此方より續々君の方に暴ばれ者を送り附くるから、その覺悟をしてゐろ』とからかはれた。併し予の添書を持つ

て先生の門を叩いた者は、恐らくは一人として空手にて歸つた者はあるまい。

先生の家には昔から書留められたる帳簿があつたが、それを一見すれば、先生は意外の人々に、金錢を用立てゝをられる。その額は必らずしも多額とは云はぬが、その恩惠に與つた者の數は、夥しきものであつたと覺えてゐる。『右の手にて施したることは、これを左の手に知らする勿れ』といふ諺があるが、先生も固より人に吹聽せんことを欲するわけではなかつたが、心覺えに記したものであらう。

兎も角も先生ほど筆まめの人はなかつた。先生の傍には祕書官は無用であつた。大概のことは先生自ら筆記し、抄錄し、書留めて置かるゝのであつた。それが積り累つて、大なる編纂ものとなつた。『吹塵錄』とか『開國起源』とか『陸軍歴史』『海軍歴史』などの大部のものも、元は皆なことゝにありと云はねばならぬ。又たそれ等の仕事も幕府の故老にして、失業若くは無業の者をして、幾分なりとも衣食の資を得せしむる爲に、故ら彼等を使用し、その爲に一擧兩得となつた事情がないでもない。

先生には『亡友帖』の外に『流芳遺墨』があり、それに添ふ『追贊一話』があつた。この『流

芳遺墨』や『追賛一話』は予も先生の命を奉じて編輯に手傳つた。而して當時の民友社員人見一太郎、福田和五郎の兩人も予が率ゐてこれに與らしめた。尚その外に福田敬業なども それに與つた様である。これは明治二十三年のことである。その中には予自ら先生の談話を筆記したものも少くない。とにかく先生は書物を編纂することに、鮮らず嗜好を有つてをられた様だ。而して故人の功績をなるべく後世に傳へたいといふことを、その樂しみとしてをられた様である。

世間では先生が山岡鐵舟の手柄を偸んだとか、或は大久保一翁の功を掠めたとか、或は淺田宗伯が平和的解決には、先鞭をつけたとか、種々議論をする者があるが、何んと申しても、曾つて予が詩に『群小不レ知天下計。千秋相對兩英雄』と詠じた通り、全く勝先生と南洲との間に、一切の相談が出來、一切の解決は成立つたものと認むるのが正當である。勿論山岡の膽勇、大久保の德望など、先生の脇師としては、缺くべからざるものであつたが。然も先生あつての山岡、大久保であつて、先生を除却しては、あれ程のことは出來るものではなかつた。

これは幕府そのものばかりでなく、英人なども當時既に先生を起用するに非れば、到底破局を收拾する事は出來ぬといふことに氣がついてゐた様だ。それはサー・アーネスト・サトウが自ら

記するところを見ても明白に判る。

幕府葬儀委員長

勝先生は初から終りまで、大なる多くの敵を有つてゐた。晩年には敵といふほどの者はなくなつたにしろ、先生に對する批評家は、依然存在してゐた。又た所謂る勝嫌ひなる者も存在してゐた。先生は決して運命の寵兒ではなかつた。その嘗つて將軍の子にして、一橋家を嗣ぐべかりし初之丞君の遊び相手となり、これによつて先生の家運が開かんとした一刹那、初之丞君の死去によつて、運命のどん底に落ち、それからそろ〳〵這上るには、一方ならぬ艱苦を凌いだ。たまに這上れば、多くの敵の爲に排擠せられ、斥けられ、所謂る九顚十起の語も、未だこれを形容するに足らぬほどであつた。

然るに幕府の不幸は先生の仕合せとなつて、先生に非ざれば、その跡始末を引受る者無き窮地に陷つて、初めて先生が起用せらるゝことゝなつた。然もそれは愉快なことではなかつた。謂は

ば先生は幕府葬儀委員長とも云ふべき資格であつた。これは役目としては固より困つた役目であつたが、二百六十餘年の德川幕府と、併せて鎌倉覇府以來七百年間に亙る覇府の葬儀委員長としては、寔に歴史上二つ無き役目であつた。

先生は好んで錨を描き、その贊には常に、

かけとめんちびきのいかり綱をなみ
　漂ふ舟の行方知らずも

といふ歌を書かれた。尙ほ先生の歌として予が記憶する中には、

大船の漂ふときはなかく／＼に
　誰を頼みの錨とやせん

といふのもあつた樣だ。

要するに先生は自ら千石船の錨を以て任じてゐた。この千石船は一應の意味では、幕府であるが、廣き意味では日本であつた。

日本中心主義と幕府中心主義

先生の立場は嘉永、安政以來、全く日本中心主義である。從つて幕府中心主義者から見れば、時としては幕府に對して不忠實とか、不親切とか、二心ありとか、野心ありとか思はれたこともあらう。これも亦た止むを得ぬことである。先生は自ら信ずることを行ふに、最も勇なる人であつて、その爲には殆んど一身の利害をも無視してゆかれた。これが先生の幕府に於ける仕途が、屢〻進まんとして、屢〻躓いたる所以であらう。若し先生の知己といふ者があつたならば、夫は幕府に於ては、阿部伊勢守、大名では何んと云つても島津齊彬であり、又た松平春嶽であつた。而して常に先生と共に進退せざるまでも、先生を諒解したる者は、大保久一翁であつたらう。若し先生が心から尊敬したる人ありとせば、その意味、若くは程度に於ては、同一でないまでも、横井小楠と西鄕南洲であつたと思ふ。横井には衷心より敬服してをられた。固より横井が一大經世家とか、一大政治家とかいふことではない。先生も横井が必ずしも大なる實行力の漢とは考へ

てをられなかつた。

けれ共横井の神知靈覺には、舌を巻いてをられた。而して常に横井に物を訊けば、『今日のところでは』といふ條件をつけてゐたことを語り、『今日ではといふことは、明日になれば如何に世の中が變化するかは知るべからざることを證明してゐるものだ』といふことを語つたと云つて、常にそれを我等にも賞讃してをられた。

予等が嘗つて『小楠遺稿』を作る時に、先生は序文を書いて與へられ、その藏せられたる一幅『帝生萬物靈、使之亮天功。所以志趣大。神飛六合中。』を貸與せられた。先生はその序文にも、その詩を錄し『僅々廿字足以窺見先生胸呑五州眼空一世之氣象』といふ贊辭を呈せられ、自ら『弟子海舟勝安芳』と署名せられてゐる。

斯くて先生より貸與せられたる一幅は、久しく予の宅に留め置いてあつたが、漸くそれを携へて返上したところ、先生は殆んどそれが予の手許にあつたことを忘れてをられた樣である。先生長逝の後、幾星霜を經て、それが美術俱樂部で入札に附せらるゝに際し、予は端なくそれを見て、感慨に禁へざるものがあつた。今は誰人の手に屬してゐるか、何とか大切に保存せられたい

ものである。

常に周圍より危險人物視せらる

南洲に就いては、先生は心から感服せられてゐた樣だ。先生自ら記すところによれば、曰く、從古爲邦家に大勳あるもの終に其死處を得し者甚稀也。維新の際大事に任じ、大識を決し、斷然不顧其能に不矜功を不思、洪業成るに當つて、其の瑣事は人に任し、如忘如不知者は予於西鄕氏視之、次之大久保氏、木戶氏あり、共に是一世之雄。然りといへども、西鄕氏に比せば亦降ること數等。兩氏が爲す所非常にして、端倪すべからず。是を以て竊に忌憚せられ、其說反して諸官と不相合。西鄕氏は不然。自ら人を評して云、彼は余に勝れり。彼も亦予の不及所なりと。絕て介意の事無く、其遠識大度豈一世にして窺ひ知るべけむや。

これは南洲城山悲劇の翌年に書かれたものである。如何に先生が南洲に傾倒したるかは、これで判る。同時に小楠も南洲も等しく先生に傾倒してゐたことは、彼等の書簡その他に徵しても疑

ひを容れない。

先生は何れかと云へば、薩摩人とは親しかつたが、長州人にはあまり受けがよくなかつた。それは恐らくは維新の初から大村益次郎の如きは先生が上手く西郷を欺し込んで、これで勝手なことをしたと睨んでをり、而して、勝は油斷のならぬ漢と考へてをり、その爲に長州人は先生に對して、常に警戒したのではあるまいか。それに反して薩摩人は西郷以來、先づそれだけの警戒がなかつたのではないか。併し薩摩人でも、西郷その人さへ、維新の際、勝がパークスなどを使嗾して、細工をする前に、豫じめその手を封じねばならぬとて、パークスに先手を打つたこともあり、又た大久保なども勝のことを、梟雄の資があるなどゝ書いてをるからして、兎に角油斷のならぬ漢とは、誰も考へてゐたかも知れぬ。問題は寧ろその程度であつたかも知れぬ。先生が他より斯く危險視せられたのは、決して先生の美德と云ふことが出來ぬが、併し又た先生が如何に超凡の人であるかはこれを以つても、よく判る。

予は一年の四分の一を、富士山麓に送り、常に先生の作である、

孤峰秀㆓碧旻㆒。觀㆑之可㆑養㆑眞。

擾擾成二何事一。　時危思二偉人一。

といふ詩を誦し、屢々山を觀て先生のことを憶ひ出す。然も今日の如き時勢に對して、特に遠謀深慮の先生のことが憶ひ出さるゝ。

獨自一己の海舟先生

先生は博愛の人であつて、決して小數の子分を周邊に擁して、自ら雄なりとする樣な人でなかつた。何人でも先生に接近出來た。併し先生には好きと嫌ひがあつた。何やら悧恰振る人やら、僞善者の如き者は、餘り好きでは無かつた。又た無暗に强がりの論をする者は、先生の眼からは莫迦らしく、可笑しく思へたと見えて、常に嘲罵の目標となつてゐた。

先生を好まぬ者が多かつた如く、先生自らも亦た好まぬ者が鮮くなかつた。つまり先生は死に抵るまで、決して好々爺ではなかつた。常に一己の見識を有つてゐて、濫りに他に雷同することを欲しなかつた。そこで我志が行はるればよし、行はなければ何時でも退くといふ覺悟があつ

た。世間から見れば大なる妥協家の樣であつたが、その實は狷介不群のところがあつた。若い時には隨分氣六ケ敷く、その左右の者はかなり困り拔いたといふことである。門人などが神戸の在塾中などはお給仕するのに氣に入らぬことがあれば、茶碗ぐるみに投げつけられたと聞いてゐる。

若い時には隨分氣象の激しい人であつたと思ふ。けれ共我等が知つた時の先生には、それほどのことはなかつたが、いざとなれば眼の玉が光つてゐた。時としては口では笑つて、眼から淚が出てゐた樣なこともあつて、聽いてゐる我等には、甘酸ぱい氣がして、何んとも云へない感じに動かされた。

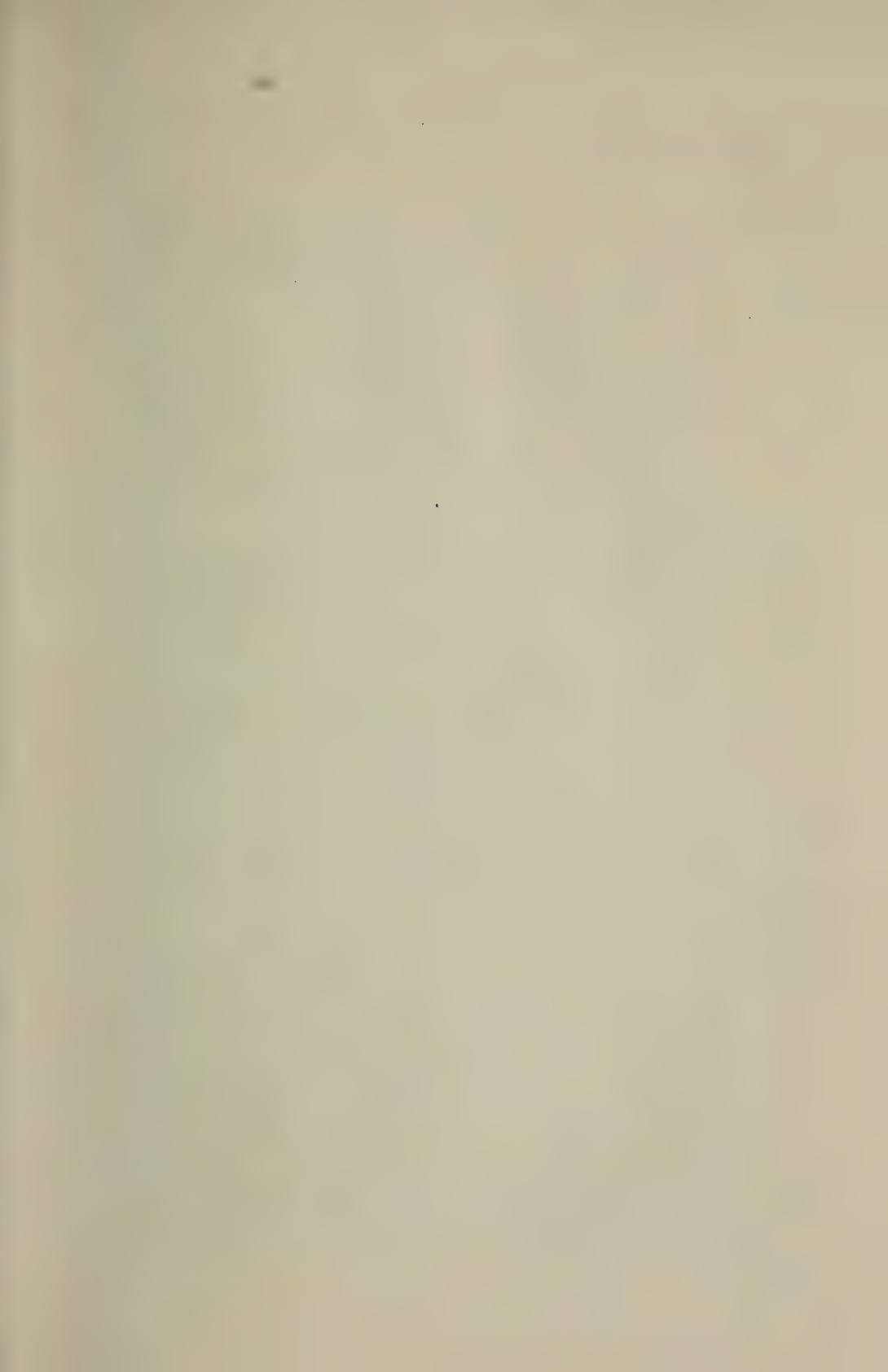
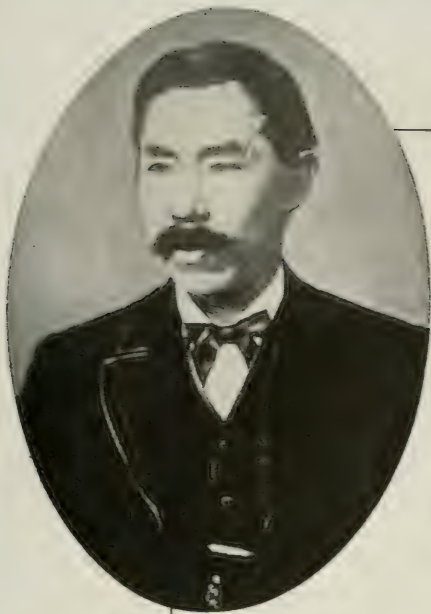
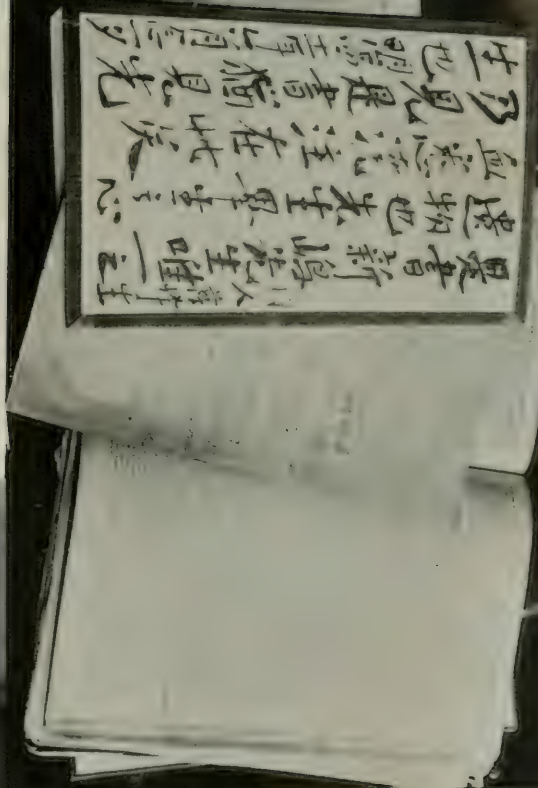
予の父は極めて謹厚の者であつて、謂はゞ正直一途の老學者であつたから、先生は父を尊敬せられざるまでも、愛せられた。先生が父の古稀の時に與へられたる詩に、

德厚古稀叟。　終始只謹恭

膝下有二之子一。　卓爾一蘇峰

といふ絕句がある。後の二句は兎も角も、初の二句は全く吾父の寫眞である。それで先生は何れかと云へば、正直者、律義者を好まれた。併し先生の懷の中には、賭博打ちでも、ごろつきの

親王でも、何でも入るゝことが出來た。

先生は決して羊飼ではない。猛獸を御する動物園の技師であつた。先生は自ら洗足にその墓地を選定し、その石塔の型及びその銘までも自ら認めて遺し置れた。而して先生の伯爵家も先生と與に斷絶し、併せて新に慶喜公の子によつて勝家を嗣ぎ、併せて又た伯爵家を嗣ぐことが出來た。所謂る先生自身としては、『消ゆるのみこそまことなりける』といふことを、全く實行せられたのである。

新島襄先生

新島先生とその筆蹟

著者と新島先生の遺品
上は先生愛用のバイブル

新島先生と予

新島先生を語るのではない。予と新島先生との經緯を語るのである。先生の傳でも無ければ、先生の論でも無い。但だ交友と云ふ言葉は、先生に對しては失禮かも知れぬが、廣き意味に於ての交友として、先生を語るに止まる。

七十六歳の今日になつて、一生のことを考へ廻らせば、平生崎嶇險艱の運命を辿りつゝある予にも亦た、惠まれたる一二のことがある。その中の一と云はんよりも、主なる一は、新島先生と相知るを得たことである。

予が新島先生と相見たるは、明治九年の冬、京都に於てゞあつて、十月の末か十一月初の頃と思ふ。先生と永訣したるは、明治二十三年一月二十三日大磯に於てゞある。先生と交渉したるは、その間足掛け十五年間であり、正味を云へば、十三年である。十三年間は長しと云へば長いが、短しと云へば短い。併し此の期間に於ける先生との交渉が、如何に其後五十年間の予の生涯

に、多大の影響を與へたるか。それを知る者は只だ予一人である。
同時に予はそれを以つて、予の生涯に於ける、大なる幸福の一と認めてゐる。先生と相見たる時には、予が十四歳、先生が三十四歳の時である。先生と相別れたのは、予が二十八歳、先生が四十八歳の時である。予と先生との間には、二十年の距離がある。予は文久三年生れにて、先生は天保十四年の生れである。西暦にすれば、予は一八六三年にて、先生は一八四三年である。此の距離は如何に接近せんとしても、到底接近は出來ない。同時に如何に隔離せんとしても、隔離は出來ない。
新島先生と予と兩人の記憶が存する限り、終古動かすことが出來ない。斯く年齢に於ては、二十年の距離を隔てつゝ、兩人の魂は時としては非常に接近し、時としては稍ゝ隔離したることがあるが、隔離したることは、ほんの當座のことで、接近したることは、終古渝らないものであらうと信ずる。

慶應義塾に赴かず、官學最初の門戸を出づ

予は自分でさへも不思議と思ふほどの旋毛曲りである。本來を云へば、予は當然福澤翁の門下たるべきものであつた。と云ふは、予が生長する頃は、苟くも地方の聊か身分あるものゝ子弟は、十中七八までは慶應義塾を目指して東京へ出掛けた。予の父は親しく福澤翁を知らなかつたが、福澤ファンであつたことは、間違ひない。苟くも當時の進歩者流で、福澤ファンでなかつた者は殆んど無つた。予の少時には、父は福澤翁の『文明論之概略』を、予の宅に壯年の學徒を集めて開講したことがあるのを記憶してゐる。

予の父の弟の一家は、家を擧げて福澤門下であり。その中には翁から特に愛顧せられ、翁の財産を借用してその資格を作り、東京府會議員に選擧されたる者さへあつた。それで予が明治九年十四歳にして東京に出たる際には、當り前ならば、慶應義塾に入學すべきであり、慶應義塾ならば、默つてゐて入學が出來たのである。併し予は斷じて慶應義塾には入らない決心をした。何

故の決心であるかは、今此に明にするほど判つきり覺えてゐないが、そこが所謂旋毛曲りの旋毛曲りである所以であらう。

予の世話を燒く在東京の叔父などは、予が彼是れ異存を云ふのに當惑した樣であつた。それでは當時築地あたりにある、ミツション・スクールなどは、如何であるかといふ樣な話もあつたが、それも好ましくないとて、頭を振つた。そこで種々評議の上、小石川なる中村敬宇先生の同人社に入ることに話が決まり、予も入門の手續を爲し、一寸試驗らしきものを受けたが、此處も氣に入らなくなつて、予の方から御免を蒙つた。

最後に入つたのが、東京英語學校であつた。卽ち今日の第一高等學校の前身で、英語學校が一變して大學豫備門となり、再變して第一高等中學校となり、三變して第一高等學校となつたのだ。それで若し予が神妙にその儘居たならば、鰻上りに予も法學士か文學士かの末班には列してゐたであらうが、何やら此處も氣に喰はなくなつて、遂に叔父達の反對を顧みず、自由行動を爲して、その年の冬に京都に出掛けたのである。

曾つて內村鑑三翁の晩年、翁が云ふには、『德富さん、自分は珍らしいものを見出した。それは最

も古き東京英語學校の便覽である。それを見るに、君の名がちやんと揭げてある。然もクラスのビリだよ』と。而して『何れその中君の一覽に供しよう』と云つたが、遂ひに内村翁が逝いて、その儘になつてしまつた。併しビリでもぢつとしてゐれば、卒業は出來たに相違無い。

京都に奔つた理由

されば予の運命は善かれ惡かれ、大體に於て自業自得である。今更ら誰に向つて叱言を云ふべき理由も無い。

予が京都に走つたのは、正直のこと、新島先生を知つて走つたと云ふよりも、東京が面白くないから走つたのである。今日では東京から京都の間は、銀座から上野に行くほどの手數もかゝらぬが、明治九年の頃ではなか〳〵厄介であつた。隨分年にしては、こまつちやくれてゐたけれ共、十四の少年として寄宿したる親類の家を逃れ、同宿したる先輩の眼をかすめ、予の監督の位地に立ちたる叔父の覊絆を脫し、横濱にて數日神戸までの汽船を待合せ、京都に出掛くるには、困難

と云ふほどではなかつたが、左程容易ではなかつた。正直に云へば、予は新島先生を慕つてゐたと云ふよりも、予が郷里、熊本洋學校に學んだる當時の先輩の若干が、既に熊本洋學校の閉校と與に引揚げて、京都同志社に移つたことを聞き、その仲間に加はらんが爲めであつた。斯くて相見たのが、新島先生であつた。

新島先生との會見

新島先生は如何にして予を知られたるか、それは親しく先生より聽いたことはない。京都到著の日、同志社在校の熊本洋學校先輩、金森通倫君が、予を連れて同志社教師デビス氏宅の祈禱會に赴いた。デビス氏は今日では御所の構内になつてゐる、柳原伯爵邸を借りてゐた。その邸はかなり廣くはあつたが、當時既に荒れてをり、それを其儘西洋流の住居化してゐた。

祈禱會で予の記憶に殘るものは、日本部屋の中に小さきストーブを据ゑてあつたこと。その集會者の中に、日本服に靴を履き、西洋婦人の帽子を冠りたる、肥胖なる婦人のあつたことである。

この婦人が予と少からざる交渉を惹起したる、新島先生夫人であることは、後から判つた。

その晩、新島先生がその會に來てゐたか、どうかは、はつきり覺えてゐないが、兎も角も予は新島先生から案内を受けて、その翌晩か、翌々晩か先生の宅を訪ふことゝなつた。その宅は今日の新島會館の附近で、一寸横町を東に入るところであつた。

此處も日本家で、普通の京都流の家であつたが、先生の書齋は直ぐ入口にあつて、其處にはストーブが据ゑてあつた樣に覺えてゐる。先生の顏は色は青白く、眉は飽迄黑く、西洋流のナイトガウンを著て、房の下つた紐で腰の廻りを締めてをられたが、如何にも物腰柔和で、言葉數は多くはなかつたが、一見して予は子供心とは云はねが、少年心に惹き附けられた。

その夜予は何を訊ねられたか、何を語つたかは、記憶しない。但だ予は新島先生が予に對して、或る程度の認識を與へられたことを感謝した。記憶してゐるのは、薩摩芋で作つた、羊羹らしきものゝ二片と、當時流行し初めた、紀州ネルの襯衣二枚を、貰ひ受けたことである。先生が何故にその宅に予を呼んだかといふことに就いては、別に自ら心當りがない。但だ予が到着の夜、デビス氏の宅の祈禱會に於て、予は別段指名もせられざるに、或る機會を見て立上り、何故に京都

に來たかと云ふ様な意味を演說した。その時に如何なることを喋つたか、それは記憶に無い。但だその演說の後で金森通倫氏が予の爲に祈禱を捧げてくれたことを覺えてゐる。
多分その演說を先生が自ら聽いたか、若くは來會の夫人から聽取せられたかの爲であらう。何れにしても予は最初の會見で、心から新島先生に感服した。斯心は爾後深きをこそ加へたが、決して今日まで渝ることがない。

同志社に於ける最初の感想

新島先生を除けば、自餘の環境は、予にとつて頗る不服であつた。當時の同志社は新島先生が校長で、その結社人が先生夫人の兄、山本覺馬翁であつた。山本翁は會津藩の政治家で、維新大改革の時、會津が引擧げて京都を去つた際に、その儘居殘つて、遂に京都府の先達となつたのである。翁は病の爲明を失つたが、盲目に拘らず京都最初の府會議長に選任せられた人で、若干泰西的法制の知識もあつたが、最も財政上の先見者として知られてゐた。京都の實業家の魁であ

る、濱岡光哲、田中源太郎等は、皆な翁の門人である。松方公なども、財政の話を爲す毎に、山本覺馬の名を擧げてをられた。

然るに同志社は事實は新島先生や、山本翁の手で思ふ通りに運んでゐず、殆んど宣教師全盛であつた。彼等は同志社をトレーニング・スクールと稱して、日本傳道師製造所と心得てゐた。而して新島先生を日本の偉大なる先生とせず、東洋人で米國宣教師の中に伍してゐる一人として、待遇してゐた。彼等の眼中からすれば、恐らく東洋人である新島先生を、米國宣教師同樣の待遇を爲すことは、特別の恩惠とでも心得てゐたかも知れない。

當時の新島先生は、内に於ては宣教師等に種々の難題を持出され、外では耶蘇教嫌ひの槇村正直が知事であつて、有心無心、凡有る手段の迫害をした。而して熊本から來つた、所謂る熊本バンドと稱する者は、彼等の師であつた、キャプテン・ゼンスを崇拜し。先生とゼンスとを常に比較して、ゼンスをより大なる者とし。先生をより小なる者とし。先生に對して、或は先生の學識の不足を訴へ、或は先生の才力の稀薄なるを蔑り、或は先生の辯舌の雄偉を缺くを笑ひ、先生の如何に偉大なる、山をも動かす意志の力が、謙遜なる外套の中に潛藏せられたるを、知らなかつ

た。聞くところに依れば、先生は嘗て彼等に對して、諸君が若し豫想に反して失望したといふことであれば、旅費の才覺は、此方にて引受けるから、遠慮なく同志社を去られたし。さもなければ何卒心を協はせて共に同志社を守立てゝ貰ひたいと赤心を吐露されて、それで彼等も同志社に止まることになつたといふことである。

斯る場合に於て予は、當初から先生の信者として、先生の爲に義憤を感ずることが一にして足らなかつた。理つて置くが、予は熊本から來た連中とは、洋學校では同窓であり、殆んど皆な先輩であつたが、併し予は決して熊本バンドではなかつた。予は初からキャプテン・ゼンスなる者が嫌ひであつて、彼には何も感心する點を見出し得なかつた。それは予が下級であつて、直接彼と交渉する機會が無つた爲でもあらうが、兎に角予は彼が嫌ひであつた。今少しく廣く云へば、彼ばかりでなく、西洋人は皆な嫌ひであつた。

従つて同志社に於て、先輩共が新島先生に對する態度に就いては、鮮からざる不滿があつた。特に宣教師等に對しては、最も大なる不滿があつた。同志社の生徒の中には、用事も無いのに、宣教師の門戸に出入し、或は若き女教師などのステッキ・ボーイとなつてゐる樣な者が、まゝあ

つたことは、日本男兒の面目を毀損するものとして、頗る苦々しく思つてゐた。されば予は又た同志社を飛出したくなつたが、さりとて別に行く所もなく、同時に又た新島先生の許を去ることが、何となく心淋しかつたから、つまり新島先生に惹き著けられて、十四の暮から、十八歳の前半まで、兎も角も籍を同志社に置くことゝなつた。

新島夫人對予

予と新島先生の關係を說くに就いては、是非共、夫人に言及せねばならぬ。新島先生夫人が何人であるかは、予が此に語るまでもなく、『會津戊辰戰史』に左の通り書いてある。

川崎尙之助の妻八重子は、山本覺馬の妹たり。圍城中に在り、髮を斷ち、男子の軍裝を爲し、銃を執つて城壁又城樓より、屢ゝ敵を斃せり。覺馬は西洋砲術を以て名あり。八重子は平生之を兄に學びて練修し、萬一の用意を爲せしなり。或人婦人の戰に參するを諫めたるも八重子聽かず、進擊ある每に必ず竊に隊後に加はれり。此の日八重子は城兵と共に城を出でんとす

るに當り、和歌を賦し、潸然として涕泣す。人皆同情の感に堪へざりきと云ふ。

明日の夜はいづこの誰かながむらん

なれし大城にのこす月影

この八重子とあるのが、即ち先生の夫人である。予は別に此の如き履歴の持主といふことは、詳しく知らなかつたけれ共、山本覺馬翁の妹であり、且つ會津籠城を爲し、天晴手柄をした婦人であることだけは知つてゐた。

ところが予の如き家庭に成長したる者は、夫人の先生に對する態度が、如何にも腑に落ちぬことが多かつた。それは詳しく說く必要はないが、我等の眼に餘るほど、あまり馴れ〳〵しく見えた。第一、夫人が先生を語るに、『襄、襄』と云はれることが、氣に喰はなかつた。

而して我等の眼には、夫人が我等と先生と相對する時に、餘り先生に對して、その尊嚴を冒瀆するではないかと思はるゝ樣な言動が、甚だ不快に感ぜられた。予は正直のところ、先生に對しては、何人よりも、恐らくは言葉や態度は姑らく措き、心の中では最も尊敬したりと信じてゐる。甚だ口廣きことではあるが、先生の深く藏められたる價値は、予最もよくとれを知つてゐると信

じてゐた。

そこで予は、義憤といふ言葉は、斯る場合には使用が出來るか、出來ぬか知らぬけれ共、夫人に對して義憤を感じ、それが迸つて、同志社に於ける演說會で、思切つて先生夫人を攻擊した。今から思へば、冷汗三斗、如何に予が先生の尊嚴を護持せんが爲にしたりとは申せ、先生の半身と見るべき夫人に對して、攻擊を加へたのは、更らにより大なる先生の尊嚴を冒瀆する所以であることは、當時年少氣鋭（十五六歲）にて氣が付かず、それも一度ならず、二度ならず、隨分手嚴しくやつたが、今更ら慚愧に堪へない。ところが先生はその事に就いて一言も予に向つて云はれるところもなく、又たその爲に予に對して何等先生の態度が變化したことがなかつたことは、如何に先生が寬大の心を以て予を待たれたかといふことに就いて、今更ら感激の至りに堪へぬ。

夫人も亦た九州の端つくれから出た小悴が、隨分勝手な口をきくとて、心の中では怒られたでもあらうが、別段予に對して惡びれたる態度も示めされなかつた。これも流石に會津の生んだる女性であると言はねばならぬ。

新島先生のインテレスト

今から思へば斯る無禮なる言動を逞しくしつゝ、平氣で新島家に出入し、時偶ま夫人手料理の五目飯の馳走に與かりたるは、自分ながら今から考へて不思議でたまらない。予は當時先生からは、代數や、物理學、心理學、及び四福音調和論などを授けられた。併し講堂に於ける先生と予の關係は、當り前以外に何等語るべきことはなかつた。

但だ先生に就いて予が知るところを擧ぐれば、先生は毎日几帳面に、恰も時計の如く、自宅から同志社に出掛けられた。而して何時もその教授せらるゝ書籍などを、黒い革袋に入れ、それを斜めに肩から吊つてをられた。その革袋は、昔の小學生徒がよく使用したものゝ型が大きいものである。何時かの折に聽いたが、それは先生が米國留學中、革屋から革を買つて、自ら製作したといふことであつた。

先生は本來器用の人であり、大概のことは自らせられた。これも少壯時代、航海生活が役に立

つたであらうと思ふ。而して先生のインテレストはなか〳〵廣かつた。先生の宅には、多くの貝殼やら、鑛石などが、應接間に飾つてあつた。それは先生が旅行中に、自ら採集したものである。先生は科學の興味もあつた。特に地質學などには、最も興味があつた。何時も鐵の小さき鎚を携へて、こつ〳〵岩や石を叩かれた樣に覺えてゐる。

又た書は先生の大人が、安中藩主の祐筆であつた爲に、その傳統を承けて、なか〳〵立派であり、繪も一通りは描かれた。それでクリスマス・カードなどは、自ら作られたものもある。旅行をさるれば、スケッチなども自らせられた。又た歴史にも極めて興味を有つて、隨所の古文書なども、自ら謄寫せられたものがある。

併し先生の最も大なる興味は、天然よりも人であつて、到る處その土地の人物と會見し、自ら得るところもあつたが、又その福音を常に廣く施すことを、天職と心得られてゐた。予が先生と初めて相見た時には、先生は漸く三十四歳の壯年であつたが、然も當時から先生は睡眠劑を飲まねば、安眠は出來なかつた。それで先生の身體が已に普通の健全體でないことは判つてゐた。

又た先生とは兎狩りに行つたこともあるが、その頃から心臟には多少の病が宿つてゐた樣であ

る。先生は銃獵には頗る興味があつたと見えて、京都府は勿論、大阪府の方面にも出獵に赴かれた。先生が雁を射たれた話などは、親しく先生から聽いたことを覺えてゐる。

予とキリスト教

予は明治十年、十五歳の時、先生が未だ自宅を新築せられざる以前、初めて會見したる先生の借家に於て、先生から洗禮を受けた。

當時予はキリスト教に就いても、正直のところ深く研究した譯でもなく、只だ先生が信じた宗教であるから、洗禮を受けたのであつて、予を天國に案内する者は、ポーロでもなければ、ペテロでもなく、勿論キリストでもなく、新島先生一人あるのみで、實は先生を信じて、洗禮を受けたのである。

その時分アメリカに何かの事件があつて、教會より――その時分は教會の號は出で來らず、公會と稱してゐた――寄附金を集むることになつた。その時予は一人異論を持出して云ふには、『自

分は如何にキリストの道が、愛の道であればとて、只今自分の故郷の熊本は、戰さの巷――西南戰爭――であるのに、それを他所にして、寄附することは、御免蒙りたい』と云つた。

而して其後西南戰爭罹災の人々の爲に、寄附金を募つた際には、予は大奮發にて、金五十錢を投じた。五十錢と云つて、今日では莫迦にする者もあらうが、明治十年西南戰爭の頃は、予は家庭とは全く隔絶し、窮乏のどん底に陷つたもので、當時五十錢の奮發は、可笑しい樣であるが、予には大奮發であつた。

予と新聞記者

扨て洗禮は受けたが、其後追々眞面目にキリスト教を研究して見れば、種々の疑問が山の如く出で來つた。そこで『キリスト教證據論』などゝいふ本を讀み出したが、それ等の書物を讀めば讀むほど、愈々疑問は湧き來つて、予は生れて初めて大なる煩悶に出會した。

併しそれ等の問題を、新島先生に向つて糺す勇氣もなかつたが、實は糺したとて、到底新島先

生が予に向つて、その迷ひを解き得るものとは信じ得なかつた。その中に種々のことが出來て、明治十二年、予が十七歳の時には、未だ學校の課程は、途中であつたが、予は病氣保養かた〴〵豫て當時から新聞に興味を有つてゐたから、先生の紹介を得て、愈々神戸に赴き、『七一雜報』に從事することになつた。

『七一雜報』とは、一週間に一度、神戸で發行したる、キリスト敎の雜誌で、今村謙吉といふ人が發行人であり、村上俊吉といふ人が編輯人であつたが、その經營は米國宣敎師の手にあつたらしい。その社が即ち福音社である。予は今村家に寄宿して、兩三日編輯に手傳つたが、編輯の監督には、米國宣敎師のギューリック氏がゐた。

ところが西洋人と一緒に仕事をするといふよりも、西洋人の指圖の下で筆を執るなどゝいふことは、予の性分に合はず、恐らくは一週間經つか經たぬ中に、さつさと神戸を引擧げ、京都に歸つて來た。如何に予が神戸より引擧げることの急速であつたかは、當分の別れとて、京都で友人等と寫眞を撮つたが、歸るまでそれが未だ出來上つてゐなかつたことで判る。

予は同志社の食堂に入つて、食事を爲しつゝあつたところ、人皆なきよろ〳〵予を眺めて、幽

靈ではないかと疑つた程である。然も予はその事に就いて豫じめ新島先生に理つた樣にも覺えず、歸つて來ても、何等挨拶もしなかつた樣である。

今から思へば、我儘なことをやつたものと、慚愧の至りに堪へぬが、但だ予が新聞記者生活は、此時に初つたと云ふも、差支あるまい。然もそれは實に新島先生の紹介であつた。

同志社退校の經緯

扨て愈ヽ予が退校の一段に就いて話さねばならぬが、當時は予と臭味を同じくしたる大久保眞次郎、家永豐吉等は、同志社を飛出して、東京に在り、屢ヽ予を招いたが、予は何やら同志社を去るのが心殘りがあつて、彼等と行動を與にせず、兎も角も、卒業までは在學しようと決心してゐた。

ところが予より中を一年隔てたる次の級に、甲乙の二組があつた。それが學校の都合で、一級に編成替へすることになつた。下の組は上の組と合することを否む理由は無つたが、上の組は下

の組と合することを、恰も故らにその學年を延長せられたと同様に考へ、學校の處置が甚だ公平を缺くといふ様に思ひ、盛んに苦情を申立てた。

その組には偶然にも予と懇意の者が鮮くなかつたから、予は慨然その組に味方して、大いに反抗運動を煽動した。その舉句誰の手にも納まらず、甚だ困難の場合に陷つた。ところが或日例の如く新島先生が朝禮に際し、話を初めたが、先生は『斯る問題の生じて、學校の平和を缺くことも、畢竟自分の不德の致すところであるから、自ら諸君の前に己を懲罰す』と云つて、鞭を揭げて左の手を叩いた。餘程力を入れられたと見えて、その杖は折れて三つとなつた。

實は朝禮の初まる際、その日に限つて、變な杖を携へて入つたから、何事であらうと思うてゐたが、斯る始末であつたから、何れも駈付けて先生を止め、それで一切の問題は落着し。先生に對して餘計の心配をかけたることを詫び、一段落は濟んだ。その時先生が

吉野山花咲く頃のあさなく
　心にかゝる峯の白雲

といふ古歌を頌して『自分も一日たりとも諸君の爲善かれかしと思はぬことはない。然るに此の

如き事件を生じたといふことは、事志と違ふ』と云はれたからして、爾來その歌は當時の學生間に膾炙し、不平組は故らにその歌を大書して、その周圍に集り、寫眞を撮つたほどであつた。

その騷ぎの時の書簡が、幸にして今も予の手許に保存せられてゐるから、左に掲ぐること丶する。

第二年初級之一統に小生儀今夕面會いたし度候間、晩食後早々拙宅迄被參候樣、兄より御通知被下度、且成丈靜にして被參候樣仕度候。兄に於而も御都合出來候はゞ、今晩七時過頃なり、又は其前なり、御都合よくば晩食後なり、御獨に而御越し被下候はゞ、色々御相談仕度義有之候間、何卒御足勞にて奉希候。此段得貴意如此候也。

四月十二日　　新島襄

德富兄

當時此の手紙を得て、その狀袋に予が何やら詩か句の如きものを書いたものが殘つてゐる。

それには、

巍然吾驚是泰山。溫然吾喜是春風。

と書いてあるから、餘程先生の誠が予の心に徹したものと思ふ。（圏點は原文のまゝ）

× × ×

扨これは四月十二日のことであつて、話はそれで濟むべき筈であつたが、其後又再び種々の問題が起つて、予は愈々厭氣がさし、同志社を卒業間際に去ることになつた。それは同年五月の下旬であつたと思ふ。

今何故に厭氣がさしたかと云ふことを覺えてゐないが、兎に角、是が非でも同志社を去つて、東京に行くことゝなつた。予は學校に行く積りでなく、東京に行けば、直ちに日報社の福地源一郎を訪ねて、出來得べくんば『日日新聞』の記者となる積りであつた。

當時予と與に同志社を退校を申合せた仲間は、隨分澤山あつた。それで予等は同志社で所有したる机とか、書物とか、一切は賣却し、愈々東京に赴くことになつたが、さしより予には旅費の貯へが無かつた。外に相手もなかつたから、新島先生に向つて、立替を申込んだところ、流石の先生も、それには餘程立腹したと見え、『俺を踏みつけて同志社を飛出すとは、怪しからぬことであるのに、その旅費まで取つて行くなどゝいふは、餘りにも大膽である。徳富の顏は千枚張り

ではないか』といふことを、新島公義に漏らされたといふことを、公義から予に知らされた。

新島公義は、先生の弟の養子で、先生脫走中は、その弟が家を繼ぎ、弟が死んだから養子が繼ぐといふ譯で、公義は血緣は續かぬが、先生の義理の姪で、新島家にとつては、大切なる者であつた。ところが亦た公義が予等の仲間の一人であつた。

先生は金は貸さなかつたが、寫眞を呉れた。その寫眞の裏には斯る文句が立派に書いてある。

『大人とならんと欲せば、自ら大人と思ふ勿れ。明治十三年五月二十四日』

元來大人とならんと欲せば、自ら大人と思へと云ふべきであるが、それは逆に『思ふ勿れ』と書かれたのは、餘程予を自惚れ多き少年と認められて、予に對して、頂門の一針を下されたものであらう。

愈ゝ先生と別る

當時退校を申合せた仲間は、かなり多かつたが、愈ゝとなれば心細きほど鮮なかつた。固より

示威的に退校する積りでもなかつたが、先生も亦た最後まで喰ひ止めることに努力した。先生は予に向つて『公義は予の家族であるから、貴君と與に東上することは、許可しない。又た津田元親はその父津田仙君より依頼せられて、直接予の監督してをる一人であるから、これも斷る』などゝて、それから予の同級生である、河邊といふ漢に向つても、何故に同志社を辭めて、東京に行くか、飛んで火に入る夏の蟲とは、君等のことであるなどゝ云つて、盛んに先生は詰問し、予は河邊に代つて大いて辯疏した。予等は既に荷物を携へてをり、見送りの人は先生の門前から門内に立ちつゝあつた。我等は一寸先生の顔を見て別るゝつもりであつたのに、應接間に招ぜられ、長い論談に亙り、漸く先生の許を辭して、門を出たのは、既に晝近くであつた。

それより殆んど五十年を隔てたる後、一友を案內して、先生の故宅を訪うた際、夫人は予と相對してゐる机を指して、『この机の前で貴君と襄とは相對して、貴君が頻りに此机を叩いて、議論をされた』などゝ云つて、昔話をされたことがあつた。

扨てそれからブラ〳〵歩いて、三條大橋の畔に至つた時に、空腹でもあるし、此處で晝食をして別れようと、相携へて橋畔の飯亭に上り、扨て愈ゝ勘定となつた時に新島公義が、『それは僕

が拂ふ』と云ふから、予は『いや、僕が拂ふ』と爭つたところ、公義が『實は伯父が立際に、せめて晝食でも馳走してくれと云つて渡した』といふ話をしたから、『さては先生からやられた』と、今更ら昂奮したる氣分も一時に納まり、何んと云つても先生は我等よりも、一枚も二枚も上である。寧ろ再び同志社に歸らうかと思つたが、いや切角飛出した以上は、是非東京に行つて、新聞記者にならうといふ我慢をし、三條大橋を過ぎて、見送りの人々と別れ、その夜は草津に泊つた。

洗禮返上

東京に著いてから、先生と予との間に、一の問題が出で來つた。先生は『東京に行つても、教會には出席せらるゝであらう』と駄目をおされたから、『勿論である』と、答へた。答へはしたが、實は予の心は教會に向つては進まなかつた。併し約束したことであるからと思ひ、當時下谷練塀町に下宿してゐたが、その附近に植村正久なる人が、教會を開いてゐた。それで一日其處を

訪問したが、所謂機緣熟せず再び訪問もせず、やがて先生に向つて、『今後は教會にも出席しない。又たキリスト教にも段々疑問があるから、切角先年洗禮を受けたが、それは返上する』といふ樣な意味の手紙をやつた。

ところが先生は約束を違へるは、男兒の事でないなどゝ云つて、盛んに予を攻擊して來た。併し正直のところ、予はキリスト教には全く惱まされてゐた。新島先生の許を離れて見て、予がキリスト教を信じたのは、要するに先生を信じたのであることを、愈々自覺した。

予は孔夫子や、釋迦牟尼や、ソクラテスなどに對しても、皆なそれ〴〵敬意を表する如く、キリストに對しても、敬意を表するつもりであるが。併し如何に考へても、キリストを愛するといふ如き氣持には、なり得ない。神といふことも、キリスト教で說く、人格ある神樣は、何やら神樣を冒瀆する如く考へられて、予には受入れられない。

それを强ひて月並みの信者と與に、教會に出入するといふことは、我自らを欺くことゝなると思うたから、男らしくそれを先生に向つて告白したのである。恐らく此の一事は、先生にとつて、非常なる傷手であつたらうと思ふが、それも致方なかつた。

木曾路の同行

話代つて同年の冬、新聞記者たる志も、東京では思ふ樣に達し得られず、今一息き勉强して、再擧を計らうと思ひ、歸國したるところ、意外にも新島先生は傳道の用で熊本に來り、旣に出發せんとしたるところ、船便の都合にて延期となつてゐる際で、それが仕合となつて、熊本にて先生と相見ることを得た。

此の會見は迷へる羊か、山羊かは知らぬが、再び元の羊飼に歸つた樣な氣持が、或は先生には、したかも知れない。それ程でなくとも、兩者の間に蟠りを生ぜんとしたことは、春の薄氷が、春風に吹かれて、忽ち解けたる如き心地が、双方の間に出で來つたであらうと思ふ。

それから飛んで、明治十五年の夏には、京都に赴き、先生の宅に厄介になり、愈ゝ先生と中山道を旅行することになつた。此の旅行は予にとつては、今も尚思ひ出の種である。旅行中にも先生は、予に屢ゝキリスト敎を說き、特に木曾福島では、日曜であるとて一日休息し、その一日は

專ら予を說諭に費ひやされたる如き趣があつた。

併し如何に先生の言でも、予が良心に信じられないことは、致方なく、キリスト教の一點では、遂に先生の思ふ樣には參らなかつた。鳥居峠を越ゆる際には、日は暮に垂んとし足は疲れたが、それでも先生から懇々キリスト敎の話を持掛けられたのには、聊か閉口せざるを得なかつた。爾來先生は屢々書を寄せて、尙ほ予が善良なるキリスト者たらんことを、期待してをられた。

併し此の中山道の旅行は、小六ケ敷きキリスト敎の話ばかりでなく、隨分面白きこともあつた。先生は本來の蕎麥好きで、そばに對しては殆んど限も無つた。そこで寢覺めの蕎麥屋には一同腰を下して、蕎麥を喰ひつゝ競爭が始つた。先生は、九杯喫したが、予は死んでも先生に勝たねばならぬと決心し、先生より更に半杯を加へた。その爲に予の勘定は先生が拂ふことゝなつた。又た輕井澤の追分でも再び蕎麥屋に立寄つたが、此處では、予も懲りたが、先生も懲りたと見え、銘々適當に喫した。曾つて同志社に在つた學生が、東京の蕎麥屋に飛込んだところ、先生が悠然と蕎麥を食べて行つたのを見て、吃驚したといふことである。

先生は己の欲するところを人に施すと見え、『國民之友』發刊の際には、御祝とて、更科そばを

贈つたが、殆んど事務所の天井に達するほど澤山であつた。
歳月は矢の如く、先生は同志社を、最初は明治專門學校として、一歩を進めんと企て、それがやがては同志社大學設立の計畫となつた。

新島先生と同志社大學運動

予は明治十九年に『將來之日本』を著述し、二十年の二月には、『國民之友』を發刊した。當時予の心境を語れば、これまで隨分新島先生に心配もかけ、苦勞もさせたと思ふ。せめて今後は先生の仕事に及ばずながらその代償といふではないが、安心と慰樂とを與へたいと考へ、それには同志社大學創立のことに、微力を效すが第一であると考へたから、予も爾來、先生が明治二十三年一月二十三日、大磯に於て永眠せらるゝまで、聊か力を盡した積りである。

その顛末を語れば、餘りに長くなるから、それは一切此には省略することにして、兎に角同志社大學運動を中心として、予と先生との關係は、これまでに幾十倍するほどの親し味を加へ來

つた。正直のところ、予は別段同志社そのものに對して愛着を持たなかつたが、同志社に力を竭すことが、先生に對する恩を報ずる所以であると考へ、その爲に驀地にその爲に微力を效したのである。

予が果して幾許先生に對する予の希望を實行し得たか、語ることは出來ぬが、尠く共先生は予に向つて、多大の認識と感謝とを與へられたることから考へて見れば、予の志も決して等閑ではなかつたと思ふ。若し先生の晩年に、然も先生が病軀と鬪ひつゝある間に、與に語る人ありとしたならば、固より予一人ではなかつたが、予もその中の一人であつたには、間違ひあるまいと思ふ。

我々は同志社問題を中心として、政治上、社會上、凡有る問題に就ても互に相語り、而して兩者の意向が常に共通し、一致してゐたことは、單り先生ばかりでなく、予にとつても、非常なる愉快であつた。實は同志社運動は、同志社そのものゝ爲は勿論であつたが、新島先生の爲に非常なる影響を來した。一面から云へば、廣き日本の社會に先生を紹介した。同時に日本も亦た新島先生に紹介せられた。同志社大學運動までは、新島先生は殆んど一種の箱入り娘も同樣であつ

たが、この運動の爲に先生は大なる日本の宗教家であるばかりでなく、大なる教育家、大なる社會人、大なる愛國者、大なる公人として、天下より認識せらるゝに至つた。これは全く副産物であるが、見様次第では、副産物の方が却て大であつたかも知れぬ。

又た當時予は自分が讀んで面白き書物などは、屢ゝ先生にも勸めたことを覺えてゐる。例へば當時評判であつた、ワード夫人の『ロバート・エルスミヤー』の如きも、予はそれを先生に用立てたことを記憶してゐる。尚ほユーゴーの小説なども同様であつて、先生もユーゴーの『ナインテイースリー』を、餘程愛讀せられたと見え、そのことに就いては、屢ゝ予に語られた。

先生は愈ゝ同志社大學が出來る曉には、神學部、普通學部は、京都にその儘殘し置き、政治、經濟、法律、文學などゝいふ部は、これを東京に持つて行く積りで、その事に就いては、何れから發議したるか知らぬが、その話は我々共の間には、かなり進行してゐた。

而して先生は大磯に掌大の地を購ひ、そこに住居して、東西の同志社に働きかけるつもりであつたらしい。土地購求のことは、先生の末期の時に漸く知つて、登記は多分先生死後に出來たと思ふ。

先生は明治二十二年の末から、二十三年の初は、大磯の百足屋別莊に暮された。その時の詩に、

送歳休悲病羸身。鷄鳴早已報佳辰。劣才縱乏濟民策。尙抱壯圖迎此春。

とある通り、先生の心境は、全くその通りであつた。

先生の永眠

予は新年に先生を訪ひ、種々物語りをして別れた。當時予は二月一日より『國民新聞』を創刊する計畫があつたから、なか〳〵多忙であつた。斯くて一月二十日に新聞發行披露の爲に、從來『國民之友』の特別寄書家、其他種々の緣故を持つてゐる人々を芝公園內の三緣亭に招待した。愈々當日の午後となり、予は珍らしくフロツクコートを著込み、瀧山町（只今銀座西七丁目）なる床屋に顏を剃りに赴いた際、端なく社の小使が其處まで一通の電報を齎らした。それは「先生危篤至急來れ」といふ事であつた。予は豫ねて新島先生の心臟病が、不治であることを知つてゐた。而して早晩先生と死別せねばならぬ時期の來ることを知つてゐた。併し斯迄急に、その事

が迫つて來ようとは思はなかつた。

予は顏を剃り終つたか、終らなかつたか、それさへ氣がつかぬ樣に飛んで歸り、當夜三緣亭に招待するお客の接待は、湯淺治郎君に依賴し。萬一の場合を慮り、取敢へず小崎弘道君に通知して、至急大磯に赴かれん事を通じて置いた。これは別儀でも無い。愈〻先生が最期に迫られた場合には、予は宗教者としては、何事もなし得ない。何はともあれ、その場合に牧師たる小崎君が第一必要である。（校正して此に至り、端なく昨日靈南坂敎會にて、小崎翁を葬送したることに想及し、潸然涕下る）

斯くて予は取るものも取敢へず、新橋から汽車に乘り、大磯に著し、停車場から百足屋の別莊に至りたるに、呻吟の聲は殆んど門外に聞えてゐた。それから二十三日午後二時二十一分、先生の永眠迄、殆んどフロツクコートの著詰めにて、徹夜の看護をしたが、先生は遂に逝かれた。

先生はその逝く前に種々の遺言をせられたが、それを聽いてゐた者は、小崎弘道氏及び京都から來られたる、先生の夫人であつた。一切は予が悉く筆記した。先生は固より靈魂不滅を信ずる人にて、死を恐るゝ人では無い。併し當時は注射などゝ云ふ事も、思ふ樣には行はれず、その

苦痛は實に傍目に見てゐるのが、又一段の苦痛であつた。

予は先生の逝るゝや、先生の夫人に向つて斯く云つた。

『私は同志社以來、貴女に對しては寔に濟まなかつた。併し新島先生が既に逝かれたからには、今後貴女を先生の形見として取扱ひますから、貴女もその心持を以つて、私に交つて下さい。』

斯くて爾來予と新島夫人とは、同夫人が米壽に達して、天壽を終はる迄、その言葉通りの交際をした。及ばずながら老夫人も予を賴りとし、悉く相談せられ、又た遺言にて、その墓碑をも予に託せられ、今や若王寺山頭には、予が勝先生に乞うて銘したる、新島先生の墓と、夫人の遺志に從つて予が銘したる夫人の墓とは、相竝んで立つてゐる。

凡そ予にとつての打撃は少くないが、新島先生の永眠ほど、大なる打撃はなかつた。明治九年、予が十四歲の少年時代から、不思議の緣で相見て以來、終りに近くに從つて、兩者の交情は愈ゝ親密になり、最早や先生も予に向つてキリスト教の問題を持出すこともなく、互に國家の前途に就いて、大いに爲すところあらんことを期してゐたが、不幸にして先生を失ひ、予も全く茫然として自失した。

理つて置くが、予は決して先生に別段求むるところある譯でもなければ、賴むところある譯でも無つた。但だ先生こそは眞に我が大なる同志であると考へてゐたからである。甚だ口廣き樣であるが、予が先生に及ばざるところは、所謂天の梯子をかけても及ばざるも同樣であるが、さりとて予も亦た先生に對して、先生の最も必要にして、且比較的乏しき方面に向つて、微力を效し得るものと信じてゐた。時間が進むに從つて、正直のところ予が先生に貢獻する程度は、愈々多くなつて來たと信じてゐた。

未完成の人物

子供の時に見た故鄉の山とか、川とかが、當分故鄉を離れて後、歸へり來て見れば、餘りにその現實が裏切られてゐたのに驚くことがある。これ程大なる山は無いと思うたる山が、それ位の山は何處にでもあり。頗る大なる川と思うたる川が、殆んど問題にもならぬ位の小川であつたり。今更ら子供の時の眼を疑ふことがある。

人間に就いてもその通りであつて、少年時代の眼に映じたる英雄が、中年以後では、尋常一樣人たる例は鮮くない。併し新島先生に就いては、如上の例は適用されない。予は今日に至るまで、尙ほ先生は明治年間に於ける、大なる日本人であつたといふことを、確信してゐる。

但だ遺憾であることは、先生が遂にその大を完成しなかつたことである。先生は五十未滿、四十八歲で逝いた。四十八歲と云へば、人間が既に完成すべき年齡に達し、若くは過ぎてゐたと云つてもよい。ところが新島先生に就いては、左樣に云ふことは出來ない。何んとなれば、その中から先生の在米十年を差引く必要があるからだ。

今十年生存したらば

先生は元治元年、數へ年二十二歲で、日本を出奔した。歸朝したのは、明治七年、卽ち先生三十二歲の時である。先生の洋行は決して先生の生涯にとつて、不利益ではなかつた。併し無遠慮に云へば、先生は餘りに長く外國に滯留した。その爲に先生は日本人として知るべき多くのこと

を知らず、知らぬでも差支ない多くの西洋のことを知つた。詰り先生は現代に働く日本人としては、不必要なるものを多く得、同時に必要なるものを收得する機會を失うて日本に歸つて來た。別言すれば、日本的教養をより少くし、米國的教養をより多くした。それで先生は本來の眞面目に、稍米國流の鍍金をした傾向がある。先生が歸朝以來、そのことに氣付いたか否かは、予が知るところでない。

併し先生の死する前、最後の四五年間は、餘程洋行以前の新島先生に復活する傾向が見えて來た。先生は安中藩士であるが、江戸に生れ、江戸に成長したる江戸ッ兒である。而してその氣分は全く維新前の志士であつた。先生は本來の熱血男兒である。

先生は薩長、西南人の如く、眞向から尊皇攘夷を唱へなかつたが、然も熱烈なるナショナリストであり、愛國者であつたことは、決して間違ひない。先生は米國に於て、新英州のピュウリタニズムの雰圍氣に養はれたが、如何なるピュウリタニズムも、日本男兒たることを忘れることが出來なかつた。

先生は單だキリスト教を宣傳することが目的でなかつた。それが目的であつたならば、亞弗利

加に行つても、印度に行つても、差支ない。先生はキリスト教に非ざれば、日本を救ふ能はずと信じ、その爲に傳道を決心したのである。

單に教育といふことならば、何處の人民を教育するも同樣であるが、先生は教育に非ざれば、日本を救ふ能はずと決心し、教育に一身を投沒したのである。先生の對象は、一も日本、二も日本、三も日本であつた。

但だ如何にして日本に盡し、如何にして日本を救ふかといふ點に就いて、先生は餘りに長く外國に滯在した爲、稍ゝ日本の新生活、日本の心臟の新鼓動の間に、一膜を隔つるの憾みがあつた。それが漸次に脫しつゝある際に、先生は忽然として逝いたのである。

若し先生に假すに今後十年を以てしたならば、恐らくは先生の前半生に於けるそれに比して、如何に所謂る龍驤虎變したるか、端倪し難きものがあつたであらうと思ふ。遺憾とするは此事である。

予は福澤諭吉翁にも一兩度面會したことがある。中村敬宇翁も深くは知らぬが、一通りは知つてゐる。明治時代の大先生といふ人には、槪して面識があり、然らざる迄も、多少の知識は有つ

てゐる。併し新島先生は、それ等の人に對して、固より不足は多かつた。例へば中村翁の漢學に於ける敎養の如き。又た福澤翁の經世的識見、處世的手腕の如き。百の先生あるも、到底及ばなかつたであらう。

併し新島先生には、先生の流儀で又た他の人々の到底企て及ばざるところのものがあつた。

大なる日本人

先生は常に我等にキヤラクターを說いたが、先生も亦たキヤラクターの人であつた。先生は所謂る日本男兒の眞骨頭があつた。只だそれを亞米利加流の雰圍氣で深く包んでゐたから、大抵の人は、その眞相が判らずに過ぎた。凡そ先生ほど正しき意味に於ける人間味の饒き人は無つた。必らずしも理想的の人間とは云はぬが、若し人間らしき人間といふ者を、我等の知り得る範圍の中に求めば、先生は卽ちその人と云はねばならぬ。

先生は決して淡泊の人では無つた。又た恩怨兩つながら忘るゝ人ではなかつた。又た腹の底を

袖口に持出す人ではなかつた。先生は自ら節制し、容易に怒らなかつたが、心の中ではよく怒る人であつた。然も一度怒れば、その怒は恐らくは一生忘れなかつたであらう。さればこそ先生が死ぬる間際に、『自分は一切敵を許す』と云つて死んだ。若し平生許してゐたらば、死ぬる間際に、その重荷を捨てゝ行くといふ必要は無つたであらう。

我等は決して先生を世間で思ふほど、高潔の人とは思はない。先生にも我等同様、凡有る人間の弱點を有つてゐたと思ふ。併し先生は熱情の人であり、その熱情は私意私慾の爲でなく、眞に國家、國民の上に注がれてゐた。先生は決して己の爲にする人では無つた。

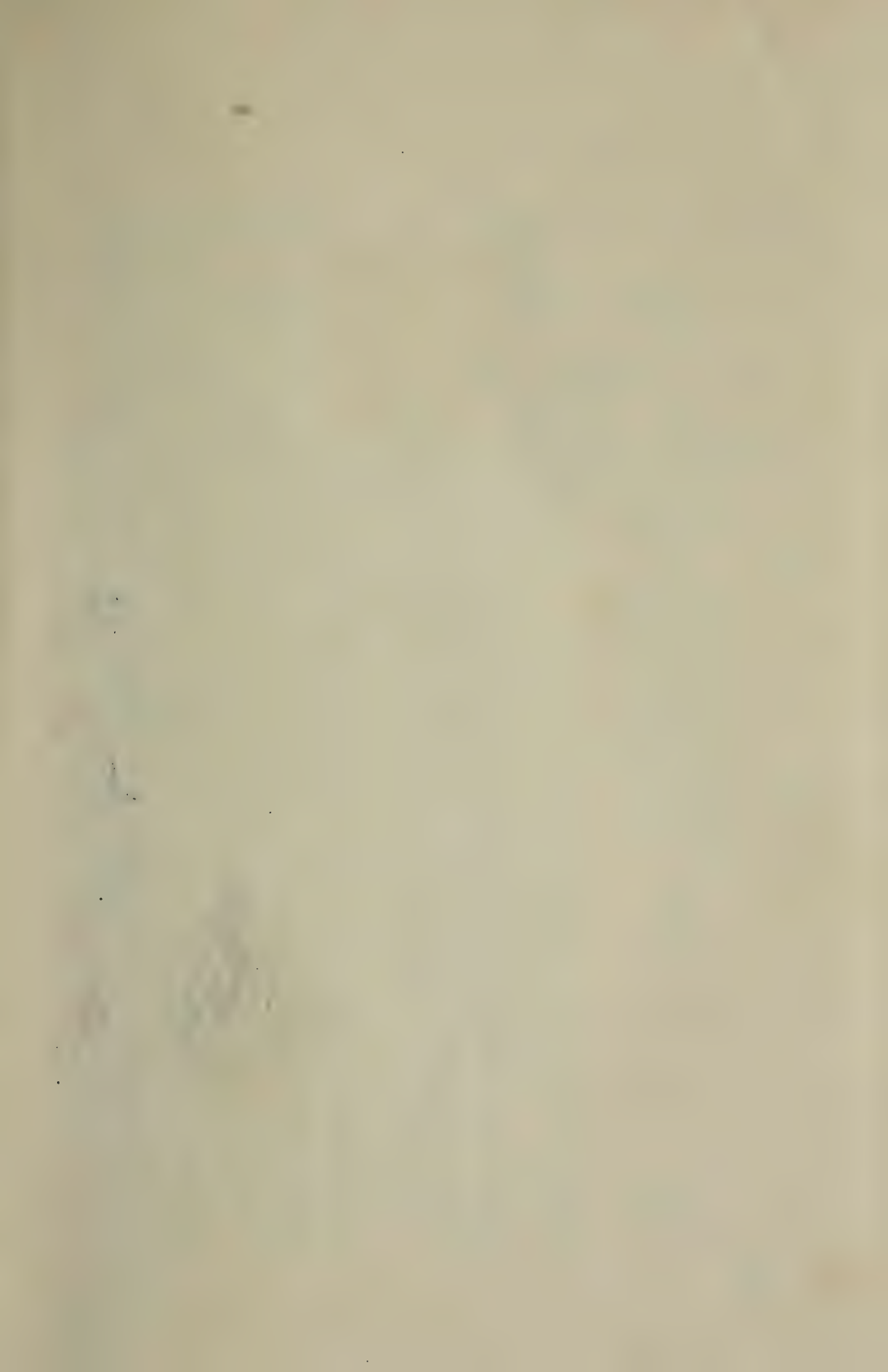
先生はキリスト教信者であり、信者といふ點に於ては、先生ほどの信者は、全く無いとは云はぬが、極めて少かつたであらう。併し先生を單にキリスト教信者と云ふことは、漸く先生の一小部分を知るに過ぎなかつた。先生は經國濟民の道として、キリスト教を主張したるものである。先生自身も亦た、經國濟民の人たる爲に、キリスト教を信仰したのである。先生は徹頭徹尾獨善の人でなく、兼濟の人であつた。

新島先生に最も感じたることとは、所謂る宗教家、所謂る道學先生などゝいふ臭味が、殆んど一點だも無いことであつた。兎角宗教家とか、道學者とかいふ者は、自分を聖人の如く思ひ、他人を罪人の如く取扱ふ者多いが、先生は人間味以外に何等も無つた。予は人間に對して、失望する毎に、人間に對して幻滅を感ずる毎に、先生を思出した。一度先生を思出せば、その失望も幻滅も一切拂拭せられて、人間はどこまでも人間と共に生活するといふことが第一義であるといふことに結著せざるを得なかつた。

先生は必らずしも理想的人間ではなかつたかも知れぬ。けれ共先生の如き人間が日本に存在したることとは、我等にとつて、大きく云へば人類に對し、狭く云へば日本人に對して、多くの尊敬と大なる誇りとを感得せしむる。

謁新島先生墓

滿山松柏任風吹。　欲語當年更有誰。

不隔幽明渝此志。　夕陽墓畔立多時。

我が交遊錄　終

昭和十三年三月三日印刷
昭和十三年三月六日發行

我が交遊錄

定價 一圓七十錢

著者 德富猪一郎

發行者 木田開
東京市麹町區丸ノ内二丁目一番地

印刷者 堀修造

發行所
東京市麹町區丸ノ内二丁目
丸ノ内ビルデイング五八八區
中央公論社
振替口座東京三四番
電話丸ノ内 五三五番・五三六番・五三七番・五三八番

大日本印刷株式會社榎町工場印刷